

博士論文

自然災害における被災情報の
表現と受容に関する研究

令和 3 年 7 月

川崎梨江

目次

第1章 序章	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究目的	3
1.3 本研究の調査対象地域	4
1.4 論文の構成	9
1.5 用語の定義	13
第2章 先行研究の整理と本研究の位置づけ	14
2.1 はじめに	14
2.2 被災情報の表現手法の分類	14
2.3 「語り部」研究	15
2.3.1 「語り部」の定義	15
2.3.2 被爆体験の「語り」の変遷	16
2.4 記憶研究	19
2.4.1 集合的記憶と個人的記憶	19
2.4.2 想起研究	20
2.4.3 社会化と個人化	21
2.5 ナラティブ・アプローチ	22
2.6 風化現象	23
2.7 本研究で対象とする研究課題	26
第3章 災害発生直後の被災情報の表現	29
3.1 はじめに	29
3.2 目的	29
3.3 方法	30
3.3.1 分析手法	30
3.3.2 分析対象	31
3.4 結果	32
3.5 考察	35
3.6 小括	35

第4章 ある被災者の被災体験の「語り」の分析 36

4.1 はじめに	36
4.2 目的	36
4.3 方法	36
4.4 結果	37
4.4.1 記述統計量	37
4.4.2 頻出語の抽出	37
4.4.3 語と語の関連の分析	46
4.5 考察	49
4.6 小括	49

第5章 被災者の「語り」の変容モデルの構築 51

5.1 はじめに	51
5.2 目的	52
5.3 方法	52
5.4 結果	55
5.4.1 記述統計量	55
5.4.2 頻出語の抽出	55
5.4.3 抽出語の出現回数と出現比率の推移	57
5.4.4 「避難」の関連語の分析	58
5.4.5 被災者の「語り」における「避難」のコンテキストの変化	61
5.4.6 新聞記事題目の分析	62
5.4.7 被災者の「語り」における新たなコンテキストの出現	64
5.5 考察	67
5.6 小括	69

第6章 先行研究への変容モデルの適用の試み 70

6.1 はじめに	70
6.2 語りの「型」と「場」の意義	70
6.3 個人的コンテキストの意義	75
6.4 個人的コンテキスト排除の問題点	76
6.4.1 公の施設の問題点	76
6.4.2 AR 体験の問題点	78

6.5 考察	81
6.6 小括	82
第7章 まとめ	83
7.1 本研究の総括	83
7.2 本研究の成果	85
7.2.1 送り手によって表現される内容の変化	85
7.2.2 受け手に受容されるメッセージの変化	86
7.3 今後の展望	87
7.3.1 記憶の持続性	88
7.3.2 「語り」の変容モデルの精緻化	88
7.3.3 コンテキストの多様性の担保	89
謝辞	92
参考文献・参考資料	93
図表リスト	100
付録	102

第1章 序章

1.1 研究の背景

「災害多発時代」と形容される今日¹、広瀬(2004)は、「災害因の発生するところに人間社会が営まれていて、しかも災害因がもたらすインパクトに十分にたえることができず、破壊的な人的・物的な損害が生じる時、災害は誕生する」²とし、次のように述べる。

より豊かで快適な生活を求める人間の営為が、それまでそこにあった自然を変えていく。このようにして集積された自然に対する人為のインパクトが大きくなっていくと、反作用としての新しいタイプの災害が、次々と現れてくる。(中略) いかに激しく自然が猛威をふるったとしても、そこに人間の営みがなければ災害はない。けれども、そこに人間の営みがあれば、とどまることなく不断に自然に働きかけるその営みそのものが、新たな災害の原因になりうるのである。³ (傍点は筆者)

この広瀬(2004)の災害の定義は、ベック(1998)が「リスク社会」と名付けた現代社会の特徴そのものである⁴。それはすなわち、産業化の進展によって不可避にもたらされるものであり、危険の分配において絶対的に安全な者は誰ひとりとしていない。

「リスク社会」の問題点を、金子(2002)は次のように指摘する。

問題は、来るべき二十一世紀がどのような社会になるのか、という点と密接にかかわっている。世紀転換期のわれわれが直面しているのは、新しいリスク社会の到来という事実である。新しいリスクとは、滅多に起きないが、一度発生すると社会に壊滅的な打撃を与えるという性質を持っている。(中略)

それはすべての人々が体験自体を共有できないことを一つの本質的特徴としている。それゆえに、リスク無防備社会がしやすい。つまり〈記憶〉にないリスクを、現在のこの社会がどのように受け止めるのかという問題を避けることができないのだ。(中略)

この新しいリスクは、〈記憶〉を共有できないがゆえに当面当座は「危険」を実感できない。しかしリスクが発生してからでは遅すぎるのだ。⁵

体験も記憶も共有できないのであれば、実体験を有する他者から学ぶ必要がある。しかし、そこには2つの問題が潜んでいる。1つ目は、実体験を有する他者は、時間経過により必然

¹ 矢守克也, “災害人間科学”, 東京大学出版会, 2009, p.19

² 広瀬弘忠, “人はなぜ逃げおくれるのか: 災害の心理学”, 集英社新書, 2004, p.27

³ 広瀬, 2004, p.21

⁴ U・ベック著/東廉訳, “危険社会: 新しい近代への道”, 法政大学出版会

⁵ 金子勝, “切り裂かれる沖縄: 〈記憶〉と〈祝祭〉の狭間で何を考えるべきなのか”, 金子勝・大澤真幸, 見たくない思想的現実を見る, 岩波書店, 2002, p.19

的に減少するということである。その問題を解決するために、広島市は 2012 年から、「被爆体験伝承者養成事業」（以下、養成事業）を開始した。広島市の Web Site では、この事業について次のように説明されている。

被爆者の高齢化に伴って、被爆体験をお話しされる方が少なくなってきています。広島市では、被爆体験証言者の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」を平成 24 年度から養成しています。⁶

ここに、2 つ目の問題がある。すなわち、体験者から「いつ」学ぶのかという問題である。この事業の問題点は、被爆者の記憶の変容が考慮されていないことである。「語り部」として自身の被爆体験を語る場合、被爆から何十年という時間が経過して、やっと語ることができるようになったという被爆者は多い。悲惨な出来事が生じると、体験者の証言が求められがちであるが、彼ら・彼女らの記憶とは、一定でも固定されたものでもなく、時間経過とともに変化していくものと考えられる。養成事業においては、その被爆体験等が「その時点」のものであるという視点が欠落しており、変容するはずである「語り」を、ある時点で固定しようとしていることに問題がある。寺田(2005)は、「語り」とは、「ある出来事を受け入れ、ある視点によって再構成する行為」であり、「語り得ないことを語りつつ語らないという選択肢」であると指摘する⁷。また桜井(2008)は、「一人ひとりの体験者が語る経験は多様であり、また語り継ぐ経験は体験者と聞き手の相互性の上に成り立つ『現在』の表象であるなら、語り継ぐ行為は過去を歴史へと固定化することではなく常に現在へと活性化することであることを忘れてはならないだろう」と述べる⁸。また、矢守(2003)は、阪神・淡路大震災の被災者 4 名の語りを、それぞれが「被災という不幸な出来事を踏まえて自らの生活世界を再構造化しようとする際に依拠する「様式」の違いを反映していると分析する⁹。ここでいう「様式」とは、言い換えれば、「語りの対象となっている『過去』に見られる個人差ではなく、語り部という活動が展開されている『現在』の時点における想起の様式」¹⁰である。そして矢守(2003)は、次のように考察する。

⁶ 広島市、被爆体験伝承者養成事業について
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace/10164.html>（最終閲覧日：2021 年 8 月 9 日）

⁷ 寺田匡宏，“災害と語り：悲劇としての三陸津波の記憶表象とその分析方法に関する試論”，国立歴史民俗博物館研究報告，Vol.123，pp.451-473，2005，p.461

⁸ 桜井厚，“序 語り継ぐとは”，桜井厚・山田富秋・藤井康編，過去を忘れない：語り継ぐ経験の社会学，せりか書房，2008，p.16

⁹ 矢守克也，“4 人の震災被災者が語る現在：語り部活動の現場から”，質的心理学研究，Vol.2，No.1，pp.29-55，2003，p.52

¹⁰ 矢守，2003，p.32

以上のことを踏まえれば、今後の課題として、「語り直し(re-storying)」の問題が浮上する。すなわち、ライフストーリーの再構造、あるいは、生活世界の再構造化という作業は、われわれの生ある限り、常に進行中の課題—安定状態の維持という課題を含め—だからである。ましてや、4人の語り手は、被災という衝撃的な体験からわずか数年経たのみである。その語りは、現時点においても変容し続けている。一時点における語りの様式にのみ注目した研究で充足することなく、より長期的なアプローチが求められる所以である。¹¹

これらのことから、「いつ」語ってもらうかによって、語られる内容は変化すると考えられる。しかしその変化は、「被災者の体験談から教訓を得る」という防災・減災への実践においては、あまり考慮されてこなかったように思われる。

記憶や「教訓」を受け継ぐための実践としての「語り」が時間経過によって変容するならば、それは、語り手にとっても憂慮すべき事態であると考えられる。なぜなら、その変容によって「教訓」を受け継ぐという目的が達成されなくなってしまう可能性が生じるからである。記憶が「風化」していく中で、被災者の「語り」がどのように変容していくかを明らかにすることは、防災・減災における個人の「語り」をどのように活用すればよいのか、さらにその効用をどのように持続させていくかという視点へとつながるため、持続可能なリスク・コミュニケーションにおいて非常に重要である。

1.2 研究目的

本研究では、自然災害における被災情報の語り継ぎの実践として被災者の「語り」に着目し、災害発生後の数年間において、「語り」の内容の時間経過にともなう変容を明らかにすることを目的とする。そして、個人の体験が被災者のメッセージとして扱われる上での、送り手によって表現される内容と受け手に受容されるメッセージについて考察する。

もしも、「教訓」を受け継ぐための実践としての「語り」が時間経過によって変容するとするならば、それは送り手にとっても憂慮すべき事態であると考えられる。なぜなら、その変容によって「教訓」を受け継ぐという目的が達成されなくなってしまう可能性が生じるからである。

時間経過による「語り」の変容の様式は、個々人によって異なると考えられる。加えて、「語り」の変容について、送り手が常に自覚的であるとは限らないと思われる。しかし、そこに傾向性を見出すことができれば、体験者の「語り」を持続可能な防災・減災へ役立てることの一助となると考えられる。本研究においては、時間経過により「語り」が変容すること、そしてその変容には傾向性があることを仮説とした。

¹¹ 矢守, 2003, p.52

1.3 本研究の調査対象地域

2014 年 8 月 20 日、広島市で局地的な集中豪雨により大規模な土砂災害が発生し（以下、8.20 広島土砂災害）、災害関連死 3 名を含む、77 名の生命が失われた。被害の概要を、図 1-4、表 1、表 2 に示す。

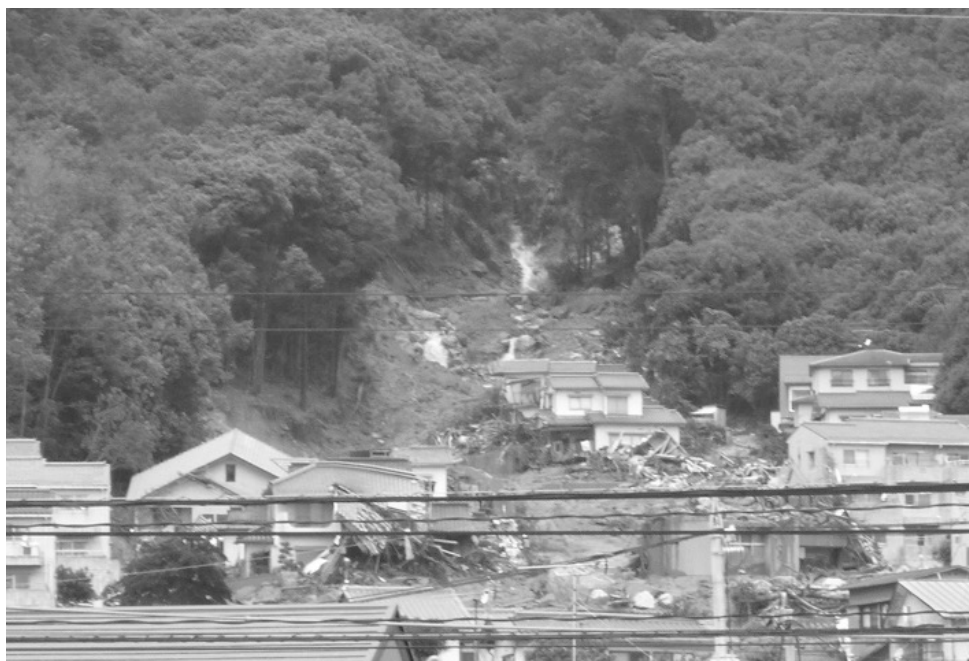


図 1 土石流に巻き込まれた家屋（2014 年 8 月 20 日、被災者撮影）



図 2 8.20 広島土砂災害発生地域（Google マップより筆者作成）

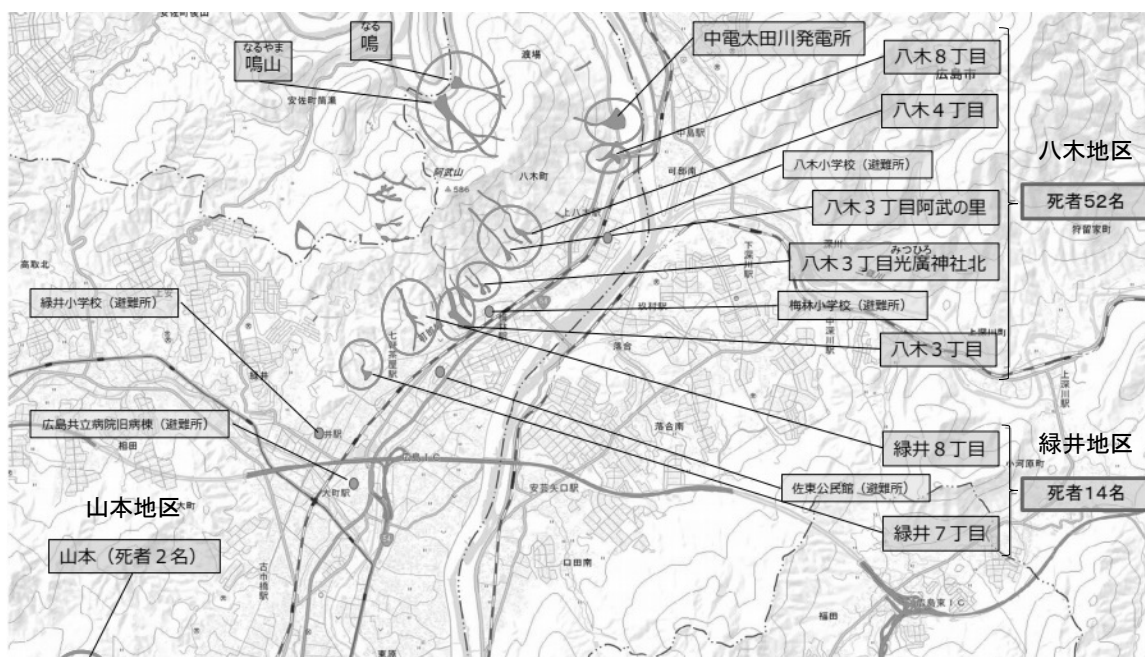


図 3 広島市安佐南区の被災箇所（内閣府¹²）

¹² 内閣府（防災担当），”平成 26 年 8 月 20 日に発生した広島市土砂災害の概要”，2014，p.10，平成 26 年 8 月 20 日 広島土砂災害 被災箇所（広島市安佐南区）



図 4 広島市安佐北区の被災箇所（内閣府¹³）

表 1 8.20 広島土砂災害の人的被害（単位：人）（国土交通省¹⁴）

区	地区	死亡	重軽傷	計
安佐南区	八木	52	53	121
	緑井	14		
	山本	2		
安佐北区	三入・桐原	2	15	21
	可部東	4		
	大林	0		
災害関連死		3	-	3
計		77	68	145

<http://www.bousai.go.jp/fusuigai/dosyaworking/pdf/dai1kai/siryo2.pdf>（最終閲覧日：2021年8月9日）

¹³ 同上，p.11，平成26年8月20日 広島土砂災害 被災箇所（広島市安佐北区）

¹⁴ 国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所，“平成26年8月20日豪雨広島土砂災害”，p.5

http://www.cgr.mlit.go.jp/hiroshima_seibu_sabo/pamphlet/pdf/pamph_disaster_201408.pdf（最終閲覧日：2021年8月9日）

表 2 8.20 広島土砂災害の住家被害（単位：棟）（国土交通省¹⁵⁾

区	全壊	半壊	損壊	浸水	計
安佐南区	145	122	106	3,074	3,447
安佐北区	33	95	73	1,070	1,271
計	178	217	179	4,144	4,718

海堀ら(2014)によると、8.20 広島豪雨災害の被害拡大の素因は 3 点ある¹⁶⁾。

1 点目は、誘因となった豪雨が、8 月 20 日の午前 1 時から午前 4 時にかけて急激に強まったことである。8.20 広島土砂災害の場合、8 月 19 日の 18 時まではほとんど先行降雨が見られず、災害の予見が困難となった。

2 点目は、豪雨の規模が当該地域においては 500 年に 1 度という規模をはるかに上回る未曾有の降り方であったことである。「未曾有の降り方」とは、およそ 2 時間の間に 200mm を超える雨が、広島県管轄の広島市安佐北区の三入東と上原の 2 箇所の観測所で観測されたことを指す。このような記録は、広島市においてはじめてのものであった。

3 点目は、大都市の人家が密集する地域に、誘因である豪雨がもたらされたことである。災害が発生した地域は、過去の地形図の記録から、山麓部において宅地開発が徐々に進んでいったことが確認できる¹⁷⁾。その結果、土石流の流下・到達した範囲に多くの人家が建てられていたため、人的被害・住家被害が拡大した。

広島県では、災害発生箇所こそ異なるが、1999 年 6 月 29 日にも、大規模な土砂災害が発生している（以下、6.29 広島土砂災害）。この 6.29 広島土砂災害を契機に、翌 2000 年には土砂災害防止法が制定され、土砂災害警戒区域の指定・公開が義務づけられた。しかし、被災地に住む住民へのインタビュー調査の結果、その情報は公開こそされていたものの、多くの住民には浸透していなかったことが、8.20 広島土砂災害で露呈したといえる。

¹⁵⁾ 国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所，“平成 26 年 8 月 20 日豪雨広島土砂災害”，p.5

http://www.cgr.mlit.go.jp/hiroshima_seibu_sabo/pamphlet/pdf/pamph_disaster_201408.pdf（最終閲覧日：2021 年 8 月 9 日）

¹⁶⁾ 海堀正博・石川芳治・里深好文・松村和樹・中谷加奈・長谷川祐治・松本直樹・高原晃宙・福塚康三郎・吉野弘祐・長野英次・福田真・中野陽子・島田徹・堀大一郎・西川友章，“2014 年 8 月 20 日に広島で発生した集中豪雨に伴う土砂災害”，砂防学会誌，Vol.67, No.4, pp.49-59, 2014, p.58

¹⁷⁾ 山本晴彦・小林北斗，“2014 年 8 月 20 日に広島市で発生した豪雨と土石流の特徴”，自然災害科学，Vol.33, No.3, pp.293-312, 2014, pp.303-305

また、磯田(2014)によると、8.20 広島土砂災害で最も被害が集中した安佐南区八木地区は、かねてより水害や土石流災害が多発していた地域であり、かつてはそれに因んで「蛇落地」という地名がつけられていたという¹⁸。「蛇」という漢字には、土石流が蛇のように流れるという意味が込められており、土砂崩壊しやすい土地の名称に使われる。しかし、磯田(2014)は、地名変更によってその特性は忘れ去られていたと指摘する。

さらに、同地域には、同じく「蛇」という漢字が使われる「蛇王伝説」を語り継ぐための「蛇王池の碑」が建てられ、今も変わらず残っている(図 5)。小山ら(2017)は、広島県内にある洪水や土砂災害の石碑を調査し、防災上の意義について、「碑のほとんどが被災地内あるいは近傍に位置していることから、碑がそこに存在することは被災地の場所を示す貴重な情報となりうる」とともに、「碑文には、水害や被害の状況を端的に書かれてあることが多く、地域の住民がリアリティをもって災害の歴史を知る契機になりうる」と主張している¹⁹。しかし、実際には「蛇王池の碑」はその存在そのものを忘れられるか、存在は知られていても、その碑に書かれている内容は現在の住民には受け継がれていなかった。あるいは、代々同地域に暮らす人びとの中には、「水害が多い」という地域の特性を耳にしたことのある人もいたが、その言い伝えにリアリティを感じることはなく、防災にはつながっていなかった、という背景がある。

¹⁸ 磯田道史, ”天災から日本史を読みなおす：先人に学ぶ防災”, 中公新書, 2014, pp.92-94

¹⁹ 小山耕平・熊原康博・藤本理志, ”広島県内の洪水・土砂災害に関する石碑の特徴と防災上の意義”, 地理科学, Vol.72, No.1, pp.1-18, 2017, p.15



図 5 蛇王池の碑（2017 年 4 月 3 日、筆者撮影）

1.4 論文の構成

本論文の構成を、図 6 に示す。

第 2 章では、先行研究を整理し、本研究で扱う研究課題を明確にする。まず、数ある被災情報の表現方法の中から被災者の「語り」に着目する理由を明確にする。次に、体験の語り継ぎを担ってきた「語り部」の語りにおける「定型化」を指摘し、それが外部からの圧力により生じる現象であるとの説に対し、「定型化」とは送り手のためのものであり、送り手が求めたものでもあるという側面があることを示唆する。次に、「語り」には、語る内容としての「記憶」と、それを表現するための「語りの方式（ナラティブ）」の 2 つの要素で構成されているという観点から、「記憶研究」と「ナラティブ・アプローチ」という 2 つの領域にまたがって議論を展開する。最後に、時間経過による変容を単なる「忘却」ではなく「社会的現実」の喪失過程であるという視点に基づき、それが受け手だけの問題ではなく、送り手においても「風化」が起こり得ることを指摘し、送り手の語りの時間経過による変容を明らかにすることを本研究の研究課題とすることを示す。

第 3 章では、時間経過による被災者の「語り」の変容を検討するにあたり、まず災害発生直後に被災者が自身の体験をどのように語っているのか、その特徴を明らかにする。8.20 災害発生直後から収集された体験談集を分析対象とし、収められた 92 名の体験談を計量テキ

スト分析する。そして、災害直後には、まだ自分の置かれている状況を客観的に把握することができないため、そこにはまだ解釈が存在しておらず、したがって被災者が語り継ぎたい「教訓」も見出されていないことを指摘し、その後の時間経過による変容を検討していくための出発点とする。

第4章では、被災者の「語り」の時間経過による変容という仮説を検証する。ある被災者に対して災害発生から3年後と5年後の2度にわたりインタビューを実施し、その「語り」を比較検討することで「語り直し」の特徴を分析し、被災者の語りの時間経過による変容の枠組みを見出すことを試みる。3年後のインタビューにおいては、個人の被災体験ではなく、災害の概略であり、したがってその「語り」は8.20広島土砂災害の「社会的記憶」であると考えられる。一方、5年後のインタビューでは、これまで語られたことのないような「個人的記憶」について、自分を主語にしての「語り直し」が行われていたことを指摘し、その傾向が被災者に一般的に見られるものであるという仮説を立てた。

第5章では、8.20広島土砂災害において、最も被害が大きかった安佐南区の八木・緑井地区在住の19名の被災者に、発災から3年が経過する前の「復旧・復興期」と5年が経過する前の「平常期」の2度にわたり、非構造化インタビューを実施し、その結果を比較検討する。そして、第4章で得られた結果が広く被災者に確認できる傾向であるのかを検証し、その結果をもとに「語り」の変容モデルを構築する。あるインパクト(本研究においては土砂災害)が生じると、人はまず表層的な部分でこのインパクトを受容する。そこでまず用いられる表現は、他者と容易に共有できるものである。その表現は共通言語のような役割を果たし、それによって被災者は共感し合い、一体感のようなものが生まれる場合もあると思われる。だが、土砂災害の特徴として被害が局所的であり、狭い範囲内でも被害が大きく異なる場合も多い。つまり、「復旧・復興期」に表層的な表現で自身の被災体験を捉えていた被災者たちが、「平常期」に至り自分と他者との被害状況などの相違に気づくことで、自分「独自」の体験を表現するようになって考えられる。また、送り手の表現が変化することで、受け手が受け取るメッセージも異なると考え、被災者の語りを防災・減災に活用する際に考慮すべき要素を明らかにする。

第6章では、第5章で構築したモデルを、既存の研究において展開されている語り継ぎに潜む課題に適用することを試みる。防災・減災において重要なのは、受け手が送り手の語りを自分の問題として受け手が自分の問題として捉えることであり、それが受容されるメッセージの中心であるべきである。教訓とは学ばれるものであり、何が教訓であるのかを決めるのは受け手である。そのために重要になるのが、送り手と受け手の「個人的コンテキスト」を一致させることであり、受け手が共通項を見出すことで、被災者による被災情報の表現が受容されていくことを指摘する。

最後に、第7章で本研究で得られた成果を総括し、今後の展望を示す。本来、被災者の「語り」は多様なものであり、受け取られるメッセージもまた多様なもののはずである。被災者が「教訓」を普遍的なものとして継続的に語ることができるようにすることが「型」と

「場」の存在意義である一方で、「型」の形成においては「個人的コンテキスト」が考慮されなくなる傾向があるため、「語り」の多様性を担保していくための方策を検討する必要があることを提言する。

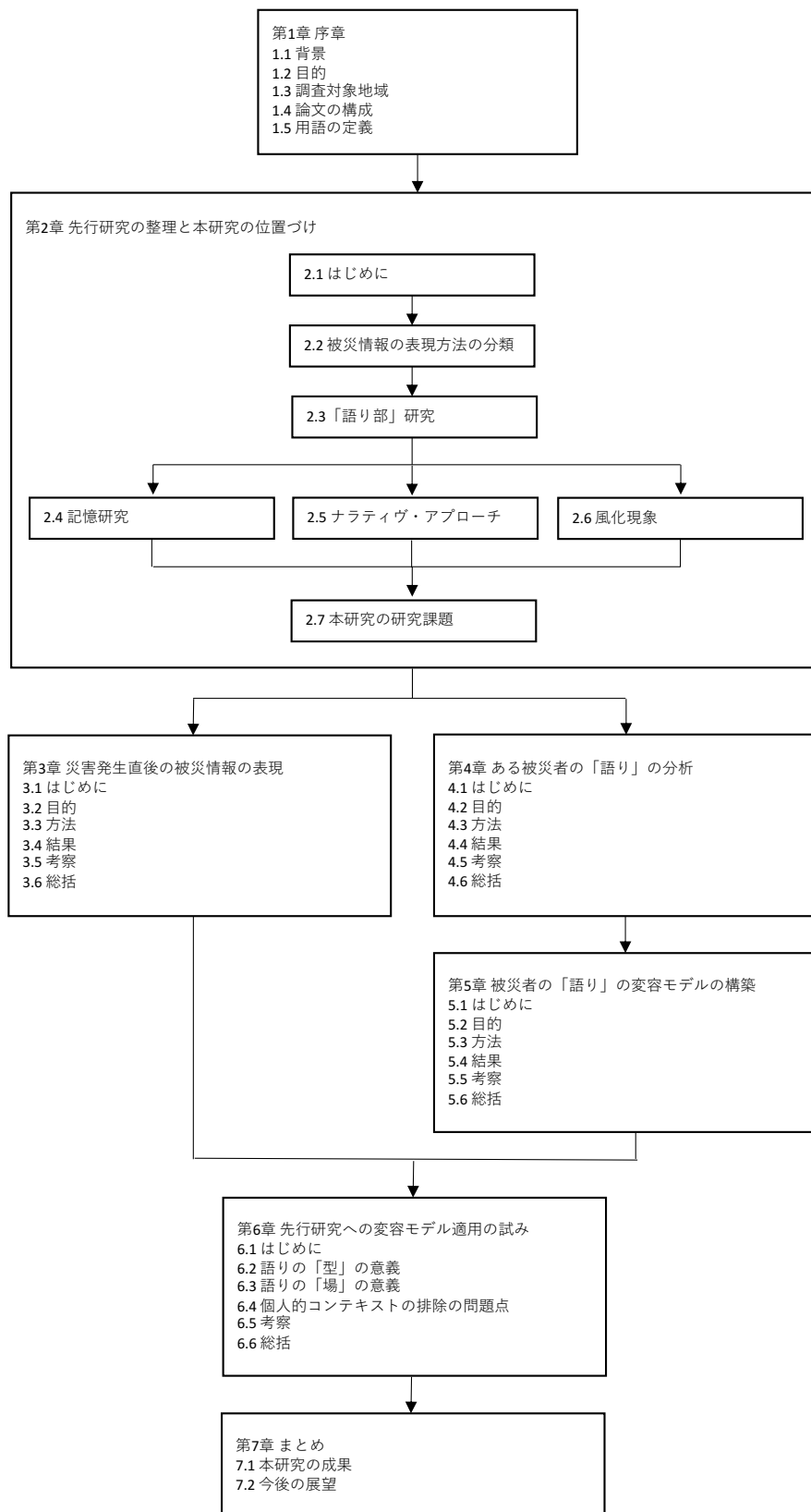


図 6 本論文の構成

1.5 用語の定義

本研究においては「災害情報」と「被災情報」を次のように定義し、使い分ける。「災害情報」は、災害発生の中において生命を守るために必要とされる情報を指し、「被災情報」はすでに生じた災害の記憶や「教訓」を語り継ぐための情報を指す。

また、教訓は、プロジェクトマネジメントの概念として“lessons learned”と訳される場合がある²⁰。“learned”によって、受け手にとってそれが教訓として受け取られるかどうかという視点が示されている。しかし、本研究においては、送り手が伝えたいと思うことについても、教訓という表現を用いたい。そこで、それが送り手にとって受け手に伝えたいことを教訓として表現する場合には、カギ括弧をつけて「教訓」と表記し、受け手が受け取るものを教訓として表現する場合には、そのまま教訓と表現するものとする。

²⁰ たとえば、山本和男，“プロジェクト教訓(Lessons Learned)の取りまとめと活用の提案”，プロジェクトマネジメント学会 2007 年度春季研究発表大会予稿集，pp.395-400，2007

第2章 先行研究の整理と本研究の位置づけ

2.1 はじめに

第2章では、被災情報の伝達方式として被災者の「語り」を研究対象とする意義を示す。

まず、数ある被災情報の表現方法の中から被災者の「語り」に着目する理由を明確にする。次に、体験の語り継ぎを担ってきた「語り部」の語りにおける「定型化」の問題を指摘し、それが外部からの圧力により生じる現象であるとの説に対し、「定型化」とは送り手のためのものであり、送り手が求めたものでもあるという側面があることを示す。続いて、「語り」には、語内容としての「記憶」と、それを表現するための「語りの方式（ナラティブ）」の2つの要素で構成されているという観点から、「記憶研究」と「ナラティブ・アプローチ」という2つの領域にまたがって議論を展開する。最後に、時間経過による変容を単なる「忘却」ではなく「社会的現実」の喪失過程であるという視点に基づき、それが受け手だけの問題ではなく、送り手においても「風化」が起り得ることを指摘し、送り手の語りの時間経過による変容を明らかにすることを本研究の研究課題とすることを示す。

2.2 被災情報の表現手法の分類

災害が発生したという事実を継承するための手法は多い。図7は、矢守(2013)による「災害史」の分類である¹。矢守(2013)は、「人間のライフスパンとは相容れないほど遠い過去に起こった災害を確実に構成に伝える災害情報」²を、北原(2006)にならって「災害史」³と呼称する。そして、「災害史」は「過去に起こった現象（自然現象、社会現象の両方を含めて）」を、淡々と客観的に記録したものではありえない。要するに、だれがいつ記述しても同じ「災害史」ができあがるわけではない」と説明する⁴。そして「言語的／非言語的」と「意図的／非意図的」という2つの分類軸にそって「災害史」を整理した⁵。

¹ 矢守克也, "巨大災害のリスク・コミュニケーション：災害情報の新しいかたち", ミネルヴァ書房, 2013, p.155

² 矢守, 2013, p.149

³ 北原糸子, "日本災害史", 吉川弘文館, 2006

⁴ 矢守, 2013, p.151

⁵ なお、矢守(2013)は「言語的／非言語的」と「意図的／非意図的」という分類軸を絶対的なものと見なしていたわけではなく、「ワンウェイ／インタラクティブ」、「ノンフィクション／フィクション」、「集中／分散」などの分類軸による整理も可能として検討の余地を示している。

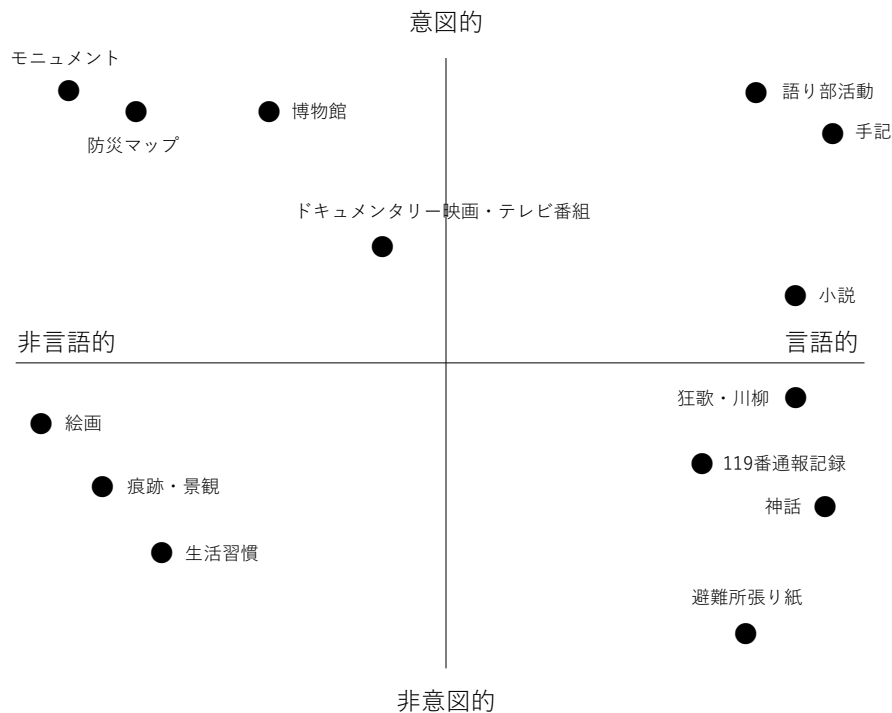


図 7 「災害史」の分類（矢守(2013)より筆者作成）

本研究における「被災情報」とは、語り継ぐための「言語的」な情報であり、語り継ぐために「意図的」に生成されるものである。したがって、「意図的」かつ「言語的」であり、時間経過による影響を受けやすいと考えられる「語り部活動」、すなわち被災者による「語り」を研究対象とする。

2.3 「語り部」研究

2.3.1 「語り部」の定義

近年、「語り部」という言葉は、悲惨な体験をした者が、その体験の記憶や「教訓」を継承するために自らの体験談を語る者として捉えられることが多いと思われる。しかし、そのような意味はあとから加えられたものである。

「語り部」という語は、もともとは史実や伝説、民話などを語り継ぐ者のことを指していた。ただし、佐藤(2014)によると、「語り部」という用語は、遠野市では1971年にNHKの番組で語り部が語りを披露したことをきっかけに使われるようになったとされており、古い呼称ではないという。

それまでは、民俗学・郷土史研究家によって「話者」、「語り手」と呼ばれており、家々の中での伝承に対する研究者の採話の対象であったが、1970年代に入って公衆の面前で語る活動形態が広がって、「語り部」という呼称が定着した⁶。

しかし、史実や伝説、民話を語る者を指していた「語り部」には、別の意味が加わっている。川村(2018)は、『日本国大辞典』に着眼し、1973年発行の初版と2001年に発行された第2版を比較して、後者に「昔話や戦争体験などを時代に語り伝える者」という第2の意味が加えられており、「『語り部』の第2の意味は、1990年代～2000年代には少なくとも社会に定着していた」ことを指摘する⁷。また、川村(2018)は新聞記事の見出しの分析を通して、「語り部」という語は1964年ごろまではほとんど存在しておらず、第二次世界大戦から半世紀を迎え、阪神・淡路大震災によって新たに震災の「語り部」も生まれた1994年から1996年に、第2の意味の「語り部」が急激に増加していることも明らかにした⁸。

川村(2018)が明らかにしたように、「語り部」という語には「伝承」という意味が込められており、すなわち、「後世に」語り継いでいくことを目的に自らの体験を語る者に対して用いられる。被災体験をし、自らの体験談を語る被災者が全員「語り部」に込められているような心持ちで自らの体験を語るわけではないが、体験を語る者の多くは「自分と同じような目に遭ってほしくない」「自分のような思いは誰にもしてほしくない」という願いを持つ。したがって、個人の体験がどのように「教訓」として位置づけられるようになるのかについて、被災者の「語り」を分析するための視点として「語り部」研究を参照することは、今後の議論の下地になると考えられる。

2.3.2 被爆体験の「語り」の変遷

では、「語り部」はどのように活動してきたのだろうか。ここで、原子爆弾の被爆者たちの「語り」に注目したい。以下、主に寺岡(2017)を参照しつつその変遷を整理していく⁹。

1945年8月6日に広島に、同年8月9日に長崎に、原子爆弾が投下された。しかし、原爆の被害は当初、GHQによる検閲などもあって詳しく報道されておらず、実情はほとんど知らされていなかったという。

被爆者の「語り」はまず、爆心地の正確な位置を特定するために求められた。被爆者の語りは、原爆投下の事実を証明するための「証言」であった。被爆者健康手帳は、「その人が

⁶ 佐藤一子, “文化創造的営為としての昔話の口承活動：遠野の語り部たちのライフストーリーの考察”, 法政大学キャリアデザイン学部紀要, No.11, pp.245-278, 2014, p.248

⁷ 川村あかり, “「語り部」生成の民俗誌にむけて：「語り部」の死と誕生、そして継承”, 超越文化科学紀要, No.23, pp.5-25, 2018, p.11

⁸ 川村, 2018, p.10

⁹ 寺岡聖豪, “「原爆を語る」と平和教育”, 福岡教育大学紀要, No.66, pp.15-26, 2017

原子爆弾による被爆者であること」を示す一種の証明書として定義され、個人の原子爆弾の経験を法的に認知するものである¹⁰。この点について、米山(2005)は次のように分析する。

医学的・法的言説は、生存者の語りに彼ら・彼女らの原爆体験を詳細に分析し、点検する外的な権威を挿入した。同時にそれは、彼ら・彼女らの語りを完了的な手順の監視に従属させることにもなった。それゆえ、原爆の経験の医学=法律化(medico-legalization)は、それぞれの生存者の証言を外的な制度的権威によるアイデンティフィケーションと立証を必要とする語りとして断片化してしまった。(中略)生存者が自らの経験の拠り所とする証拠はどんなものであれ、外在的で客観化された基準によって代わられ、生存者は自分自身の過去から阻害されてしまうことになった。¹¹

その後、1954年3月1日に第五福竜丸が太平洋ビキニ環礁でアメリカの水爆実験によって「死の灰」を浴び、乗組員たちが急性放射線障害を発症する「第五福竜丸事件」をきっかけとして原水爆禁止著名運動が広がる。直野(2015)によると、「それまでは、原爆の脅威の象徴として捉えられがちであった原爆被害者に対する共感が広がっていった」¹²ことで、被爆者の「証言」が「反核メッセージ」となっていった。

原水爆禁止運動は、1960年代半ばにいくつかの団体に分裂する。広島ではその後、原水爆禁止を訴えるだけでなく、原爆被害のおそろしさと核兵器の廃絶を訴える運動が展開していった。この運動は、原爆被害に関する記録や資料に関心をもつものであり、この運動が掲げた目標の1つが被爆体験の「継承」であった。

その後、1970年代には広島が修学旅行先として注目を集めるようになった。その流れを受け、1984年に被爆証言を語る団体として設立された「ヒロシマを語る会」の趣意書には、次のように記されている。

敗戦後39年目になり、被爆の体験の風化が問題化し、また被爆者も高齢化して今後どれくらい語り続けられるか不安になっています。(中略)一方、ここ数年間、修学旅行生を中心に広島を訪れる人は増加していますが、被爆体験を語れる被爆者は限られています。(中略)今は被爆者が語られねばならない時期だと思い、自主的に会を結成することにしました。¹³ (傍点は筆者)

¹⁰ 米山リサ, “広島 記憶のポリティクス”, 岩波書店, 2005, p.143

¹¹ 米山, 2005, p.144

¹² 直野章子, “原爆体験と戦後日本：記憶の形成と継承”, 岩波書店, 2015, p.44

¹³ 豊永恵三郎, “会の結成”, ヒロシマを語る会, 生かされて：ヒロシマを語る会十年の歩み, 1994

ここまでの変遷を、寺岡(2017)は次のように整理している。

「原爆の語り」は被爆証言や反戦のメッセージというより、教育的な色彩を帯びるようになった。それゆえ、「原爆をどのように伝えるか」、「何を伝えるか」をめぐる議論されるようになる。一方では平和を訴えるためには、被爆体験だけをそのまま語るのではなく、戦争の背景や現在の核兵器をめぐる状況なども含めて語るべきだとされた。もう一方では、被爆者は原爆投下の惨劇とその後の自身の生活だけを語るべきだとされた。前者は原爆被害をより広い視野から捉えようとするものであるのに対して、後者は原爆投下の暴力性を被爆者自らの体験のもとに捉えようとするものだった。¹⁴

寺岡(2017)は、前者の立場を採用する人物として高橋昭博を挙げる。寺岡(2017)によると、高橋にとって「被爆体験の継承を意味するもの」¹⁵とは、「苦しみや悲しみを主観的に語るのではなく、日本の被害者だけでなく、加害者としての立場を含めて、戦争と原爆被害の実相を語るとともに、現在の国際状況や核軍拡競争などを「系統的に」伝えて」いくことであるという。

一方、後者の立場をとった人物としては、江口保が挙げられている。江口(1998)は、「証言の「機械化」¹⁶という表現を用いる。寺島(2017)は江口の主張について、「被爆者が証言活動が続ける中で、原爆や平和について「学習した」結果、被爆者一人ひとりの「生き様」が語られないが故に、「原爆の語り」が画一化し、誰が語っても同じものになってしまった」(傍点は筆者)と整理している。

平田(2012)は、定型化の問題を次のように指摘する。

たしかに、特定のプロットが与えられることによって、多くの被爆証言の生成が可能になったと考えられる。あるストーリーを語り出すプロットが備わっているからこそ、それに合わせるかたちで、沈黙のままにあった被爆者が語りの契機を見出し得たといってよいだろう。しかしながら、このプロットと合致しない被爆証言は—意図的・無意図的にかかわらず—不適切とされてしまい、時として、被爆者自身が無自覚なまま自らの体験を想起することを抑圧してしまう危険性を伴う。¹⁷

¹⁴ 寺岡聖豪, 「「原爆を語る」と平和教育」, 福岡教育大学紀要, No.66, pp.15-26, 2017, p.18

¹⁵ 高橋昭博, 「ヒロシマ いのちの伝言: 被爆者 高橋昭博の 50 年」, 平凡社, pp.138-145, 1995

¹⁶ 江口保, 「いいたかこといっぱいあつと」, クリエイティブ 21, 1998, p.209

¹⁷ 平田仁胤, 「戦後日本における被爆体験の継承可能性: 若者世代にとっての被爆証言=平和教育のリアリティ」, 日本オーラル・ヒストリー研究, No.8, pp.109-124, 2012, p.110

このように、平田(2012)は「型」について、主に外部から押し付けられたものと解釈している。すなわち、元来個々に異なる体験談をもつはずの被爆者たちが、あらかじめ用意された「型」に当てはめるかたちで自らの体験を語るようになることで、「誰が語っても同じもの」になってしまうという指摘である。

一方、寺田(2005)は、「語りとは、ある出来事を受け入れ、ある視点によって再構成する行為」と述べる。そして、「語りの定型化」とは、「語り得ないことを語りつつ語らないという選択肢」であり¹⁸、「聞かせ、笑わせ、記憶させ、感動させる技術、いいかえれば、情動を動かすためのひとつの方法」とする¹⁹。すなわち、「定型化」とは送り手が自ら行うものでもあるという側面を示唆している。

被爆体験に付与される受け手へのメッセージはコンテクストによって異なり、そのコンテクストに当てはめるための「語り」の「型」の存在が明らかになった。しかし、平田(2012)寺田(2005)では解釈がまったく異なる。平田(2012)にとって「型」とは被爆体験の多様性を削ぐネガティブなものであり、寺田(2005)にとって「型」とは、送り手が伝えたいことを確実に伝えられるようにするためのポジティブなものであった。本研究では、寺田(2005)の概念を踏襲し、送り手にとっての語りの「型」の存在意義についても検討していく。

2.4 記憶研究

2.4.1 集合的記憶と個人的記憶

記憶の集合性を指摘した代表的な論者の一人であるアルヴァックス(1989)は、「集合的記憶」と「個人的記憶」について次のように述べる。

思い出が組織化される仕方には二通りあり、時には思い出は一定の人間を中心にして集まり、その人間が自分の観点から思い出をながめることもあれば、時には思い出が大規模ないし小規模の社会の内部に分配され、その社会の部分的イメージであることもある。したがって、個人的記憶が存在するし、また集合的記憶というべきものがある。²⁰

アルヴァックス(2018)によると、「通常、人々が思い出を獲得し、それを想起するのは、また多くの場合に、私たちが記憶を呼び起こすのは、社会の中である」²¹。つまり、「個人的

¹⁸ 寺田匡宏, “災害と語り：悲劇としての三陸津波の記憶表象とその分析方法に関する試論”, 国立歴史民俗博物館研究報告, Vol.123, pp.451-473, 2005, p.461

¹⁹ 寺田, 2005, p.455

²⁰ M・アルヴァックス著／小関藤一郎訳, “集合的記憶”, 行路社, 1989, p.45

²¹ M・アルヴァックス著／鈴木智之訳, “記憶の社会的枠組み”, 青弓社, 2018, p.8

記憶」は完全に個人的なものではなく、社会との関係や位置づけによって想起されるものであるとする。

それに対してトフラー(1982)は、「あらゆる記憶は、純粹に単独で個人的なものと、共有されて社会的なものに分けることができ」、「個人的な記憶は個人の死とともに消える」として、その人独自のオリジナルな記憶が存在するという視点を示している²²。

また、寺田(2005)も、「パブリックな記憶とプライベートな記憶との根強い二項対立」について、次のように述べる。

本稿の立場は、記憶とはあくまで個々人の脳内の作用であり、パブリックな記憶は存在しないという立場である。記憶がパブリックになるとしたら、それは、記憶そのものではなく、その表現が「分有」されたからである。たしかに、人びとに「分有」された過去像というものが存在するということはできるだろう。しかし、それをも記憶と呼称することは議論に混乱を招く。あくまで記憶とは脳内の現象を指すにとどめるべきであり、人びとに分有された過去像、つまり言語や、図像の記号によって媒介された存在は、記憶表象と称するべきである。²³

有末(2016)によると、ライフストーリーやライフヒストリーの固有性においては、誰にも経験できない本人の「体験」を語るの意味が存在する²⁴。しかし、「記憶」の継承の場合、共有性において各々の体験のオリジナリティやユニークさを考慮することはほとんど不可能であるため、社会の記憶として公認される「集合的記憶」が、「個人的記憶」とは別に形成されていく。

そこで、本研究では、トフラー(1982)や寺田(2005)の視点を踏襲し、その人独自の個人的記憶が集合的記憶とは別に存在する、という立場を採用する。

2.4.2 想起研究

寺田(2005)が指摘するように、個人の記憶は外部に表現されてはじめてその存在が明らかになる。その表象を、「記憶」とは異なるものとして、「想起」と呼称する先行研究が多く存在する。

浜(2007)は、心理学と社会学における「記憶」の捉え方の違いを次のように説明する。心理学では、記憶は記銘（情報を覚える）・保持（脳に蓄える）・想起（思い出す）の3段階からなり、すべて他者から切り離された孤独な個人の営みとして捉えられる。一方、社会学が

²² A・トフラー著／徳岡孝夫監訳，“第三の波”，中公文庫，1982，p.241

²³ 寺田，2005，p.453

²⁴ 有末賢，“集合的記憶と個人的記憶：記憶の共有性と忘却性をめぐって”，法学研究，Vol.89, No.2, pp.19-40, 2016, p.26

関心を持つのは「日常生活における集合的な営みとしての記憶」である。そして、アルヴァックスの「集合的記憶」の概念について、次のように考察する。

心理学の記憶研究は記録・保持・想起の全過程を対象とするのに対して、アルヴァックスの集合的記憶の概念は、この 3 つの段階のうち、もっぱら想起に焦点を当てたものである。この意味では、アルヴァックスの集合的記憶の概念は「集合的想起」と呼ぶ方がより正確である。²⁵（傍点は筆者）

また、吉村(2011)は記憶について、「再生産される、現状認識に基づいた、過去の特定の出来事を想起し意味を付与する行為」²⁶（傍点は筆者）であるとしている。

さらに、Middleton & Edwards(1990)は、“collective remembering”、すなわち「共同想起」という概念を提唱している²⁷。矢守(2002)は、個人的記憶と集合的記憶との二分法に意義を唱えるこの「共同想起」という概念により、日本において「記憶研究から（共同）想起研究へ」という流れがつけられたことを指摘して、その作用を次のように説明する。

被災者の個人的記憶は、周囲の人々との「共同想起」を媒介として、当該の災害・事故に継続的に大きな社会的現実感を付与し、集合的記憶の形成（マスメディア報道の質量）に影響を及ぼしている。²⁸

本研究においては、この「共同想起」という概念をふまえ、「個人的記憶」と「集合的記憶」が単純な二項対立ではないことを理解した上で、「個人的記憶」と「集合的記憶」をフェーズとしてとらえて、時間経過による変容を検討していくものとする。

2.4.3 社会化と個人化

関沢(2008)は、戦争体験の記憶を「死者の記憶」と「事件の記憶」の 2 つに大別し、死者の記憶を「個人化される記憶」、事件の記憶を「社会化される記憶」と定義する²⁹。すなわち、「同じ体験をした人にしかわからない」という閉鎖的傾向性が、特定の死者の記憶に収斂することを「個人化」、その死者のかかわった事件の記憶として回収されることを「社会

²⁵ 浜日出夫, “記憶の社会学・序説”, 哲学, pp.1-11, 2007, p.5

²⁶ 吉村智博, “博物館における表象行為と社会的差別：差異の表象をめぐる”, 人文学報, No.100, pp.113-127, 2011, p.120

²⁷ David Middleton & Derek Edwards, “Collective Remembering”, SAGE Publications, 1990

²⁸ 矢守克也, “災害の「風化」に関する基礎的研究(II)：マスメディアの報道量とマクロ行動変数による測定と表現”, 実験社会心理学研究, Vol.42, No.1, pp.66-82, 2002, p.79

²⁹ 関沢まゆみ, “「戦争と死」の語り：その個人化と社会化”, 国立歴史民俗博物館研究報告, Vol.147, pp.7-34, 2008, p.30

化」と整理することができる。そしてこの「個人化される記憶」が「個人的記憶」となり、「社会化される記憶」が「集合的記憶」であると位置づけることができると考えられる。

本研究では、被災者が「集合的記憶」に基づいて自らの体験を語るようになることを「社会化」、「個人的記憶」に基づいて語るようになることを「個人化」と呼称する。

2.5 ナラティブ・アプローチ

「ナラティブ (narrative)」とは、「物語」あるいは「語り」を意味する。野口(2002)によると、この言葉はもともと文学・文芸領域の用語であるが、近年社会福祉の世界で、「ケア」や「援助」という行為において「ナラティブ」を活用しようとする動きが起きており、その動きを総称して「ナラティブ・アプローチ」と呼ぶ³⁰。そして、「ナラティブ・アプローチ」では、「ある時代・ある社会において当然とされ、人びとの思考や行動を方向づけているような言説」を「ドミナント・ストーリー」と呼ぶ。この「ドミナント・ストーリー」という概念は、ホワイト&エプストン(2017)が実施した、家族療法の治療的文脈における物語論から捉えたものである³¹。彼らのナラティブ・セラピーは、ネガティブな「ドミナント (dominant : 優勢な)」・ストーリーを、治療のなかで新しい物語、つまり「オルタナティブ (alternative : 代わりの)」・ストーリーとして語り直し、創生するといった観点で議論されている。

この「ドミナント・ストーリー」という概念を、渥美(2004)は被災体験の語りの分析に導入する³²。被災体験の語りには、「語るに語り得ないもの」が内包されている。この「語り得ない」ものは、非常にプライベートなものであるため、語りが他者から承認を得るためには、「語り得ないもの」を隠蔽する必要がある。そのために用いられる技法が、「ドミナント・ストーリー」であるという。ここでの「ドミナント・ストーリー」とは、ある社会・文脈で受け取られやすい物語が定型化したものである。「ドミナント・ストーリー」に依拠することによって、語り手は容易に他者の承認や納得を得ることができる反面、自己物語を既成の型にあてはめることになるため、語りのオリジナリティは失われると考えられる。

「ドミナント・ストーリー」という型からはみ出す物語について、ホワイト&エプストン(2017)は、ゴッフマン(1984)が提唱する「ユニーク・アウトカム (unique outcomes)」とい

³⁰ 野口裕二, “物語としてのケア：ナラティブ・アプローチの世界へ”, 医学書院, 2002, p.4, p.14

³¹ M・ホワイト&D・エプストン著／小森康永訳, “物語としての家族”, 金剛出版, 2017

³² 渥美公秀, “語りのグループ・ダイナミックス：語るに語り得ない体験から”, 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, Vol.30, pp.160-173, 2004

う概念を用いて説明する³³。ゴッフマン(1984)は「ユニーク・アウトカム」について、次のように説明する。

伝統的に経歴 *career* という語は、世間的評価によって予定された昇進にあずかる人びと専用のものでされて来た。しかしながらこの語は、意味が拡張されて、人が一生に辿る社会的経路を言い表すのに用いられ始めている。自然史的視点が採られ、特定の社会的カテゴリーの構成員に基本的で共通な長い年月にわたる様々の変化—もっともこれらの変化は個々の構成員によって独立に経験されるのではあるが—が重視され、個々人に特異な結果は無視される³⁴。(傍点は筆者)

この「ユニーク・アウトカム」については、高野ら(2007)が提唱する「対話の綻び」という概念を援用して説明することができる³⁵。高野ら(2007)によると、語り手の私的な気持ちが公的な語りの中に浸潤することで、対話が綻びる。この「対話の綻び」は、「固定化されつつあった震災なるもの」としての「ドミナント・ストーリー」が破壊され、公的な施設が提示していた震災なるものが「個別で私的な体験」としての「オルタナティブ・ストーリー」へと解体することによって生じるものであると考えられる。

本研究では、共有性を保証された「集合的記憶」を表現するものを「ドミナント・ストーリー」、個別で私的な体験としての「個人的記憶」を表現するものを「オルタナティブ・ストーリー」として位置づける。

2.6 風化現象

矢守(2009)は、池田(1993)の提唱する「社会的現実」の概念を援用して風化プロセスを説明している。「社会的現実」とは、「私たちが社会の中で生じることができごとやものごとのあり方を目の当たりにして、それがどんな悲劇や大いなる幸運であったとしても、確かに本当に起きたことなのだ、現実世界はそうになっているのだ、と理解するときを感じられる現実感(リアリティ)」³⁶を指す。それは、「個々人の比較で自分を知るための現実感ではなく、社会の成り立ちそのものを支える現実感」であり、「共同主観的」に他者と意見を共有して、これ

³³ M・ホワイト&D・エプストン著／小森康永訳，“物語としての家族”，金剛出版，2017

³⁴ E・ゴッフマン著／石黒毅訳，“アライサム：施設被収容者の日常世界”（ゴッフマンの社会学 3），誠信書房，1984，p.133

³⁵ 高野尚子・渥美公秀，“阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察：対話の綻びをめぐる”，実験社会心理学研究，Vol.46, No.2，pp.185-197，2007b

³⁶ 池田謙一，“新版 社会のイメージの心理学：ぼくらのリアリティはどう形成されるか”，サイエンス社，2013，p.1

こそ「現実」(リアリティ) そのものだ」と確信できるような現実感」³⁷である。永田ら(1996)が、「語られる機会が希薄になれば、それに応じて事態も風化していく」³⁸と指摘するのも、風化現象を「社会的現実」の喪失ととらえてのものであると考えられる。

この「風化」を「社会的現実」の喪失過程であると考え、米山((2005)が主張する被爆体験やヒロシマの意味の「風化」がどのような現象を指すのかが具体的に理解できる³⁹。米山(2005)は、「風化」という言葉の意味について、「かつて起こった出来事の記憶が薄れていくことを指すのではなく、記号としてのヒロシマがこれまで呼び起こしてきたさまざまな意味や警告やスローガンの凡庸化・陳腐化」と解釈している。

しかし、本研究においては、米山(2005)が除外している「かつて起こった出来事の記憶が薄れていく」という意味での「風化」について検討する。

矢守(1996)は、「風化」という現象を、新聞報道を分析することで解明しようと試みている。自然災害は、物理的現象が人間の生活に影響を及ぼすことで「自然災害」となる。矢守(1996)は、このような意味づけの作業は言語によって担われるもので、「卑近な人々同士の会話」と「マスメディア発信の情報」により展開されるとする⁴⁰。そして矢守(1996)は、「あの出来事を(ある種の)災害として社会に定着させ、さらにその細部を分化させ、やがて「風化」させる媒体である言語にこそ焦点があてられねばならない」と指摘する。本研究においては、この2つの視点を合わせて考察を進める。

矢守(1996)は新聞記事を分析対象としているが、災害・事故の風化現象に関する研究を、矢守(2009)は以下の5つのグループに大別している⁴¹。矢守(1996)の研究手法は、1つ目の「マス・メディアの報道を定量的に分析した研究」である。

1. マス・メディアの報道を定量的に分析した研究
2. マス・メディアの報道を定性的に分析した研究
3. マス・メディアの報道の送り手に関する研究
4. 被災者の被災体験や個人的記憶に焦点をあてた研究
5. 風化防止を目的とした実践的活動に関する研究

以上の5つのうち、被災者の「語り」について取り扱う本研究は、4つ目の「被災者の被災体験や個人的記憶に焦点を当てた研究」にあたる。

³⁷ 池田, 2013, p.14

³⁸ 永田素彦・矢守克也, ”災害イメージの間主観的基盤: 昭和 57 年長崎大水害についての会話分析”, 実験社会心理学研究, Vol.36, No.2, pp.197-218, 1996, p.214

³⁹ 米山, 2005, p.vii-viii

⁴⁰ 矢守克也, ”災害の「風化」に関する基礎的研究: 1982 年長崎大水害を事例として”, 実験社会心理学研究, Vol.36, No.1, pp.20-31, 1996, p.22

⁴¹ 矢守克也, ”防災人間科学”, 東京大学出版会, 2009, pp.182-184

被災者の記憶の変容を時間経過に則って調査した先行研究には、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災によって友人を亡くした、当時大学生だった20代の青年3名に、震災から3年半後と4年半後の2度にわたりインタビュー調査を実施し、その語りの内容を分析したやまだら(1999, 2000)の共同研究がある。やまだら(1999)は「喪の作業(mourning work)」に着目し、それを「一過性の回復作業ではなく、長い時間のなかで行われる人生の物語(life story)の変容・再構成プロセスの一環」として捉えた⁴²。そしてやまだら(2000)は、喪失体験を語るることについて、「時の流れによる風化に抵抗して、かたちを失っても、見えなくなっても、『話すこと』『物語る』ことで、自分にとって大切な体験を他者に伝えていこうとする行為」でもあるとして、長期的な時間軸からみた「語り」と「語り直し」による物語の再構成と意味づけの変化に焦点を当てた⁴³。その結果、やまだ(2007)が一番興味深い論点として挙げているのは、〈場所と時間〉の関係であった⁴⁴。友人を亡くした場所(被災地)から自分が物理的に離れることによって、亡くなった場所に友人はもういないのだと実感でき、友人の死を受け入れることができた、と分析する。

しかし、この研究結果は、時間経過そのものよりも、それにともなう〈場所〉の移動に焦点を当てている。被災情報においては、主にこの〈場所〉に重きが置かれる傾向がある。矢守(2009)は、「自然災害ほど、ここにいたこと(人)とここにいなかったこと(人)との対照がくっきりと明確に浮かび上がる事象も珍しい」(傍点は著者)と述べる⁴⁵。一方で、時間を置くことによって生じる内面の変化については、詳しく言及されているとはいえない。

田中(1999)は、サーベイ・リサーチにより実施された「地震防災に関する年住民意識調査」の結果を手がかりにして、「風化」について次のように考察している。この調査は、阪神・淡路大震災直後の1995年1月末から2月はじめに第一回、1995年12月に第二回調査が行われた。調査は大阪、静岡、東京である。

田中(1999)は、マス・メディアを通して形成される擬似環境の中での「体験」を、実際の直接的体験と対比させて「間接的被災体験」と呼称する。また、「災害が起きたときどういうことが起きるのかというイメージ」を「災害イメージ」と呼ぶ。田中(1999)は、分析の結果を次のように考察する。

大都市災害のイメージは豊かになり、災害に対する関心も高まった。しかも、大都市災害が発生することも予測しており、その際には、家屋の倒壊も予測できる。以上の点では、災害文化へプラスの影響を与えている。しかし、非常用持ち出し袋

⁴² やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学, “人は身近な「死者」から何を学ぶか：阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより”, 教育方法の探究, No.2, pp.61-78, 1999

⁴³ やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美, “阪神大震災における「友人の死の経験」の語りと語り直し”, 教育方法の探究, No.3, pp.63-81, 2000

⁴⁴ やまだようこ, “喪失の語り：生成のライフヒストリー”, 新曜社, 2007, pp.134-136

⁴⁵ 矢守, 2009, p.134

などの個々人の具体的な「災害への備え」については、劇的に減少した項目は少ないにしても、家具の固定という項目を除いて、ゆるやかに減少している。このように、災害文化はつねに「風化」の危機にさらされている。

さらに、具体的な災害への備えの項目以上に大きく減少しているのは、大災害への不安、現在の居住地の危険度測定、自分自身の生命への危険判断に関してである。これらの点では、間接的被災者は発災直後ほど不安や危険を強く感じてはいない。この点では、やはり災害文化は大きく風化している。⁴⁶

このように、「風化」は間接的被災者、すなわち被災情報の受け手の問題として捉えられることが多い。三上(2019)が指摘するように、「忘れる」のは被災者ではなく、体験のない人や、災害に遭っていない未来の世代⁴⁷であるということが暗黙の前提とされているように思われる。

2.7 本研究で対象とする研究課題

本研究では、被災情報の表現方法の中でも、時間経過による影響を最も受けやすいと考えられる、意図的かつ言語的な手法である被災者の「語り」に着目する。その「語り」は、語る内容としての「記憶」と、それを表現するための「語りの方式（ナラティブ）」の2つの要素で構成されている。

記憶には、社会において共有されている「集合的記憶」と、個々人のそれぞれ有する独自の「個人的記憶」が存在する。この「集合的記憶」は「社会化」した「ドミナント・ストーリー」として表現され、「個人的記憶」は「個人化」した「オルタナティブ・ストーリー」として表現されると考えられる。本研究においては、「集合的記憶」と「個人的記憶」が単純な二項対立ではないという立場に立ち、「集合的記憶」と「個人的記憶」をフェーズとして捉えて、時間経過による変容を検討していくものである。以上の議論を整理したものが、表3である。

⁴⁶ 田中重好, “後衛の災害研究：間接的被災体験と災害文化”, 人文社会論叢 社会科学篇, No.2, pp.99-114, 1999, p.109

⁴⁷ 三上喜美男, “記憶の継承とメディアの役割”, 沖村孝・田中秀基・岸本健司・白髭一磨・近藤浩明・矢野治・浦川豪・坪井蒨太郎・三上喜美男, 昭和13年阪神大水害の伝承事業：個人の記憶を社会の記憶に, 自然災害科学, Vol.38, No.1, pp.5-28, 2019, pp.25-27

表 3 「記憶研究」と「ナラティブ・アプローチ」の位置づけ（筆者作成）

記憶研究	集合的記憶	個人的記憶
ナラティブ・ アプローチ	ドミナント・ ストーリー	オルタナティブ・ ストーリー
記憶変容のフェーズ	社会化	個人化

そして、このメカニズムには、時間経過によって生じる「風化」という現象が影響を及ぼすと考えられる。そして、「風化」という現象は受け手の問題として捉えられがちであるが、送り手の記憶にも「風化」は起こり得る。受け手の「風化」に関する研究は多く取り組まれている一方で、被災者の「個人的記憶」が自身の中でどのように変容していくか、すなわち送り手側の「風化」について検証した研究は少ない。

ただし、本章で参照した被爆体験の「語り」においては、原爆投下からすでに 76 年が経過しており、被爆体験の「語り」の変容には、被爆者自身に生じる変化に加えて、政治や社会情勢、世代交代など、さまざまな要素が分かち難く関わっていると思われる。本研究は、ある事象における実体験を有する送り手による「語り」の変容に着目する。したがって、政治的・社会的影響を比較的受けにくいと思われる自然現象によって生じた自然災害に着目し、発生後の数年間で生じる変化を研究対象とする。

矢守ら(2008)は、「震災について語る行為を誘導する非常に明快な単位」として「10 年」という時間を挙げる⁴⁸。矢守ら(2008)によると、この「10 年」を区切りとして、研究者や専門家がこぞって復興の「総括」や「検証」について語り、それらの言説は被災者一人ひとりのライフストーリーを「容易に呑み込むだけの圧倒的な強度をもっていた」。そして、「自分自身が体験したありのままの出来事を自分たちの言葉で語りたいという語り部たちの思い」と「将来の災害に備えるための防災実践について話すことを求める」「社会的な語り部ニーズ」との間にギャップが生じるという課題を指摘した。矢守ら(2008)は、この課題を外部からの圧力によって生じたものとして分析し、語り部たちがその課題をどのように解決することができるかという方向性を示している。その一方で、「10 年」の間に語り部たちにどのような変化が生じてそのギャップが出現することになったのかという変容過程については十分に検討されていない。

⁴⁸ 矢守克也・船木伸江, ”語り部活動における語り手と聞き手との対話的關係：震災語り部グループにおけるアクションリサーチ”, 質的心理学研究, Vol.7, pp.60-77, 2008, p.66

そこで、その変容のメカニズム、および変容によって変容する「語り」の表現内容と、それによって受け手に受け取られるメッセージについて検討していく。

第3章 災害発生直後の被災情報の表現

3.1 はじめに

第3章では、時間経過による被災者の語りの変容を検討するにあたり、まずは被災者が災害発生直後に自身の体験をどのように語っているのか、その特徴を検討する。災害直後には、まだ自分の置かれている状況を客観的に把握することができないため、そこにはまだ解釈が存在しておらず、したがって被災者が語り継ぎたい「教訓」も見出されていないと考えられる。そのような特徴を分析し、その後の時間経過による変容を検討していくための出発点とする。

3.2 目的

本章では、時間経過による被災者の語りの変容を検討するにあたり、まずは被災者が災害発生直後、すなわち「発災期」において自身の体験をどのように語っているのか、その特徴を明らかにすることを目的とする。

この「発災期」という表現は、岡村(2011)が示す災害の時間区分を採用している¹。岡村(2011)は、災害の時間区分を、まだ何も起きていない「平常期」、災害の前兆が現れてくる「警戒期」、すでに災害が発生している「発災期」、そして危機がひと段落した「復旧・復興期」の4つに分割している。図8は、岡村(2011)の定義した災害の時間区分を筆者が図式化したものである。

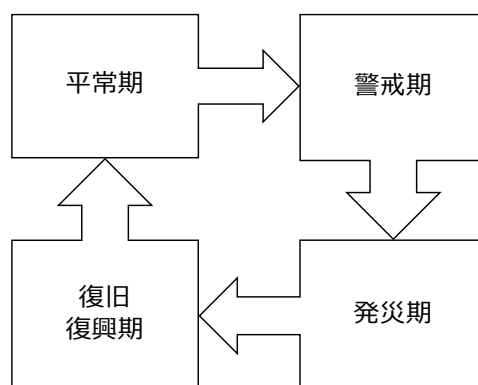


図8 災害の時間区分（岡村(2011)より筆者作成）

¹ 岡村光章，“東日本大震災における災害情報提供について：メディアの特徴的变化と今後の課題”，レファレンス，Vol.728，pp.51-65，2011，p.52

永田ら(1996)は、「事象」と「事態」を区別する²。「事象」とは、「われわれの眼前にひろがり、当たり前前に存在すると間主観的に設定されている世界そのもの」である。一方、「事態」とは、「間主観的に真、ないし、自明とされる命題に他ならず、数学の公理体系を典型とするような抽象的な命題の体系を形成する」ものである。永田ら(1996)は、この「事象」と「事態」の相違のひとつに、「災害について語る際に用いられる名詞の違い」を指摘する。永田ら(1996)は、まず、「指示する対象が(素朴な意味で)具体的な物質であるような名詞」を「具象名詞」と呼ぶ。具象名詞の例として、石ころ、石、岩、木の根っこ、枯れ枝、枯れ木、泥水、泥が挙げられている。一方、「災害の下位概念にあたる名詞」を「抽象名詞」と呼ぶ。抽象名詞の事例としては、大水害、水害、自然災害、土砂崩れ、土石流、斜面崩壊、洪水、氾濫、浸水、濁流が挙げられている。永田(1996)のいう「事態」とは、まだ状況に対する解釈が加えられていない段階である。本研究では、災害発生直後の「発災期」においてはまだ「事象」化はしておらず、「事態」のままの表現が用いられているという仮説を立てた。

また、溝井(2009)は、Röhrich(1971)の「メモラート (Memorat)」という概念を取り上げ、次のような説明を引用している³。

出来事が体験者自身によってまだ報告されているとき、まだ形をもたず、空想に彩られず、長期間の伝承の兆候を示していないとき、われわれはそうした報告を「メモラート」と呼ぶ。⁴

溝井(2009)はこの Röhrich(1971)の説明を受けて、「メモラート」は「事件に直接関わった人びと、ないしそれに近い世代の人びとによる報告」と定義する⁵。報告とは「事態」の羅列である。本研究では、「発災期」に集められた体験談集の内容は、この「事態」の「報告」ととどまっており、そこにはまだ「教訓」は存在しないのではないか、という仮説を立てた。

3.3 方法

3.3.1 分析手法

本研究では、分析ツールとして KH Coder を使用する。樋口(2020)は、計量テキスト分析を次のように定義している。

² 永田素彦・矢守克也, “災害イメージの間主観的基盤：昭和 57 年長崎大水害についての会話分析”, 実験社会心理学研究, Vol.36, No.2, pp.197-218, 1996, p.201

³ 溝井裕一, “伝説と集合的記憶：伝説において過去はいかに「想起」されるのか”, 関西大学東西学術研究所紀要, No.42, pp.61-99, 2009, p.88

⁴ Röhrich, Lutz: Sage. Stuttgart: J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1971, p.52

⁵ 溝井, 2009, p.88

計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法である。計量テキスト分析の実践においては、コンピュータの適切な利用が望ましい。⁶

川端(2003)は、計量テキスト分析によって得られる結果を「潜在的論理」と呼称する。

計量分析することによって、単なる自由回答やテキストデータを読んでいるだけでは気づかない、あるいは気づきにくいデータの「潜在的論理」を発見できる可能性があると考えられる。分析の対象とする文章を読んで、文字通りに解釈するのではなく、文をいったん語に分解し、その語と語の間の連関の強さを元に単語の使われる暗黙の意味構造を新たな「潜在的論理」として、いわば文法のように取り出し、データ理解の枠組みとして用いるのである。つまり計量的な分析が、多変量解析の手法を用いて潜在的な概念を見いだすのと同じようなことが、質的データを対象として実現可能となるはずである。⁷（傍点は筆者）

被災者の「語り」の変容が被災者自身も無自覚に生じているのであれば、「時間経過によって何が変わりましたか？」と被災者本人に尋ねるだけでは、その特徴を把握することはできないと考えられる。そこで、本研究では「潜在的論理」を明らかにすることができる計量テキスト分析という手法を採用することで、時間経過による「語り」の変容の傾向を明らかにすることを試みる。

3.3.2 分析対象

本研究の分析対象は、「平成26年8月20日広島豪雨災害体験談集」⁸（以後、「8.20災害体験談集」）である。「8.20災害体験談集」に収められている体験談は、広島市防災ネットワークの代表世話人（当時）の柳迫長三氏が、砂防学会緊急調査団長であった広島大学海堀正博教授の指導のもと、発災から10日後の8月30日から被災地を歩き、被災者に直接お願いをし、被災体験を被災者自身に作文してもらい、柳迫氏宛てに郵送するという方法で集められた。全92名分の体験談のうち、作文が苦手という8名の被災者に対しては、広島大学総合科学部4年（当時）の稲山諒氏が聞き取りを行なった。表4は、「8.20災害体験談集」への寄稿

⁶ 樋口耕一，”社会調査のための計量テキスト分析【第2版】：内容分析の継承と発展を目指して”，ナカニシヤ出版，2020，p.15

⁷ 川端亮，”宗教の計量的分析：真如園を事例として”，大阪大学大学院人間科学研究科平成14年度博士論文，2003，p.41

⁸ 海堀正博・柳迫長三編著，”平成26年8月20日広島豪雨災害体験談集”，砂防学会2014年8月広島大規模土砂災害緊急調査団，2015

者の居住地をまとめたものである。「8.20災害体験談集」に収められた92名の体験談を計量テキスト分析し、その特徴を得た。

表 4 「8.20 災害体験談集」への寄稿者の居住地（筆者作成、単位：人）

区	地区	人数	
安佐南区	八木	25	40
	緑井	14	
	山本	1	
安佐北区	三入	32	52
	可部・可部東	10	
	大林	10	
計		92	

3.4 結果

表 5 は、形態素分析の結果である。「総抽出語数」は 66,120 語、「異なり語」は 4,910 語、分析対象となった「異なり語（使用）」は 4,246 語だった。集計単位ごとのケース数は、文単位で 2,517 だった。「総抽出語数」とは、分析対象のファイルに含まれているすべての語の延べ数(tokens)、「異なり語数」とは、同じ単語が何度用いられても一語と数え、何種類の語が含まれているかを示す数(types)、「(使用)」とは、分析対象として KH Coder が認識している語の数である⁹。助詞や助動詞のように、どのような文章の中にでもあらわれる一般的な語が分析から除外される。

表 5 「8.20 災害体験談集」の形態素分析の結果（単位：語）

総抽出語数	66,210
異なり語	4,910
異なり語（使用）	4,246
文	2,517

⁹ 樋口, 2020, p.142

次に、表6は、テキスト分析の結果から、頻出語を抽出したものである。抽出された語のうち、動詞や副詞、形容詞などは、使われるコンテキストによって意味が異なるため、客観的なデータとして分析することは難しいと考え、抽出語の品詞を、漢字を含む2文字以上の語である「名詞」、「する」を付すと動詞になる「サ変名詞」、漢字1文字の語である「名詞C」（漢字1文字の語）に限定した。体験談集への寄稿者は92名であったので、平均してひとり1回以上、すなわち92回以上登場している語を「頻出語」と定義し、抽出を行った結果、頻出語数は12語であった。

表 6 「8.20 災害体験談集」の頻出語（単位：回）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
家	326	水	167	ボランティア	123
避難	314	雨	154	人	122
土砂	297	音	149	雷	108
災害	225	外	147	道路	107

永田ら(1996)の定義に照らし合わせると、表6に抽出した12語のうち、「家」「水」「雨」「音」「外」「人」「雷」「道路」の8語が「具象名詞」であり、「避難」「土砂」「災害」「ボランティア」の4語が「抽象名詞」とであるといえる。ただし、「ボランティア」という語が用いられるコンテキストは、主にボランティアに対する感謝の意を表するものであり、災害当時の体験談を語るコンテキストではほとんど使用されていない。したがって、体験談集に寄せられた体験談では、まだ自身の解釈の上での「事象」化しておらず、「事態」に止まっていることが見てとれた。

次に、図9は「8.20 災害体験談集」において出現回数50以上の語の共起ネットワークである。「8.20 災害体験談集」に収められている体験談集は含まれている語の数にばらつきがある。樋口(2020)によると、「スパースなデータ、1つの文書に含まれる語の数が少なく、それぞれの語が一部の文書にしか含まれていないようなデータでは、語と語の関連を見るために Jaccard 係数を使用するとよい」¹⁰。KH Coder において、語 A と語 B のどちらかもしくは両方を含む文書（本論文では「文」）のうち、語 A と語 B の両方を含む文書の数、すなわち割合のことである。Jaccard 係数には、ある特定の2語のどちらも出現していない文書が多数あったとしても、それによってその2語間の係数が大きくならない、すなわちそ

¹⁰ 樋口, 2020, p.180

の 2 語のどちらも含まない文書があるからといって関連が強いとは見なさないという特徴があるため、スパースなデータの分析に適しているという。したがって、「8.20 災害体験談集」の分析では **Jaccard** 係数を使用することとした。

「共起ネットワーク」とは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだものである¹¹。線でつながっていることがそのまま語と語の共起を示す。「名詞」

「サ変名詞」「名詞 C」に品詞を限定して抽出を行なった結果、描画されている語を示す **node** の数は 34、共起関係を示す線である **edge** は 60、密度を示す **density** は.107 だった。密度とは、実際に描かれている共起関係の数を、存在し得る共起関係 **edge** で除したものである¹²。

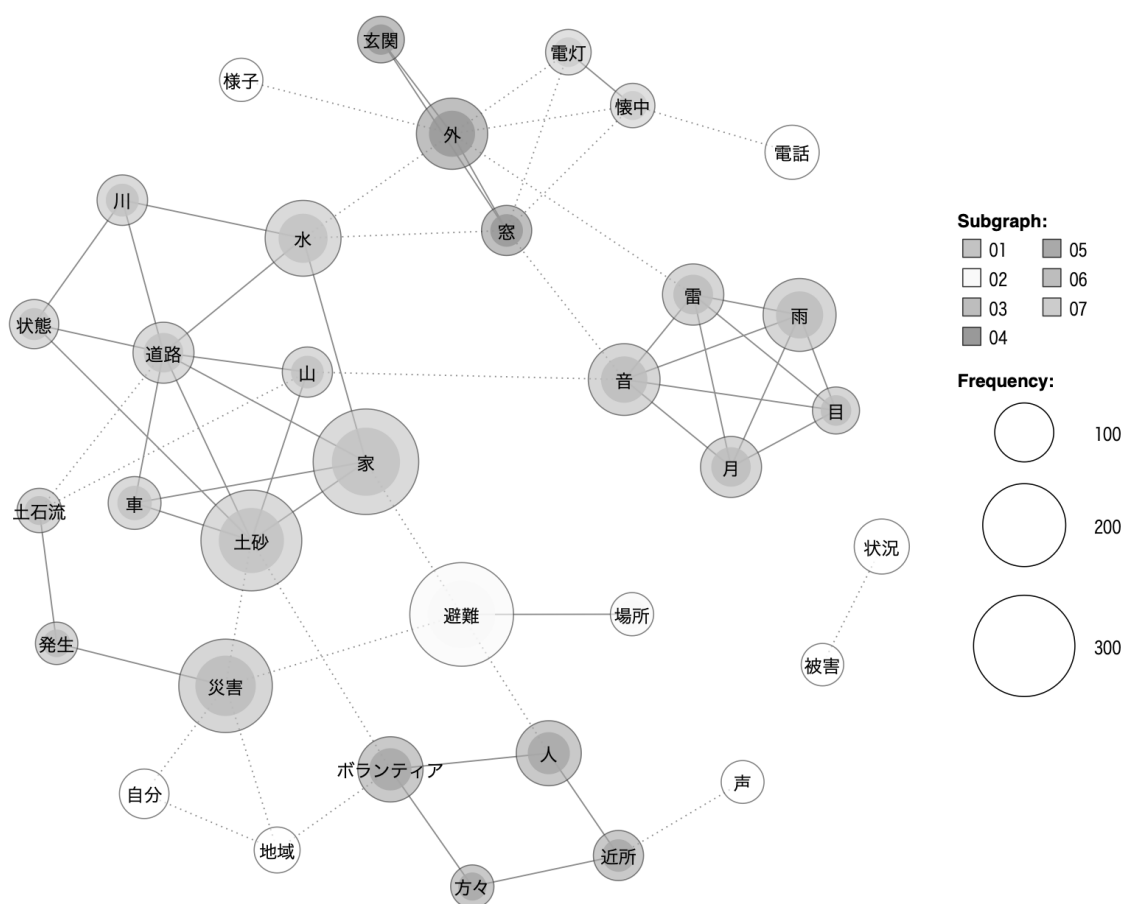


図 9 「8.20 災害体験談集」における出現回数 50 以上の語の共起ネットワーク

¹¹ 樋口, 2020, p.182

¹² 樋口, 2020, p.184

表 6 に抽出した「抽象名詞」のうち「土砂」に着目すると、「家」「道路」「山」「車」「状態」と直接共起があり、同じグループ内に「水」「川」という語が存在する。以上の 7 語を「具象名詞」と「抽象名詞」に分類すると、「家」「道路」「山」「車」「水」「川」の 6 語が「具象名詞」、「状態」が「抽象名詞」であると考えられる。以上のことから、「土砂」という「抽象名詞」を使用した文脈で「具象名詞」が多用されており、やはり被災者の中で被災体験が完全には「事象」化しておらず、起こったことを具体的に描写する「報告」の段階にとどまっていることが見て取れた。

また、頻出語では抽出できなかった表現の特徴として、擬音語・擬態語が多く用いられていた。矢守(2009)は、擬態語の多用について、被災者が「その体験を適切に表現・伝達する言葉を、本人の日常生活の中に見いだすことができず、混沌としたその〈場所〉の状況を表現しきれずにいることを示している」と分析する。また、喜多(2002)によると、「擬音語・擬態語とは、さまざまな情報源（たとえば、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、感情、運動、空間的思考など）から得られた情報を命題化せずに「生のまま」でとらえ、ある状態または出来事を表現したもの」であるという。

3.5 考察

「情報が命題化されていない」ということは、そこには被災者による自分自身の被災体験に対する解釈は存在しない。したがって、被災者が今後に活かしたいと考える「教訓」は、この時点ではまだ見出されていないと考えられる。これが、「発災期」における、被災者の被災体験の表現の特徴である。

3.6 小括

本章では、災害発生直後の「発災期」における体験談の特徴を明らかにした。

「8.20 災害体験談集」に集められた証言は、まだ解釈が加えられていない「生のまま」の出来事についての報告である。したがって、「8.20 災害体験談集」に集められた体験談は、「メモラート」であるといえる。喜多(2002)が「擬音語・擬態語は、いつどこでということを特定しないその場その瞬間における印象をそのまま表わす」だけの、「主体性というものを客観的に語りえない『無主体的な観点』から」¹³捉えたものであると指摘するように、この時点では被災者の「語り」に、被災者地震が今後に活かしたいと考える「教訓」は存在しない。したがって、「発災期」においては、まだ自身の被災体験に対する解釈は存在せず、単なる事態の報告にとどまっていることが明らかになった。次章では、この事態の報告が、時間経過の過程においてどのように変容していくのかについて検討する。

¹³ 喜多, 2002, p.74

第4章 ある被災者の被災体験の「語り」の分析

4.1 はじめに

第4章では、被災者の「語り」は時間経過にとともに変化するのではないか、という仮説を検証する。ミルズ(2017)によると、社会科学は、「個人史の問題、歴史の問題、社会構造におけるその交差の問題を扱う」¹。つまり、歴史や社会構造がその人の個人としてのありように影響を与えるのと同様に、個人がどのように生きるかという個人史も、歴史や社会構造について考える際に切り捨てることはできない。

そこで、ある被災者に、災害発生から3年後と5年後の2度にわたりインタビュー調査を実施し、その結果を比較検討することで「語り直し」の特徴を分析し、被災者の語りの時間経過による変容の枠組みを見出すことを試みる。

4.2 目的

本章では、ある被災者の被災体験の「語り直し」を分析することで、被災者の「語り」は時間経過にとともに変化するのではないか、という仮説を検証することを目的とする。野口(2018)は、「自己語りはつねにある時点である文脈に沿って行われるものであり、時間がたち、文脈が変われば、異なる形で語り直される可能性につねに開かれている」と指摘し、「どのように語り直すのか」という視点が重要であると指摘する²。この「語り直し」に着目する。

4.3 方法

本調査のインタビュー対象者である被災者を、以後「M氏」と呼称する。M氏は、広島市安佐南区緑井地区在住の60代の男性で、8.20広島土砂災害での被害は家屋の床下浸水である。現在も、災害前と同じ場所に居住している。M氏は被災後、同区の八木地区に2016年4月3日に開館した、災害の記憶と「教訓」を語り継ぐための災害伝承施設「復興交流館モンドラゴン」(以下、モンドラゴン)において、開館当初から事務局長を務めている。そのためM氏は、自身の被災体験とは別に、他の被災者の体験談や当時の気象情報、また土石流の発生メカニズムなど、多様な情報を有し、語るができる。

そのM氏に、2017年1月12日と2019年7月11日の2度、インタビューを実施した。前者を「3年目インタビュー」、後者を「5年目インタビュー」と呼称する。インタビュー内容は許可を得た上で録音した。そして、「語り」の内容の変化を明らかにするため、筆者が

¹ C・W・ミルズ著／伊奈正人・中村好孝訳、「社会学的想像力」, ちくま学芸文庫, 2017, p.244

² 野口裕二, 「当事者研究が生み出す自己」, 自己語りの社会学: ライフストーリー・問題経験・当事者研究, pp.249-267, 2018, p.265

文字起こしして計量テキスト分析し、時間経過による変容の特徴を得ることとした。分析には、KH Coder を使用した。

4.4 結果

4.4.1 記述統計量

表 7 は、形態素分析の結果である。

表 7 M 氏の「語り」の形態素分析の結果（単位：語）

	3年目インタビュー	5年目インタビュー
総抽出語数	13,576	6,408
異なり語	1,320	778
異なり語（使用）	1,025	567
文	866	365

まず、3 年目インタビューの形態素分析の結果、「総抽出語数」は 13,576 語、「異なり語」は 1,320 語、分析対象となった「異なり語（使用）」は 1,025 語だった。集計単位ごとのケース数は、文単位で 866 だった。一方、5 年目インタビューの形態素分析の結果、「総抽出語数」は 6,408 語、「異なり語」は 778 語、分析対象となった「異なり語（使用）」は 567 語だった。集計単位ごとのケース数は、文単位で 365 だった。

この結果には、インタビュー時間の短縮が影響していると考えられる。3 年目と 5 年目のいずれにおいても、インタビュー開始時の質問は「2014 年 8 月 20 日の被災体験について、教えてください」統一している。そして、M 氏が自ら終了を申し出るまで「語り」を続けてもらった。その結果、5 年目インタビューの時間は 3 年目インタビューのそれよりはおおよそ 1 時間短くなった。この結果から、「語り」の内容が 2 年という時間経過によって対象者の中で選別されたことがわかる。

4.4.2 頻出語の抽出

次に、出現回数の上位 15 位の頻出語の抽出を行なった。今回の調査対象者は M 氏 1 名であるため、品詞は限定していない。表 8 が 3 年目インタビュー、表 9 が 5 年目インタビューの頻出語である。抽出した 15 語のうち、「人」「行く」「来る」「出る」「思う」「見る」「入る」「上」「流れる」の 9 語は、3 年目インタビューと 5 年目インタビューのいずれにお

いても上位であった。一方、3年目インタビューにおいて上位に入っている「家」「埋まる」「避難」「前」「月」「感じ」の6語は、5年目インタビューにおいては抽出されていない。また、5年目インタビューにおいて上位に入っている「息子」「待つ」「自分」「大丈夫」「言う」「動く」の6語は、3年目インタビューにおいては抽出されていない。

表 8 M氏の3年目インタビューにおける出現回数上位15位の頻出語（単位：回）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
人	56	思う	32	埋まる	27
行く	42	見る	30	避難	24
家	40	入る	30	前	22
来る	38	上	29	月	20
出る	34	流れる	27	感じ	19

表 9 M氏の5年目インタビューにおける出現回数上位15位の頻出語（単位：回）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
出る	32	言う	18	自分	12
来る	30	息子	16	人	11
行く	26	上	14	大丈夫	11
見る	22	思う	13	動く	11
入る	19	待つ	13	流れる	11

3年目インタビューのみに抽出された語のうち、まず、「埋まる」という動詞に着目すると、主語がM氏本人であったのは、27回の出現のうち3回のみであった。残りの24回は、自分以外の他者のエピソードのコンテキストが14回、家や車、道路やガードレールなどのものの状態を表すコンテキストが10回であった。

【自分の体験】

これを超えてここへ入ったときに、ここまで埋まった。で、このiPhoneが、プチッ。パンクした。水に濡れてだめになった。ここまで埋まってたもんね。ここ大丈夫だ、と思ってここ通って、こっち行ったら、ズブツてきた。戸締まりして、で、そっから出てった。でそっからバツと出たらね、やっぱり段がある、勝手口のね。で、段をピャッと下りた瞬間にズボッと埋まってね。太ももぐらいまで。抜けないの、足が。

【他者のエピソード】

瓦礫があるから、瓦礫の上に上がれば大丈夫なんだけど、瓦礫から外れるとズボッと埋まっちゃうから。

八木用水があるから、みな埋まるん。消防とかね、警察とかがね。だから「だめだめ！そっち行ったらだめ！ここ、ここ！」つつてね、やってた。「ここは橋があるからここ通って！」とかね。

ここへね、タイルのね、慰霊碑がね。で、ここの下に、埋まってたん。

夜、人が通っちゃいけないからってここ危険のこうね、やったんだけど、入るんだ。これやっとならってもこっち側来るんだ。行ってね、埋まるんよ。埋まると走って行きよった。「また埋まったぞー！」って。

マスコミもね、まあ、すごいよ。うん。ウロウロして埋まりよった、そこへ。そのときに来てた先輩のディレクターさんがいてね、どっかで見たことあるなあと思ったら、ここで埋まった子だった。で、その子も、ここ来たとき新人だったんだよね。で、「そっち行っちゃいけないよ、だめだよ、埋まるからね」って、「行っちゃだめだよ」って声かけて、後ろ向いたら、埋まってた。で、みんな呼びに行って、「おい、また埋まったぞー」。ああゆう感じ。

【道路】

ここだけ埋まってるからね。下が、この倍ぐらいあつたんよ、葉っぱが。みんな枯れちゃってね、上だけに。

ここが埋まるんよ、ズボッと。1週間経っても埋まったもんね。

掘ったんだけどね、これもまたすぐ埋まったね。水抜きですよ、これね。上から流れてくる水をね、通路をつくっていつて。そうするとね、これをまた崩すんよ、みんなが。崩すってのはね、上から、上で人を捜すじゃない。たら掘り返すじゃない。たら、水の流れる道が変わる。またそれに応じてね、掘らなきゃいけない。

これでもう埋まっちゃった。芝も窒息しちゃって。死んでるよね。

あっこはもっとべちょべちょだったから。ここはもう泥の、水分が少なかったのね。でこっちはまだ水が流れてたから、ほとんど水で。やっぱりこのへんまで埋まって。

【家】

そこの和室から玄関の方向を撮った。これ。こんぐらい埋まった。で、玄関ところもね。こんな感じ。

当日は、ええっと、孫が泊まりに来てたの、ええっと、中学生の孫がね。で、孫と、おばあちゃんは、2 階から助け出された。1 階がバツとこれだけ埋まってるから。

【車】

これ、うちの庭。車埋まってる。

下にレンガってゆうか、ブロックがあるんだけど、その上ぐらいまできて。で、車が、こんぐらい埋まった。

【ガードレール】

道を塞いだ感じになった。だって。ゆってました。ね。これガードレール。こんな感じ。これだけ埋まった。

ガードレール見えないでしょ。埋まってるんですよ。

次に、サ変名詞である「避難」は、主に名詞として用いられていた。コンテキストは、M氏の「8.20 広島土砂災害」での被災体験を尋ねたにもかかわらず、被災当時の行動ではな

く、多くは被災後に行った（あるいは行わなかった）「避難訓練」や、それに関連する「避難マニュアル」「避難マップ」という名詞として使用されていた。また、1 回のみ動詞として用いられていたが、その主語も M 氏ではなく地域住民であった。

【避難所】

みんなその、避難所、梅林小学校から、自分の家へ通うってゆう。その繰り返し。

【避難勧告】

そのすぐあとにね、避難勧告が出た。雨が降り始めて。覚えてるねえ。もう少し撮りたいなあと思ったら急にヘリコプターが来て、「避難勧告出ました」って。で、みんな避難した。

【避難準備】

雨が降ったらとにかくもうおばあちゃんは、娘さんのところ行く。避難準備が出ようが出まいが、とにかく雨が降り始めたら、娘さんのところ行く。

【避難マニュアル・避難マップ・避難訓練】

この人がやっぱり、ああゆうこう一連のことをやってみたときに、自分がいかに非力かわかったと。なんにもできなかったと。連合会の会長としてね。だから次にこれを残さないといけないってゆうんで、この人はもう、避難マニュアルをつくってね、で、この、梅林学区の中を全部つくろう、回そう、って回して。で、その、避難マニュアルを全世帯に配って、それと同時に避難マップをつくって。で、それをもとに避難訓練をやるって。で、話しててもね、こう、私も手挙げて「いや、それはおかしいですよ」とかってやったんだけど、避難マニュアルの中身をね、一番良く覚えてた。で、避難訓練終わって。今年の避難訓練ではね、避難マニュアルを変えたんだけど、配んなくていいってゆうの。

自治会でね、おおもとの避難マニュアルをそれぞれ自治会用に作り直して、でプリントまたして。自治会で、避難訓練やるときに「こうゆうかたちですからね」ってみんなに見てもらって、ってやったよと。たら、「そんなんしなくていい。避難訓練だけやりゃいいんだ」。「おかしい！」とかゆうのをやってるんだけど、うーん、聞く耳持たないね。

今も、その社協の会長さんは、もう、社協としては、自主防災会連合会としては今後避難訓練やらないってゆったよ。

まあそりゃあ自治会単位でやれるんだけど、自治会単位で避難訓練やるとしたら、それなりのバックアップをどっかがしないといけないでしょ。

この人間にしたって、みんな、小学校へ避難するってできない。避難したら困るんだもん。キャパがないんだもん。だから、それぞれの人たちが、それを理解して、じゃあ我々は、避難準備が出る段階でもうよそ行こうとかね。から、避難準備が出ないけど、こう、天気図を見るとやばいから、もう先にどっか行っちゃおうとかね。から、その、できるだけ最後まで頑張ろうとかね。自宅で、じゃあ垂直避難だけで、なんとかやろうとかね。

【地域の人】

じゃあ、小学校行って俺確認するわって、朝来て、小学校に行って、あの、誰が避難してるかってのをね、メモ取ろうとして、小学校に行く途中。

以上の結果から、M氏は3年目インタビューにおいては自身の被災体験よりも、災害当時や災害を受けたその後の地域の様子を語っていることがわかった。

次に、5年目インタビューにのみ出現している「言う」「待つ」「動く」という3つの動詞、また、「大丈夫」という形容動詞に着目すると、いずれも、M氏の個人的記憶の表現に用いられている語であることがわかった。

【M氏から妻へ】

「どうもおかしい」って起こすんで、「そう？」って言いながら、起きて。

そういう情報は入ってこないから、ええ、わからない。じゃあ、取りにいくかってっても、うーん、ニュースに出てないもんね。まだね、早くて。だから、メールしかないし、外へも出られないよなあってゆうことで、それは、言ったんよ、もちろんね。どこまでどうなってるかわかんないから今どうもできないからとにかく動かない方がいいからって。一応この家の中にいるかぎり、今んとこ、安全だからね。ならここを動かないで、もう少し状況がわかるまで待とうと。で、明るくなるまで待とうと。人が歩いてるのをこう見てると、その、なんちゅうかな、ここから

なら見えるの。で、歩いてるのを見ると、「あ、あそこは行ってないんだ」ってゆ
うのがわかる。で、こっちやっても見えないよね、なかなか。だけど「あ、あそこ
はこんぐらいしかないんだな」と。「じゃあとりあえずあそこまで行きゃいいやな
あ」ってゆうのを見てて。んで、そこから待って、待ってってか、まだ状況を見て
たら、上からはどんどん流れてくるのが見えてるからね。

「ちょっとこのままここにおろう。誰か来れば、ちゃんと来てくれるから」って。
「彼らに言わなくても、順番があるし、なんらかのかたちで来るだろうから、もう少し待とう」。

【M氏が救助隊へ】

【M氏の息子】

だから「息子が来てくれれば大丈夫だよなあ」ってのがあった。でしかもそれが、ね、えー、「長靴やらなんやら持ってくるから」って言ってたんで。「じゃあ大丈夫だな」って。

8時半ぐらいに、やっと息子と連絡がとれて。で、電話をかけててね。LINE入れてってゆうのはしてたんだけど。たら向こうの方から、LINEかなんかきて。んで、「自分ところはもう全然大丈夫よ」って。で、この一帯らしい、とゆうのが入ってきたから。「安佐南区ってゆうかたちになってるよ」って。で、「とりあえず行くから」。で、「長靴とか持っていくんで、出れる準備をしろってくれ」って。ああ、じゃあまあ来るのを待ってようと。

10時半から11時ぐらいかな、の間に、息子が来た。で、来て、話をしてだ。「じゃあ、そこが通れたんならここから出られるから、じゃあ出ようか」って。で、「お母さんにも通れるか」ってゆったら、「うーん、通れないかもしれない」とかゆうから。「でもこう、抱え上げれば大丈夫だよ」「ほんじゃあそうしよう」。

だからこっちはだめだから壊してそっちから出ようとかね、息子は言う。

その裏口まで行ったときに、彼らはその角で待ってた。「親父がそこから出てこない」って言ってて。もう、あれ埋まってるかもわかんないから、じゃあもう行こうつつって、息子が。いつまでも待ってもだめだから、親父はもう埋まったんだからだめだから行こうって、したときに出てきたつつったなあ。

【M氏の姪】

東京の姪から電話がきて、「おじちゃん映ってるよ」って。「ヘリコプターから映ってるよ」って。「助けを待つ被災者ってゆうので映ってるよ」って言われた。どここのエリアよってゆうのも彼女たちはわかってるからね。見てて。んで、「ああ、そう」とか言って。

【M氏が人へ】

ガソリンがずーっと流れてきてたから、そのうち「くさいよね」と思ったら、下にこうずーっと流れて。「あ、こりゃあ危ないな」と思って、「ここは動けないよな」

と思って、そのベランダの一番前へ行って、じーっとう、誰か来ちゃいけないから、ずーっと待ってて。したら、そっち側からねえ、男性、30代ぐらいの男性が来るわけ。家のはしの方を通りながら上にある木をぽんぽんぽんぽん、こうゆっくり行きながらね。その木をこう、自分でまた動かしながら。んで、そうゆうのがそろって来て、ここに俺がいるのわかってここへきて。で、その、「自分はその、この先におばあさんがいるので、大丈夫かどうか見に行きたいんです」って。話をしながらタバコを吸おうとするから「だめだめ、そこガソリン流れてるから。色が見えるでしょ。ちょっと虹色のが。だからタバコだめ」ってのを言って。んで、「それはもう家の近くを通れば、大丈夫よ」って。「こうゆう、塀とか庭とかなんかを使えば大丈夫ですよ」って。

【車】

下見たら、「あ、埋まってる」ってゆう。で、車が流れてきてる。動いてないよ。

【状況説明】

5時ぐらいからそうゆう状況がはじまって、ええ、いろんなものが時々こう動きはじめるのが8時から動き始める。だから、ヘリコプターが飛んだりとか。救助のヘリがまたあっちから来たりとかね。救助用のヘリと、こう、なに、メディア用のヘリと。で、人は動かない。

【自宅から脱出後】

ちょうどそうするとね、消防とかね、から警察がいた。その角にね。んで、ええ、「大丈夫ですか？」って声かけられて、「うん、大丈夫です。ここまで来たから。うちはもう、全員出たから」。んで、「うちのとなりの家に、女性がひとりいるから。お年の方がいるんで、それを、ちゃんと見てくれ」ってゆったら、そのとなりのおばさんは、ボートに乗ってさ、救助の。あれにちょうど乗ってきた。「ああ、じゃあ、となりの人はあの人だから、この2軒はもう、大丈夫よ」って。

【会社員時代の回想】

仕事しとるときもやっぱりそうじゃね。いろんなところからいろんなこと、言われたこと、お客さんにしてもなんにしてもそれこそみんなに言ってると、変なことになっちゃうんで、やっぱりそれはちゃんと咀嚼して、んで、確実なこと、特に今し

なきゃいけないことを言うようにしないと、ちゃんと動かないから。それはもう、こっちが慌てるともうみんな、動かなくなるから。だからまあ待ってるしかないよね。そうすると、その、あまりにも情報が、入らなさすぎる。んで、まあ、つて言いながら、その、うーん、5時ぐらいだったかな。

相手が今日の何時ごろあげてくれって言ってますよって。お客さんからもねえ、携帯電話が出始めたころから、俺への直接の連絡にしてくれってゆうのはよく言われてて。んで、携帯電話持ってた。そうゆう対応をしてたんで。で、こっちもできるだけ冷静に対応しないと。俺がパニックになるともう動かなくなるわけだから。

まあそこらへんは、時々「冷たい」って言われるけどね。いやいや、冷たく見えるんよ、やっぱり。一緒に、あわせてあげた方がね。「大変だね、大変だね」ってしてる方がいいのかもしれないけど、そうすると、動かないから。

また、名詞に着目してみても、「息子」と「自分」は、M氏自身の被災体験についての言及の増加によるものと分析できる。したがって、5年目インタビューでは、M氏は、これまで語ったことのないような個人的な記憶について語るようになっており、自分を主語にした「語り直し」が確認できたと考えられる。

4.4.3 語と語の関連の分析

次に、語と語の共起関係に着目し、共起ネットワークを作成した。前章の「8.20 災害体験談集」はスパースなデータであったため、Jaccard 係数を使用した。Jaccard 係数には、1つの文書の中に語が1回出現した場合も10回出現した場合も単に「出現あり」と見なして、語と語の共起をカウントするという特徴がある³。しかし、今回のM氏のインタビュー分析においては、3年目インタビューの総抽出語数が13,576語、5年目インタビューの総抽出語数が6,408語であり、比較する2つのデータの総抽出語が大きく異なる。したがって、2つのデータを比較するためには、正規化する必要がある。そこで、M氏のインタビュー分析には、Euclid 距離を用いることとした。Euclid 距離とは、点と点の距離を数値で表したもので、差の二乗和の平方根によって求められる。樋口(2020)によると、Euclid 距離は、1つひとつの文書が長く、各文書中での語の出現回数の大小が重要になる場合の使用に適しているという⁴。Euclid 距離を選択した場合、文書の長さのばらつきに左右されないかたちで計算を行うため、文書中における語の出現回数をそのまま使うのではなく、1,000語あたりの出現回数に調整したものを計算に使用することができる。

³ 樋口, 2020, p.180

⁴ 樋口, 2020, p.180

図 10 と図 11 に、それぞれ 3 年目インタビューと 5 年目インタビューの、Euclid 距離の係数 0.2 以上の共起関係を抽出した。樋口(2014)によると、係数は 0 から 1 までの値をとり、関連が強いほど 1 に近づく⁵。そして、コードの関連を見る場合、「0.1→関連がある、0.2→強い関連がある、0.3→とても強い関連がある」という目安が示されている⁶。本研究でもこの目安に則り、Euclid 距離の係数 0.2 以上の共起関係を抽出した。

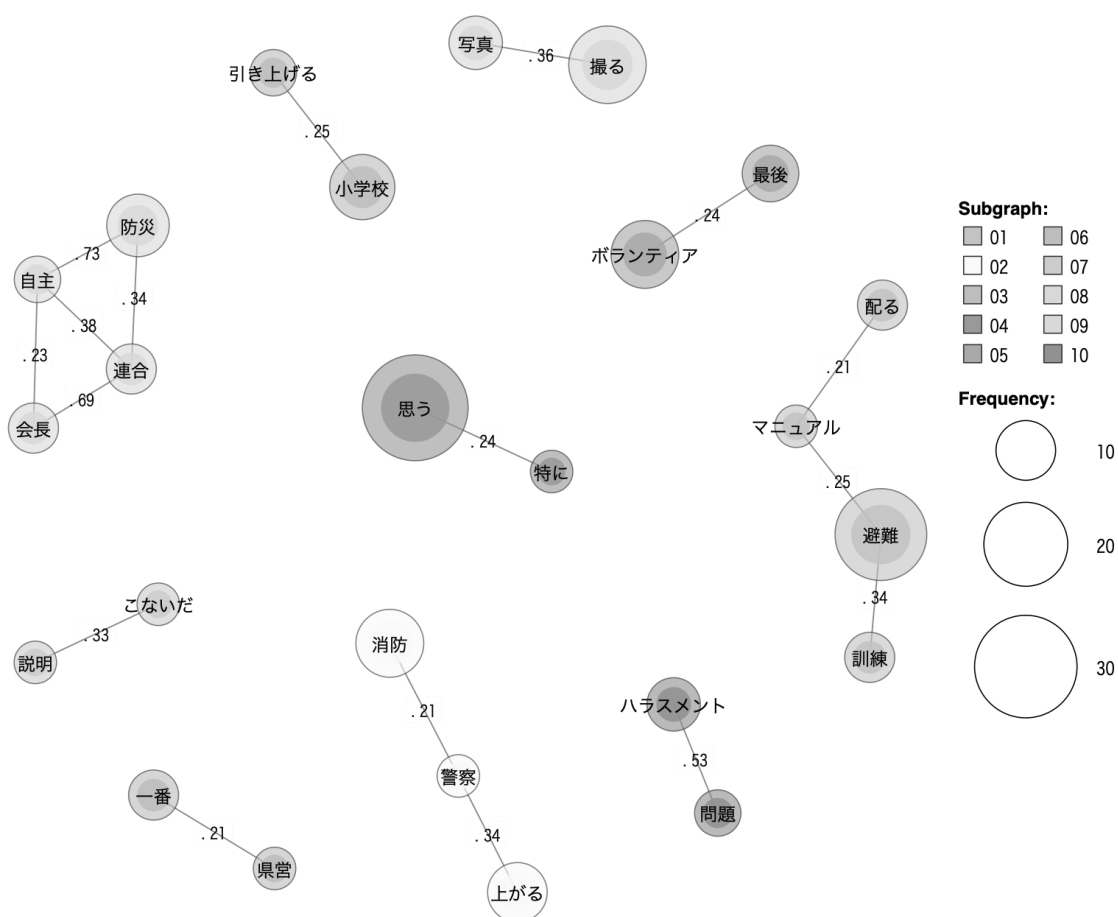


図 10 M 氏の 3 年目インタビューにおける Euclid 距離の係数 0.2 以上の共起ネットワーク

⁵ 樋口, 2020, p.39

⁶ KH Coder 掲示板

http://koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs_khn/khcf.cgi?no=122&mode=allread (最終閲覧日 : 2021 年 7 月 8 日)

http://www.koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs_khn/khcf.cgi?no=1313&mode=allread#1316 (最終閲覧日 : 2021 年 7 月 8 日)

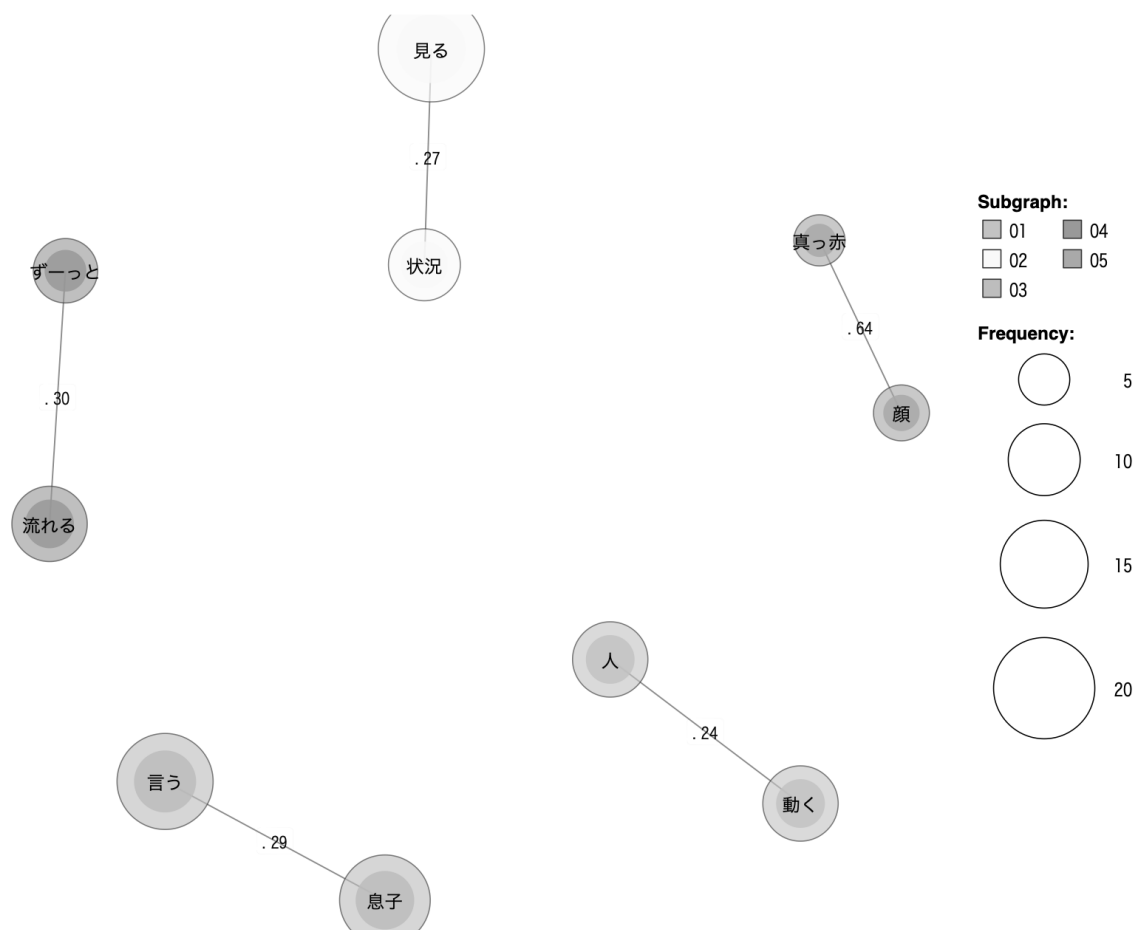


図 11 M 氏の 5 年目インタビューにおける Euclid 距離の係数 0.2 以上の共起ネットワーク

共起関係を分析した結果、相違が 2 点確認された。1 点目は、抽出された共起関係の数である。3 年目インタビューにおいては 10 であったのに対し、5 年目インタビューにおいては 5 に半減していた。2 点目は、共起関係にある語の数である。5 年目インタビューにおいては 2 語の共起関係しか抽出されなかったのに対し、3 年目インタビューでは最大 4 語の共起関係が抽出されている。このことから、3 年目インタビューにおいては、さまざまなテーマについて、より細部まで「語り」が展開されていたことがわかった。

次に、抽出された共起関係の内容に着目する。3 年目インタビューで抽出された「写真-撮る」「こないだ-説明」「思う-特に」「ハラスメント-問題」の 4 組は、M 氏自身の行動や思いについてであるが、残りの 6 組は異なる。「小学校-引き上げる」は自衛隊、「消防-警察-上がる」は救助隊、「ボランティア-最後」はボランティア、「一番-県営」は最後に発見された死亡者、そして「防災-自主-連合-会長」および「避難-訓練-配る-マニュアル」は地域の自主防災組織についてである。つまり、それらは M 氏自身の被災体験ではなく、災

害の概略であると考えられる。一方、5年目インタビューで抽出された「見る-状況」はM氏自身の行動、「ずーっと-流れる」「真っ赤-顔」「人-動く」は、M氏が状況を見た結果である。「息子-言う」も、M氏の「個人的記憶」であると分析できる。

3年目インタビューの内容は、M氏の自宅でインタビューを実施したにもかかわらず、M氏が、8.20広島土砂災害を知らない訪問者に対して、モンドラゴンで8.20広島土砂災害について説明する content と似通っていた。M氏はモンドラゴンを訪れる人びとに8.20広島土砂災害を「正しく」知ってもらうため、より「正確な」情報を提供できるようにするため、自分の体験以外の情報を自ら勉強して手に入れた。また、モンドラゴンや地域活動において、防災・減災のための活動に精力的に取り組んでいる。自身の行動や思い以外に言及した6組の共起関係は、その成果の「語り」である。

4.5 考察

この結果から、語り継ぎにおける「型」と「場」の存在が示唆されたものと考えられる。3年目インタビューにおいては、そのモンドラゴンにおける「語り」を、自宅において自身の被災体験についての「語り」を求められたときにも行っていることが明らかになった。一方、5年目インタビューでは、M氏は、これまで語ったことのないような、個人的な記憶についての「語り直し」が確認できた。

ただし、この「語り直し」は、「この話は今日はじめてするんじゃないけど」という前置きや、3年目インタビューでは語らなかった内容について語ったあとに、「そういえばそんなこともあったわ」と述べるなど、M氏本人にも無自覚に行われていたものと解釈できる。送り手の変容は非選択的・無自覚的である。松島(2002)は次のように述べる。

われわれは、記憶の「変化」に対してはそれを対象化したり把握したりすることができない、いわば無力な存在なのである。この事実、われわれは常に記憶変化の「内部」にあり、その外部に出ることが不可能であることを意味している。

そのため、送り手に変容の根拠や理由を尋ねることは適切ではなく、「語り直し」の原因を、個人のインタビューから分析することはできないと考えられる。

4.6 小括

本章では、あるひとりの被災者の「語り」に着目し、その変容を明らかにした。その結果、3年目インタビューにおいては、さまざまなテーマについて、より細部まで「語り」が展開されていたことがわかった。ただし、それらはM氏自身の被災体験ではなく、災害の概略

であった。一方、5年目インタビューでは、M氏は、これまで語ったことのないような「個人的記憶」について、自分を主語にしての「語り直し」が確認できた。

また、分析結果により、「語り」に見られる「型」と「場」の存在意義が示唆された。災害の事実を正確に表現するために表現の「型」は形作られていき、災害を象徴する「場」が立てられると考えられる。ただし、この結果はあくまでひとりの被災者の「語り」に見られた傾向である。そこで、次章では、この傾向が被災者に一般的に見られる傾向であるのかを検証する。

第5章 被災者の「語り」の変容モデルの構築

5.1 はじめに

第5章では、前章のある被災者に確認できた時間経過による「語り」の変容の特性が、ある被災者に特有の傾向なのか、それとも被災者に一般的に見られる傾向なのかを検討する。

「発災期」には、自分の家族や身の回りのこと以外には手も頭も回らないと考えられる。しかし、「復旧・復興期」に移ると、近所の人びとと会話をし、またマス・メディアが発信する情報に接することによって、災害の概要が客観的に整理されと考えられる。つまり、「復旧・復興期」においては客観的に自身の被災体験を捉えていた被災者たちが、「平常期」に至り自分と他者との被害状況などの相違に気づくことで、自分「独自」の体験を主観的に表現するようになると考えられる。

「復旧・復興期」の客観性を支えるのは、表層的な共有されやすい表現である。この客観性を支えるのは、表層的な共有されやすい「表現」である。匹田ら(2019)はこのメカニズムを、「感動」という概念に当てはめて説明している¹。あるインパクト(本研究においては土砂災害)が生じると、人はまず表層的な部分でこのインパクトを受容する。そこでまず用いられる表現は、他者と容易に共有できるものである。その表現は共通言語のような役割を果たし、それによって被災者は共感し合い、一体感のようなものが生まれる場合もあると思われる²。だが、土砂災害の特徴として被害が局所的であり、狭い範囲内でも被害が大きく異なる場合も多い。つまり、「復旧・復興期」に表層的な表現で自身の被災体験を捉えていた被災者たちが、「平常期」に至り自分と他者との被害状況などの相違に気づくことで、自分「独自」の体験を表現するようになると考えられる。

このような時間軸において、被災者の「語り」は変化すると予想される(図12)。そして、送り手の表現が変化することで、受け手が受け取るメッセージも異なると考え、被災者の語りを防災・減災に活用する際に考慮すべき要素を明らかにする。

¹ 匹田篤・渡邊晃・福田龍典, “体験価値向上のための、感動のモデル化の取り組み”, 第21回日本感性工学会大会予稿集, pp.720-724, 2019, p.722

² R・ソルニット著／高月園子訳, “災害ユートピア：なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか”, 垂紀書房, 2010, p.48

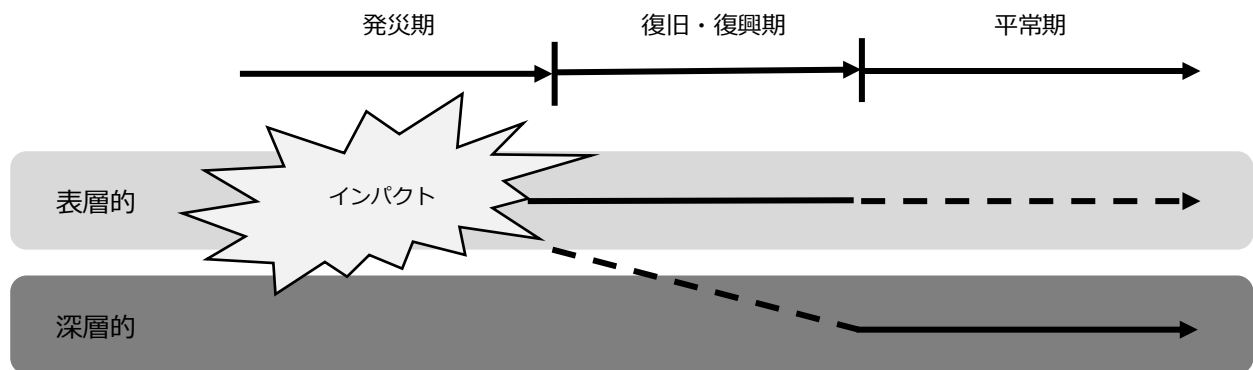


図 12 匹田(2019)をもとにした「語り」の変容モデルの仮説

5.2 目的

前章の M 氏に確認できた時間経過による語りの変容の特性が、M 氏に特有の傾向なのか、それとも被災者に一般的に確認できる傾向なのかを検討することを目的とする。

5.3 方法

本調査では、8.20広島土砂災害において、最も被害が大きかった安佐南区の八木・緑井地区在住の19名の被災者に、発災から3年が経過する前（以下、3年目インタビュー）と5年が経過する前（以下、5年目インタビュー）の2度にわたり、非構造化インタビューを実施した。表10は、インタビュー対象者の属性の一覧である。インタビュー対象者には、19名全員に直接連絡を取り、対面、メール、電話などで何度かやりとりをしたのち、インタビューを申し込んだ。対象者は、性別、年齢、住居被害など、異なる属性を持つ被災者に話を聞くことができるよう努めた。表7は、インタビュー対象者の属性をまとめたものである。

証言の聞き手はすべて（各対象者・時期いずれも）筆者がひとりで行った。これにより、聞き手が与えるバイアスは最小限に抑えることができたと考えられる。同じ相手が聞き手であれば、証言者は「3年前に話したことは再度話す必要はない」と考え、5年目インタビューでは証言内容の一部が省略されてしまうことも懸念されたが、最初のインタビューから2年が経過していることで、「前は何を話したかいね？」という、3年目インタビューで何を話したのかをよく覚えていないという対象者がほとんどであった。つまり、「以前話したから今回は話さなくていい」という判断が生じにくく、自らの体験を改めて語り直してもらうことができたと考えられる。

インタビューの実施場所は、物理的コンテキストによる記憶喚起のため、被災地へ赴き、多くは 8.20 広島土砂災害で被害に遭い、修繕した自宅話を聞いた。対象者 19 名全員において、3 年目インタビューと 5 年目インタビューでの実施場所に変更はない。

本調査での時間的経過区分は、本調査の時間経過の区分は、第3章で引用した岡村(2011)の「平常期」、「警戒期」、「発災期」、「復旧・復興期」という区分と、広島県の土木建築局砂防課・土砂法指定推進担当の「8.20 土砂災害 砂防・治水に関する施設整備計画」に基づいて設定した(表11)。具体的には、発災から3年目の2017年までは、砂防堰堤などを含む緊急事業が整備中であったため「復旧・復興期」とし、工事がすべて完了したそれ以降を「平常期」とした。つまり、3年目インタビューは「復旧・復興期」に、5年目インタビューは「平常期」に実施したことになる。このように異なるが連続した2つの時間区分において実施したことで、その変化を時間経過に基づいて検討することができると考えた³。図13は、それぞれの時間軸の位置づけ示したものである。

表10 3年目・5年目インタビュー対象者の属性一覧

SN	インタビュー日程		性別	被災当時の年代	住家被害
	3年目	5年目			
1	2017年1月12日	2019年7月11日	男性	60代	床上浸水
2	2017年1月19日	2019年7月10日	女性	50代	床上浸水
3	2017年1月20日	2019年7月13日	男性	60代	床上浸水
4			女性	60代	
5	2017年2月5日	2019年8月18日	男性	30代	半壊
6			女性	30代	
7			女性	30代	
8	2017年2月5日	2019年8月18日	男性	60代	半壊
9			女性	60代	
10	2017年3月3日	2019年7月20日	女性	20代	床下浸水
11	2017年3月21日	2019年7月18日	女性	80代	大規模半壊
12	2017年4月17日	2019年7月28日	女性	50代	全壊
13	2017年4月21日	2019年7月9日	女性	50代	大規模半壊
14	2017年4月21日	2019年7月9日	女性	50代	大規模半壊
15	2017年4月22日	2019年7月14日	女性	20代	床上浸水
16	2017年4月24日	2019年7月18日	女性	60代	半壊
17	2017年4月27日	2019年7月11日	女性	50代	大規模半壊
18	2017年4月28日	2019年7月18日	女性	50代	×(ライフラインのみ)
19	2017年5月15日	2019年7月9日	男性	60代	大規模半壊

³ なお、緊急砂防事業においては国土交通省も取り組んでおり、こちらは2020年12月6日に完成式が執り行われている。被災住民のなかには、「この国の事業が完了してようやく安心することができた」と語るものもいると聞が、本研究においては県の緊急砂防事業の施設整備計画を用いて時間区分を決定した。

表 11 「8.20 土砂災害 砂防・治山に関する施設整備計画」の進捗状況（広島県⁴より筆者作成）

区分	事業主体	事業種別	整備計画 対象箇所	緊急事業	2016年3月末 までに完了	2017年3月末 までに完了	2017年5月末 までに完了
砂防	国土交通省	砂防事業	30	24	16	7	1
	広島県 (砂防課)	砂防事業	14	7	7	-	-
		急傾斜地 崩壊対策事業	7	4	4	-	-
小計（砂防）			51	35	27	7	1
治山	農林水産省	治山事業（溪関工）	7	7	1	6	-
		治山事業（山腹工）	3	3	2	1	-
	広島県 (森林保全課)	治山事業（溪関工）	17	9	9	-	-
		治山事業（山腹工）	3	3	3	-	-
小計（治山）			30	22	15	7	-
広島市等		その他事業	18	-	-	-	-
小計（その他）			18	-	-	-	-
合計			99	57	42	14	1

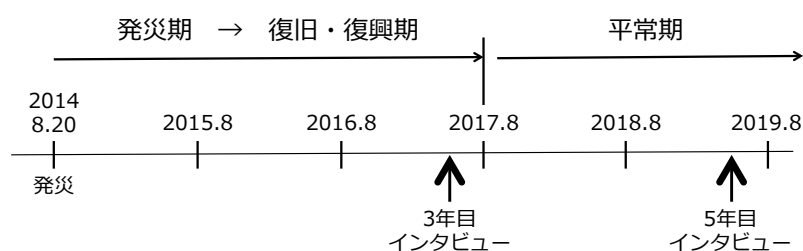


図 13 3年目および5年目インタビューの位置づけ

インタビュー内容はすべて対象者に許可を得た上で録音した。そして、「語り」の変化を明らかにするため、文字起こしして計量テキスト分析し、時間経過による変容の特徴を得ることとした。分析には、KH Coder を使用した。

⁴ 広島県，「8.20 土砂災害 砂防・治水に関する施設整備計画」の進捗状況について【砂防課】”

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/100/0820sabotisan-shisetsuseibi-sinchokujoukyou.html>（最終閲覧日：2021年8月9日）

5.4 結果

5.4.1 記述統計量

3 年目インタビューと 5 年目インタビュー、それぞれの形態素分析の結果を表 12 に示す。

表 12 3 年目インタビューと 5 年目インタビューの形態素分析の結果（単位：語）

	3年目インタビュー	5年目インタビュー
総抽出語数	128,742	69,799
異なり語	5,456	3,553
異なり語（使用）	4,726	3,009
文	6,466	3,551

3 年目インタビューの形態素分析の結果、「総抽出語数」は 128,742 語、「異なり語」は 5,456 語、分析対象となった「異なり語（使用）」は 4,726 語、集計単位ごとのケース数は、文単位で 6,466 だった。一方、5 年目インタビューの形態素分析の結果、「総抽出語数」は 69,799 語、「異なり語」は 3,553 語、分析対象となった「異なり語（使用）」は 3,009 語、集計単位ごとのケース数は、文単位で 3,551 だった。

この結果には、インタビュー時間の短縮が関係していると考えられる。3 年目と 5 年目のいずれにおいても、インタビュー開始時の質問は、M 氏への非構造化インタビューと同様、「2014 年 8 月 20 日の被災体験を教えてください」で統一し、対象者が自ら「語り」の終了を申し出るまでインタビューを続行した。その結果、5 年目インタビューの語りの平均時間は 3 年目インタビューと比較して 1 時間弱短くなった。その結果がこの語数の減少に反映されていると考えられる。

時間短縮の理由として、2 年という時間経過によって、対象者の中で語る内容が選別されたことが要因のひとつとして読み取れる。つまり、3 年目インタビュー時の「復旧・復興期」にはまだ混乱の途上であったのに対し、「平常期」に至った 5 年目インタビューでは、自分の体験や自分に関係のある情報を取捨選択して、自らの被災体験を語るできるようになったと考えられる。

5.4.2 頻出語の抽出

まず、出現回数の上位 15 位の頻出語の抽出を行った。第 3 章の「8.20 災害体験談集」の分析と同様の理由から、抽出語の品詞を「名詞」「サ変名詞」「名詞 C」に限定した。その結

果、3年目インタビューでは頻出回数 60 以上(表 13)、5 年目インタビューでは頻出回数 30 以上(表 14)の語が抽出された。19 名の対象者のうち、家族 3 人や夫婦 2 人など、同じ日程で話を聞いた人たちを 1 つのグループとして考えた場合、インタビュー対象は計 15 組となるため、1 組のインタビュー中に 2 回以上登場していることを「頻出」と定義すると、いずれも頻出語が抽出できていると判断できる。

表 13 3 年目インタビューにおける出現回数上位 15 位の頻出語（単位：回）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自分	216	地域	100	一緒	77
話	195	子ども	89	消防	75
災害	180	ボランティア	87	小学校	68
感じ	171	最初	86	仕事	65
避難	133	防災	82	被災	64

表 14 5 年目インタビューにおける出現回数上位 15 位の頻出語（単位：回）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
感じ	136	自分	58	友達	39
避難	88	電話	55	子ども	38
話	86	向こう	46	停電	35
土砂	67	状態	44	一緒	31
災害	61	主人	40	消防	31

3 年目インタビューに比べて 5 年目インタビューの上位 15 位の出現回数が約半数になっている要因としては、「語り」の時間の短縮とともに発話の絶対数が減ったためと考えられる。一方で、抽出された語の内容に着目すると、3 年目インタビューで頻出上位にあった語がそのまま 5 年目インタビューでも上位を占めているわけではないことがわかる。

「電話」、「主人」、「友達」などは、5 年目インタビューではじめて登場した語である。したがって、「語り」の時間だけでなく、内容にも変化があったと考えられる。

この理由として、3 年目インタビューにおいて出現回数が多い、複数の「語り」に共通し

て使用されている語は、共有しやすい表層的な表現であり、この時期には被災者はそのような共通語に当てはめるかたちで自分の被災体験を解釈すると考えることができる。一方、共通する語が少ないということは、それぞれの被災者が、それぞれの表現で自らの被災体験を語るようになったと推察できる。すなわち、3年目インタビューでは自分固有の被災体験よりも表層的な 8.20 広島土砂災害の概略が語られていたのに対し、5年目インタビューでは自分独自の体験談を語るようになったと考えられる。

5.4.3 抽出語の出現回数と出現比率の推移

次に、3年目インタビューにおいては出現回数が多かったが、5年目インタビューでは減少した、あるいは3年目インタビューでは頻出語として抽出されず、5年目インタビューではじめて抽出された語の分析を行った。抽出した語の使用頻度の変化を図14に示す。抽出した12語は、いずれも他の語と比較して出現回数の増減の変化が顕著だったものである。

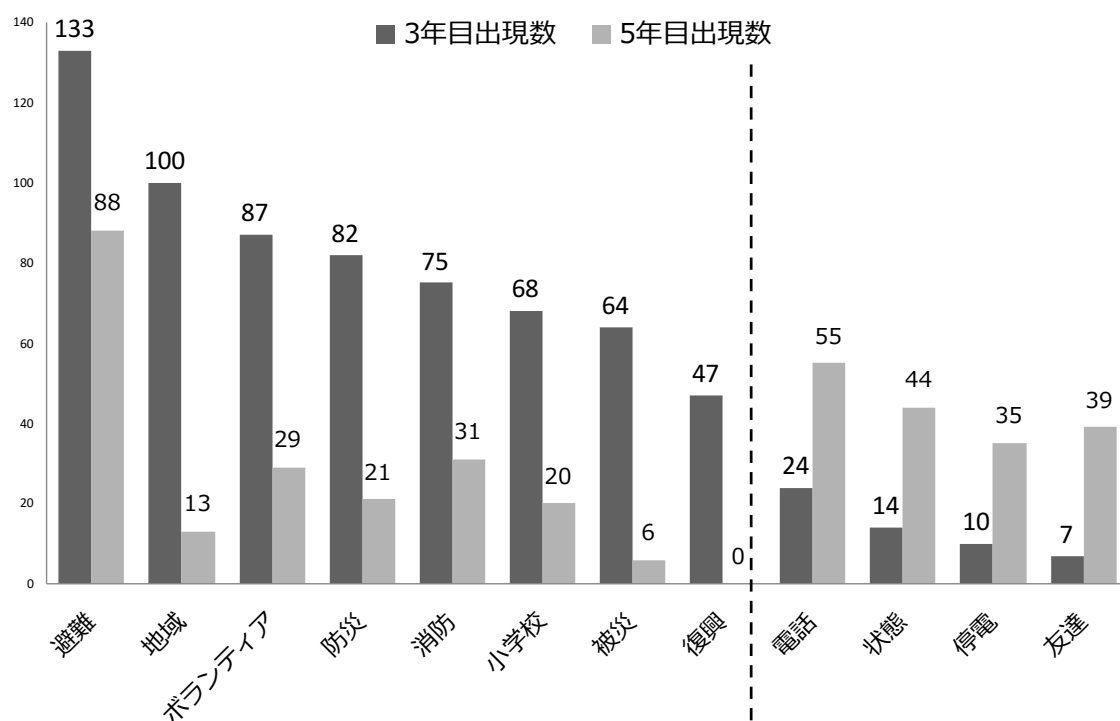


図 14 3年目・5年目インタビューから抽出した頻出語の使用頻度の変化（単位：回）

縦軸は出現回数を示しており、横軸は左から順番に、3年目インタビューで出現回数が多かった語を配置した。「避難」、「地域」、「ボランティア」、「防災」、「消防」、「小学校」、「被災」、「復興」の8つの語は、3年目インタビューでは出現回数が多く、対象者の「語り」に

共通して使用されていたが、5 年目インタビューでは出現回数が大幅に減少した。一方、右側に並べた「電話」、「状態」、「停電」、「友達」の 4 つの語は、3 年目インタビューでは出現回数が 30 回以下だったのに対し、5 年目インタビューでは 2 倍以上の回数で出現した。

ただし、3 年目インタビューと 5 年目インタビューでは、総抽出語数が大きく異なるため、単純に出現回数で比較するだけでは十分でない。そこで、データを正規化するため、総抽出語数に占める割合に着目する。図 14 では使用頻度の絶対数に着目したが、図 15 には総抽出語数における出現比率を示した。

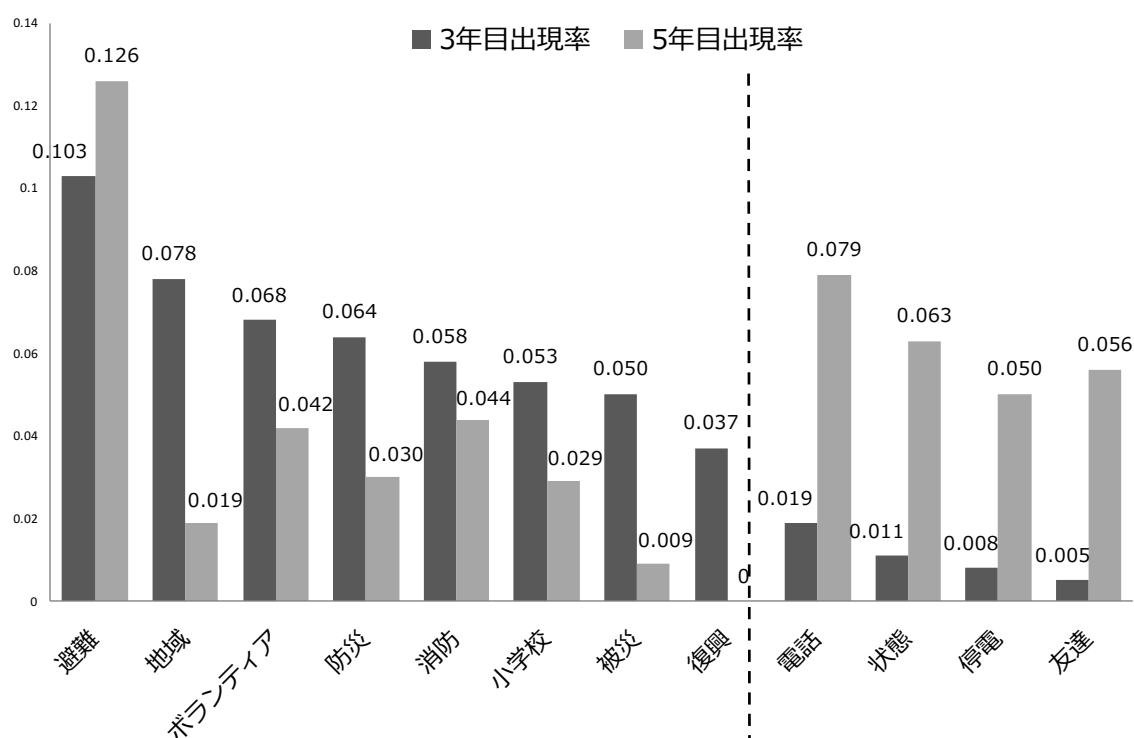


図 15 3 年目・5 年目インタビューから抽出した頻出語の使用比率の変化（単位：%）

使用比率に着目した結果、抽出した 12 語のうち、「避難」以外の 11 語は使用比率においても使用頻度と同様の傾向が確認された。しかし、「避難」においては、出現率は 3 年目インタビューから 5 年目インタビューにかけて、使用頻度の変化とは反対に使用比率が増加しており、他の頻出語とは違う傾向があることが明らかになった。

5.4.4 「避難」の関連語の分析

他の頻出語とは異なる傾向が見て取れた「避難」の時間経過による変化をより詳細に分析するために、関連語検索を行った。図 16 と図 17 は、それぞれ 3 年目インタビューと 5 年

目インタビューにおける「避難」の関連語の共起ネットワークである。関連が特に強い語同士が線で結ばれており、検索の条件として用いた「避難」が二重の正方形で囲まれている。表示順は、発話語の絶対数の相違の影響を排するため、検索の条件にあてはまる文書群の中で計算した出現確率（条件付き確率）が、全体での出現確率（前提確率）よりもどの程度大きくなっているかを示す値である「確率差」を選択し⁵、係数 0.2 以上の関連性の強い共起関係を抽出した。表示している数値は係数である。

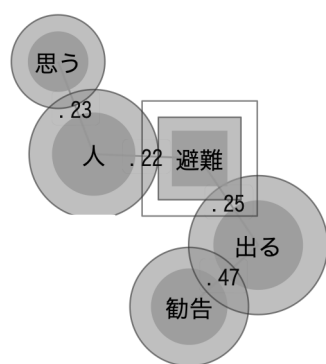


図 16 3 年目インタビューにおける「避難」の関連語の共起ネットワーク

分析の結果、図 16 の 3 年目インタビューにおいては、「避難」は「出る」という動詞と強い関連があり、「勧告」という名詞とも強い関連が確認された。これは、3 年目インタビューにおいては「避難」は、「避難勧告」などの名詞として用いられ、「出る」という他動詞とともに多用されていたことを示している。また、「避難」と同じグループにある語は「出る」「勧告」「人」「思う」の 4 語のみであった。

⁵ 樋口耕一，“社会調査のための計量テキスト分析【第 2 版】：内容分析の継承と発展を目指して”，ナカニシヤ出版，2020，pp.172-173

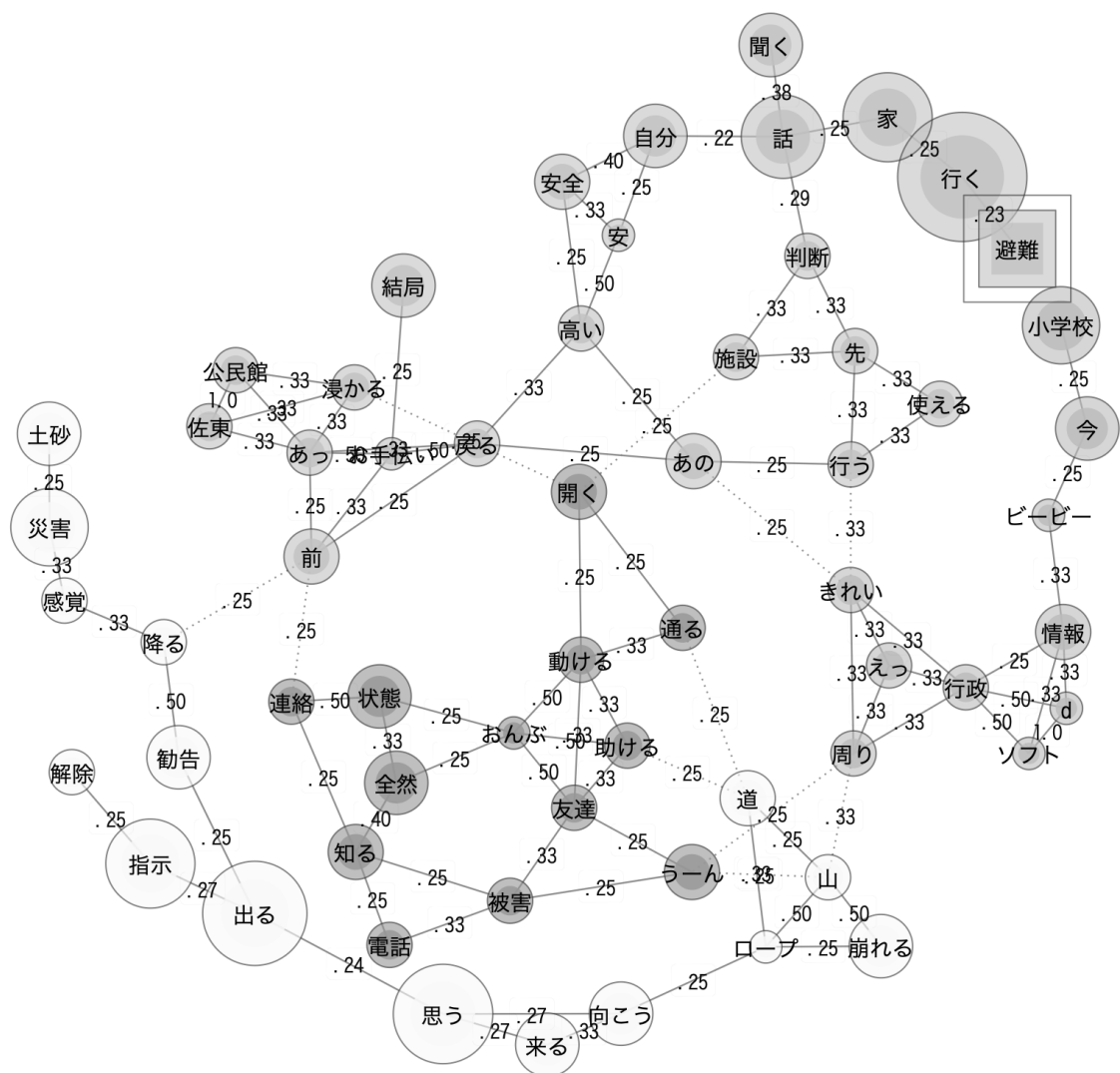


図 17 5 年目インタビューにおける「避難」の関連語の共起ネットワーク

それに対し、図 17 の 5 年目インタビューにおいては「行く」という動詞のみと強い関連が確認された。5 年目インタビューにおいて「避難」は、避難するための場所へ「行く」という自動詞とともに、あるいは自動詞として用いられていたことを示している。また、直接的な関連が確認された語は「行く」だけであったが、同じグループ内に計 22 語が含まれており、さらに「避難」と同じグループの語が他の 3 つのグループの語とも係数 0.2 以上の強い共起関係があり、共起ネットワークが大きく広がっている。

この結果から、以下のように考察できる。「避難」という語は、「避難勧告」や「避難指示」などの名詞として、あるいは「避難する」という動詞や「避難する人」や「避難した場所」など、さまざまなコンテキストで用いられる、非常に使われやすい言葉であると考えられる。一方で、図 17 の共起ネットワークの広がりから鑑みると、「避難」が使われるコンテキストや

意味には多様性があると考えられる。この多様性とは、すなわち個々の「オルタナティヴ」な「個人的記憶」の表現にも「避難」という語が使用されていることを意味していると考えられる。

5.4.5 被災者の「語り」における「避難」のコンテキストの変化

この結果を、より定性的に分析する。表 15 は、「避難」という語が出現するコンテキストの例示として、3 名の語りの内容から「避難」に関する言及を抜粋したものである。

表 15 3 名の被災者の「語り」の抜粋

SN	3年目インタビュー	5年目インタビュー
6	この一帯が、避難指示、避難勧告よりも上の避難指示が出て、もうその人ら別に家で特に困ってないけどってゆうのが避難所に来たりする。	あくまで個人的にだけど、避難はよっぽどのことがない限りしない。だってあれぐらい崩れたって僕は死ななかったの。あれ以上の大災害が起こったらどこにいても死ぬ可能性があるので。あれより小さい災害では死なないと判断しているの。だから避難はしない。
8	避難所に移動するのに、消防団かな、そうゆうたかな、自分らでやったら当然埋まっちゃうんでね。消防、救助隊ゆうんか、その人たちが道みたいなんをしてくれとって、「ここ通って避難してください」みたいな。	自分が危機感をもってね、また、土砂がくる可能性もなきにしもあらずゆうて思えば、当然ここでもね、安全な場所へ避難するべきじゃろうと思うんですけど、その都度避難するゆうんはしんどいよねえ思う。
17	床上とか床下とかの人は、そのまんま、普通に。避難生活とか、全然してないと思う。ずっとそこにおってだから。逆に一日避難した人で戻ってきたのは、うちを入れて3軒くらいじゃないかな。	どこから聞いたんだっけか、何で判断したんかももう覚えてないけど、何かから聞いて、こっちも崩れるかもしれないという話で、やっぱり子どももおるし、避難しようと思うことになって。

3 年目インタビューにおいて「避難」が用いられるコンテキストには、3 つの傾向が確認できた。1 つ目のコンテキストでは、表 15-6 の発言に見られるような、「避難勧告」、「避難指示」、「避難準備」、「避難情報」、「避難場所」、「避難所」など、行政からの指示や指定に関する熟語に用いられている。表 15-8 および表 15-17 の発言でも、これらのコンテキストが大半を占めている。2 つ目のコンテキストは、表 15-8 に見られるように、消防や自衛隊、あるいは離れた場所に住んでいる親族などから、避難行動を勧められた場面である。そして 3 つ目のコンテキストは、表 15-17 に見られるような、自分や自分の家族とは異なる他者に

ついて言及する場合である。2つ目と3つ目のコンテキストにおいては、図16に「避難」と関連の強い語として「人」と「思う」が抽出されている結果とも通じる。3年目インタビューにおいては、「避難」は消防隊や救助隊の「人」から勧められるもの、あるいは自分ではない近所の「人」の行動として語られており、それに対して自分がどう「思った」か、というコンテキストで用いられていた。1つ目のコンテキストにおいては、「避難」は名詞として用いられており、2つ目と3つ目のコンテキストでは、「動詞」として用いられているが、語っている対象者自身の行動を表しているわけではない。3年目インタビューにおいては、対象者が自分を主語にして「避難」を動詞として使う表現は、ほとんど確認できなかった。

一方、5年目インタビューでのコンテキストでは、まず被災当時のふり返りににおいて、「名詞」として使用される回数が大幅に減少した。すなわち、自分の行動を決定する場面で語られていた、「いつ避難勧告が発令されたか」、「いつ避難指示が解除されたか」などの言及は、ほとんど見られなくなった。次に、3年目インタビューとの最も大きな相違点は、自分や、自分の家族を主語にした、動詞としての「避難」が確認できるようになったことである。ただし、自分を主語にしている場合でも、「災害当時避難した」という回想と、「今後災害があっても避難しない」という「教訓」の2つのコンテキストが確認できた。前者のコンテキストは、3年目インタビューにおいても、「避難所に行った」、「他に移った」、「親戚のところにお世話になった」など、「避難する」という表現ではないが、同義の言及が見られた。しかし、後者のコンテキストは、3年目インタビューではまったく確認できなかったものである。3年目インタビューでは主に災害当時の状況を説明する際に使用されている場面が多かったのに対し、5年目インタビューでは今後の自分の行動、すなわち「教訓」についても言及されるようになった。この点は、図17において「行く」という自動詞と強い関連が確認された結果とも通ずる。「教訓」とはすなわち「個人化」のコンテキストであり、したがって5年目インタビューにおいては「避難」は「個人化」のコンテキストで用いられていたことが明らかになったといえる。

5.4.6 新聞記事題目の分析

次に、頻出語の出現回数の推移をより詳細に分析するため、マス・メディアの報道を定量的に分析する研究手法を採用し、広島県広島市に本社がある中国新聞の新聞記事の題目を分析対象とした。表16は、2014年8月20日から同年9月19日までの全867の記事のうち、「災害 豪雨 大雨 土砂」で検索した結果ヒットした614の記事の題目から、先の12語の出現回数を示したものである。発災後1ヶ月間の新聞記事の題目を分析対象とした理由は、まだ被災者に直接インタビューする機会が十分に設けられておらず、したがって被災地の外部からの客観的な言説と被災者の「語り」を比較検討するためである。なお、「小学校」という語については、新聞記事題目で「〇〇小」と略記されているものも「小学校」としてカウントした。その結果「小学校」という語が6回、「〇〇小」という表現が28回確

認され、合計で出現頻度 34 回であった。

表 16 中国新聞の新聞記事の題目への出現頻度（単位：回）

避難	103	消防	11	電話	9
地域	11	小学校	34	状態	0
ボランティア	40	被災	96	停電	7
防災	30	復興	5	友達	0

分析の結果、図 14 で 3 年目インタビューに比べて 5 年目インタビューで使用頻度が大幅に減少していた左列および中央列の 8 語は、新聞記事の題目でも出現回数が多いことがわかった。つまり、客観的な言説であるにもかかわらず、被災者の 3 年目インタビューの「語り」に用いられる表現と似通っていることが明らかになった。一方、3 年目インタビューに比べて 5 年目インタビューにおいて多く出現した右列の 4 語は、新聞記事の題目にはほとんど見られなかった。「電話」や「停電」は、一見すると「復興」よりも多く、3 年目インタビューで出現回数が多かった語と違いがないように思われるが、これらの語は新聞記事では「電話相談窓口」や「停電いまだ復旧せず」というように、行政の対応などの情報に使用されており、個人的な体験を語る際に使用されている 5 年目インタビューの場合とは、コンテキストが異なっていた。

3 年目インタビューおよび 5 年目インタビューでの使用頻度、および新聞記事の題目を分析した結果から、被災者の語りには「社会化」と「個人化」という 2 つの変容過程があることが明らかになったと考えられる。被災直後は自分の体験しか知り得なかった被災者たちが、時間を経て、別の被災者の体験談やマス・メディアによる報道に触れることで、個々の被災体験の記憶が「社会化」し、「ドミナント・ストーリー」に回収されていったと考えられる。つまり、左列および中央列の語のうち「避難」以外の 7 語は、「社会化」された記憶の表現によく使用されている語であると考えられる。一方で、5 年目インタビューでは、「語り」の内容は独自性のある「オルタナティヴ」なものに変化していた。すなわち、右側の 4 語は、「個人化」した記憶を表現する語であるといえる。つまり、一度「社会化」されたはずの被災者の語りが、同一者によって語られているにもかかわらず、時間経過によって「個人化」していたことが明らかになった。

では、左列および中央列の 8 語の中で、3 年目インタビューから 5 年目インタビューにかけて唯一使用比率が増加していた「避難」については、どのように解釈したらよいだろうか。まず、新聞記事題目においては、具体的にはどのようなコンテキストで「避難」は用いられているか、分析を行った。その結果、「避難所」「避難生活」「避難者」「避難勧告・指示」な

どの文脈で用いられている回数が 89 回で、全 103 回の 86.4%を占めており、残りの 14 回 (13.6%)は、当時の避難行動や今後の教訓に言及する文脈で用いられていた。この結果に鑑みると、新聞記事題目における「避難」は確かに 3 年目インタビューで多く確認された「社会化」のコンテクストで使用されており、したがって「社会化」された記憶を表現する語であると考えられるように思われる。それに対し、表 15 で示したように、5 年目インタビューでは「避難」は「個人化」のコンテクストでも使用されるようになっていた。また、図 17 において明らかになったように、5 年目インタビューにおける「避難」の用いられ方には多様性が確認され、そこには「勧告」や「指示」などの「社会化」のコンテクストとも関連が見られた。

以上の分析結果に鑑みると、「避難」という言葉は、「社会化」と「個人化」というモデルでは捉えきれない、被災体験の語り継ぎにおける“マジカル・ワード”であり、他の頻出語とは異なるふるまいをしていると考えられる。この「避難」の特殊性によって、個々人の被災体験そのものには固有性があるにもかかわらず、その「語り」においては、語り手が自由に語っているわけではないということが明らかになったと考えられる。3 年目インタビューと 5 年目インタビュー、そして新聞記事においても頻出している語であることから、「避難」は被災体験の「語り」において軸になる言葉であると考えられる。

「避難」とは、テーマである。本研究のインタビュー調査において被災体験を語るとき、語り手たちは「避難」体験について多く語る傾向が確認された。反対に、目が覚めたときにはすでに家が土砂に埋まっていたなど、災害発生時の避難体験をしていない語り手は、「そんなにお話するようなことはないのだけれど」という前置きをしていた。筆者が「避難」について問うているわけではないにもかかわらず、語り手たちは被災当時の避難行動について語ろうとする傾向が確認された。

ある出来事の語り継ぎにおいて、何年か時間が経過すると、その出来事のテーマが明確化し、画一化されていくと考えられる。それが、本研究において指摘している「型」である。したがって「避難」は、被災体験の「語り」の「型」として、語られなければならないもの、語ることを期待されるものとして、あるいは語ることを期待されていると語り手が考えるものとして、語り手が最も多く使用していたのではないかと考えられる。あえて「社会化」と「個人化」というモデルにあてはめていえば、「語り」は時間経過により「個人化」していくが、そのテーマ性がだんだん形作られ、ひとつに収斂していくという意味では、「避難」は「社会化」のコンテクストを構成する言葉であるとも考えられるのである。今後は、この「避難」という“マジカル・ワード”が、被災情報の語り継ぎにおいてどのような役割を果たしていくのかについて、注意して分析していく必要がある。

5.4.7 被災者の「語り」における新たなコンテクストの出現

さらに、12 の頻出語句のうち、「被災」という語には、3 年目インタビューでは確認されなかった新たなコンテクストが、5 年目インタビューにおいて出現していた。「被災」は、3

年目インタビューでは 64 回、新聞記事の題目では 96 回頻出していた。用いられ方としては、「被災者」あるいは「被災地」という、自分たちが「8.20 広島土砂災害」で被災しているという事実を前提とする、「ドミナント・ストーリー」のコンテクストが、多く確認された。

一方、5 年目インタビューにおいては、「被災」はわずか 6 回しか確認されなかった。そして、それらすべてに共通する、新たなコンテクストが出現していた。それは、自身の個別の被災体験が「ドミナント・ストーリー」に集約されることへの「抵抗」として捉えることができる。「復旧・復興期」から「平常期」へ以降するなかで、「語り」の主語を「被災者」ではなく「自分」に捉え直したことで、「ドミナント・ストーリー」として語られる 8.20 広島土砂災害の集合的記憶に対して、違和感を持つようになったと考えられる。

6 回確認された「被災」という言葉は、4 名の対象者によって語られていた。被害状況や家族構成はそれぞれ異なるが、全員が女性であった。以下に、その言及をすべて引用する。

2. マスコミなんかはいいとこだけ、みんながね、協力して、被災地、地元がくつついてってゆうけど、それだけでもないんですよ。被害も違えば、年齢も違うし、動ける人、動けない人、いろいろだから。私は動けなかったから、頑張りましようねってゆう気持ちもちよっと重たかったりして。(60 代、女性、床下浸水)

10. 被災してるからって、それありきで人生を送ってるわけじゃなくって、それはそれで、自分の性格って変わらないし、趣味も変わらないし。親を亡くした方とか、大切な方を亡くした人の人生は大きく変わってるかもしれないけど、たぶん多くの人が、意外と切り離して生きてる。(20 代、女性、床下浸水)

まず、SN.2 の 60 代女性と SN.10 の 20 代女性のコンテクストは、「被災地」あるいは「被災者」と自分がひと括りにされることへの違和感である。「地元が協力し合って」あるいは「被災者の心の傷」などの表現には、自分はあてはまらない、というコンテクストであった。

16. 下の人は、わかんないんでしょうね。「おたくの砂が」って言われたんですよ。自分の敷地のコンクリートに砂が落ちたら。ボランティアさんが歩いたりしてもね、長靴の裏の砂が残ると、すごい怒りよっちゃった。「おたくの砂が」って。いや、うちの砂じゃないよって。土石流が流れてうちで止まった砂を、「おたくの砂」って言うんですよ。じゃけえ、「早くブロック積んでください」って。でもね、

家に帰るかもわからない状態で、「早くブロック積んで、おたくの砂を」って。たぶんその人は床下なんだろうと思う。わかんない、あんまり。それは。でも、「おたくの砂が」はしんどい。災害よりも、理解がないことの方がしんどかった。いつもいつも、「おたくの砂が、おたくの砂が」って。「うちに落ちてくる」とかすごい言ってきたら、「今すぐ塀を作って」とか。被害が全然わかってないんよね。でね、NHKさんが来られてね。「大丈夫ですか？光のリレーされたんですよねー？」って来られたんです。「再現してください」って言われて。「しません」ってゆったんです、私。そしたら、「なんでですか？」ってゆうから、「いや、実は、なんかそうやって言われていることはよくわからないんです」って言ったら、「となりの人と仲悪いんですか？」とか言われて。そうゆうことじゃなくて、事実じゃないってことが言いたかったんだけど。もう私ね、この状態で、「電話してるんですか？」って聞いてこられるぐらいならあなたが電話してください、みたいな。「はあ？」って思って。光のリレーだってそう。「事実じゃないことは再現できません」みたいな。ね。だってやってないんだもん。そうやってね、光のリレーってゆう風に報道されて、そうゆう風にみんなが「ああ、そうだったんだ」って思うことはすごくいいことだと思う。こんなふうに助け合ったんだ、と思われる方がいいと思うし、それを真似してやってもらったらそっちの方がいいけど、再現はできません。私の被災はそんなじゃなかったから。(50代、女性、半壊)

次に、SN.16の50代の女性が抱いていたのは、自分の体験が、マス・メディアが描くストーリーとは合致しないという違和感である。マスコミが取材で被災者に体験談を語ってもらう場合の多くは、あらかじめある程度の構成を考えてから来る。そして、その枠組みに当てはまるような証言を求め傾向がある。しかし、被災者の「語り」にプロットは存在しないため、枠組みに収まるような証言を要求するマスコミに、不信感を抱く被災者は少なくない。彼女の場合も、マスコミが再現してくれと依頼してきた「光のリレー」を災害時に自分が行なっていないため「再現できない」と返したやりとりについて語ったあと、最後に、「私の被災はそんなじゃなかったから」と述べて「語り」を締め括った。

18. やっぱり八木三丁目ってゆうんでみんなが「大丈夫？大丈夫？」ってすごい聞かれて、「いや、うち大丈夫なんよ。ごめんね」ってゆう気分になる。逆に。なんか、「何もなっていないんよ、うちは」って。心配してもらってごめんね、みたいな。変な罪悪感。ちょうどね、近所の人と話をしたときに、その人も、「なんか、自分ちが無事なんか悪い気がしてね」みたいなことをゆっちゃって。「奇跡の団地」ってゆわれてね。その呼ばれ方もちょっとね、申し訳ないってゆうか。被災したけ

ど、被災したって言いづらい、みたいな。自分たちが無事でよかったねって言いづら
いもあるけど、自分たちもそれなりに大変な思いしたけど、他と比べたら言え
ん。やっぱり、いやほんとに、そのあと、被災者のなかにはね、家が壊れて、直さ
にやいけんかったりとか、もう、二重ローンで、とかゆう話をすごい聞いてたら、
なんか、悪いなあみたいな思いと、でもやっぱりよかったってゆう思いと。「奇跡
の団地」ってね、よかったねって言われるんだけど、「うん、よかった」って言え
ない。なんかこう、言い訳みたいに、「なんかね、梅林台はね、上が尾根みたいにな
ったってね」って、なんか、「なんで私はこう説明しとるんだろう」みたいなね。
覚えたもん、そこらへんの知識は。なんかこう、言い訳みたいに、「それでこうな
ったらしいよ。たまたまなんじゃけどね」って。なんか、変なところで言い訳しよ
るな、みたいな。「自分だけ無事でごめんなさい」みたいな、罪悪感ってゆうか、
結局そうゆうものなんだろうなと思う。(50代、女性、ライフラインのみ)

最後に SN.18 の 50 代の女性は、自分の居住する地域に付された「ドミナント・ストーリー」に合致しない自分の被災状況に対して、「被災したとは言いがたい」、「自分のところは無事であることに罪悪感を覚える」という心境を吐露した。つまり、他と比べると自分たちの被害はたいしたことがなく、しかし災害によって被害は受けている。それでも、8.20 広島土砂災害の「ドミナント・ストーリー」に鑑みると、「自分たちも被災したんだ」とは言いがたい、というコンテクストである。また彼女は、遠方に住む親族や友人が心配の連絡をくれるたびに、「何もなっていないよ、うちは。心配してもらってごめんね。」と自分の被災状況について話すだけでなく、なぜ自分がそのような被災状況なのかをこと細かに説明してしまう、と語る。「なんでそうなったんか、もう覚えたもん。たまたま上が尾根みたいになっとなつて、とか。聞かれてないのにね、なんかこう、言い訳みたいに」という風に、自分の体験が「ドミナント・ストーリー」に合致しない理由を説明することで、その固有性を主張している、と考えられる。

以上の分析から考察すると、3 年目インタビューに頻出していた「被災」という語は、「ドミナント・ストーリー」を表現する語であるため、5 年目インタビューではほとんど確認できなくなったと考えられる。逆に言えば、5 年目インタビューで、「被災」という語を使わずに自らの被災体験を語る、という行為は、「ドミナント・ストーリー」に対する「オルタナティブ・ストーリー」の創出である、と考えられる。

5.5 考察

被災者の語りには「社会化」と「個人化」という2つの変容過程があり、一度「社会化」されたはずの被災者の語りが、同一者によって語られているにもかかわらず、時間経過によ

って「個人化」していたことが明らかになった。「発災期」には、自分の家族や身の回りのこと以外には手も頭も回らない。被災直後は自分の体験しか知り得なかった被災者たちが、時間を経て、「復旧・復興期」に移ると、近所の人びとと会話をし、またマス・メディアが発信する情報に接することによって、災害の概要が客観的に整理され、共有されやすい表層的な表現を用いて自らの被災体験を位置付ける。その結果、個々の被災体験の記憶が、「ドミナント・ストーリー」によって「社会化」していったと考えられる。しかし、特に土砂災害では、被害が局所的であり、せまい町内でも被害状況が大きく異なっている場合が多くある。8.20 広島土砂災害でも、各地にこのような状況が確認された。そこで、「復旧・復興期」から「平常期」に至る過程においてそのような状況を知ること、「平常期」には自分の被災体験を、独自の深層的な表現で再認識・再解釈するようになると考えられる。時間経過による被災者の「語り」のこのような変容は、防災・減災の活用において、大いに考慮されるべき事項であると考えられる。

それを図式化したのが図 18 である。あるインパクトが生じると、人はまず表層的な部分でこのインパクトを受容する。そこでまず用いられる表現は、他者と容易に共有できるものであり、社会において受容されている「社会化」された「ドミナント・ストーリー」である。この「ドミナント・ストーリー」は、多くの被災者に共通して語られていることから、「語り」の「型」としても機能していると考えられる。すなわち、自身の体験をより正確に理解してもらうためのよりどころとして、そこに当てはめるかたちで自らの「語り」を形成していく。そのため、被災体験の内容は個々に異なる一方で、同じ表現を用いて自らの被災体験を語っていた。

しかし、「復旧・復興期」に表層的な表現で自身の被災体験を捉えていた被災者たちが、「平常期」に移行するなかで、自分と他者との被害状況などの相違に気づくことで、自分「独自」の体験、すなわち「個人化」した「オルタナティブ・ストーリー」を表現するようになると考えられる。この「独自の表現」は、非被災者にも共有されやすい表層的なものではなく、人それぞれの深層的なものであり、容易に共有することが難しいと考えられる。

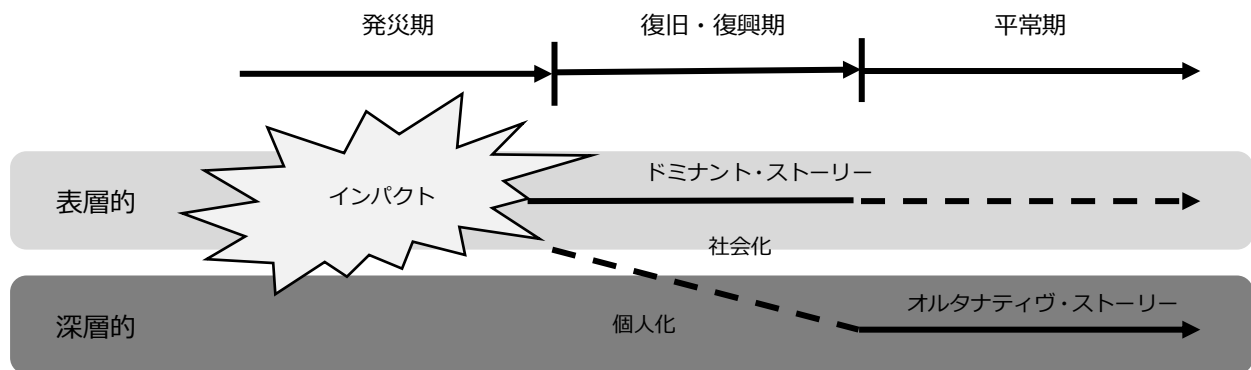


図 18 本研究で得られた「語り」の変容モデル

5.6 小括

本章では、前章で確認されたあるひとりの被災者によって確認された「語り」の変容の特性が、被災者一般に適用できるモデルであるのかを検討した。その結果、被災者の「語り」は固定されたものではなく、時間経過により変容するメカニズムは、被災者に広く当てはまる傾向であることが明らかになった。時間経過によって、災害発生から3年目の「復旧・復興期」においては客観性に基づいた表現が用いられた被災者の「語り」が、5年目の「平常期」へ移行したときには主観的な解釈に変容していた。したがって、被災者の語りを防災・減災に活用する際には、この「語り」の変容を考慮に入れる必要があると考えられる。

第6章 先行研究への変容モデルの適用の試み

6.1 はじめに

第6章では、本研究で得られた結果を、先行研究において展開されている語り継ぎの議論に適用することを試みる。防災・減災において重要なのは、災害を体験したことのない受け手が今後起こりうる災害を自分の問題として捉えることであり、それが受容されるメッセージの中心であるべきである。教訓とは学ばれるものであり、何が教訓であるのかを決めるのは受け手でもある。そのために重要になるのが、送り手と受け手の「個人的コンテクスト」を一致させることであり、受け手が共通項を見出すことで、送り手による被災情報の表現が受容されていくことを指摘する。

6.2 語りの「型」と「場」の意義

先行研究において示唆される語り次に潜む課題とは、「型」が存在することによって「語り」がひとつに収斂され、「語り」の多様性が失われていくことである。

しかし一方、本研究の結果に鑑みると、送り手にとっての「語り」の「型」は、記憶や「語り」が時間経過によって「風化」していくなかでも普遍的かつ継続的に「教訓」を語り継いでいくためのよりどころとなるものでもあると考えられる。平田(2012)は次のように指摘する。

たしかに、特定のプロットが与えられることによって、多くの被爆証言の生成が可能になったと考えられる。あるストーリーを語り出すプロットが備わっているからこそ、それに合わせるかたちで、沈黙のままにあった被爆者が語りの契機を見出し得たといってよいだろう。¹

つまりプロットは、時間経過による「語り」の変容を防ぐ役割を果たしていると考えられる。これは、被災者の記憶や「語り」が変容していく過程において、重要な役割を果たす。平田(2012)のいうプロットとは、すなわち本研究において言及してきた「型」である。

オング(1991)は、書くことの知識をまったくもたない「一次的な声の文化」における記憶術、そして口承における「型」の意義について、次のように述べている。

一次的な声の文化では、よく考えて言い表わされた思考を記憶にとどめ、それを再現するという問題を効果的に解くためには、すぐに口に出るようにつくられた記憶しやすい型にもとづいた思考をしなければならない。このような思考は、つぎの

¹ 平田仁胤, “戦後日本における被爆体験の継承可能性：若者世代にとっての被爆証言＝平和教育のリアリティ”, 日本オーラル・ヒストリー研究, No.8, pp.109-124, 2012, p.110

ようなしかたで口に出されなければならない。すなわち、強いリズムがあつて均衡がとれている型にしたがつたり、反復とか対句を用いたり、頭韻や母音韻をふんだり、〔あだ名のような〕形容句を冠したり、その他のきまり文句的な表現を用いたり、紋切り型のテーマ（集会、食事、決闘、英雄の助太刀、など）ごとにきまっている話しかたにしたがつたり、だれもがたえず耳にしているために難なく思い出せ、それ自体も、記憶しやすく、思いだしやすいように型にはまっていることわざを援用したり、あるいは、その他の記憶をたすける形式にしたがつたりすることである。²（傍点は筆者）

ONG(1991)によると、「知っているというのは、思い出せるということである」³。すなわち、送り手の体験や記憶も「風化」することから、語りの「型」が必要とするようになっていったと考えられる。自身の記憶が「風化」していくことが不安であるために「場」に記憶を固定し、伝えたいことが伝わるように「型」を作成する。この「型」は誰でも語ることができるものであるため、「ドミナント・ストーリー」になっていく。そして、この「型」に固定するメッセージこそ、送り手が受け手に伝えたい「教訓」でもある。以下、3年目インタビュー終了後のM氏の「語り」である。

被災者がね、ほんとに説明するんじゃないんよね。俺だって勉強したんだから、誰だって勉強すればわかるわけ。それが取材でね、その、「関係してる人は何でも知ってんでしょ」みたいなね。それは、違うよねってゆうのはあるよね。ただ、「被災者にそこまで聞くか」ってゆう部分はあるんだけど、今度は反対に、ちゃんとした正確でない情報を持ってる可能性があるわけじゃない。だからそれを正すためには、ある程度こっちがね、概略を、必要な部分を言うことで、訂正できるってゆう可能性はあるよね。そりゃあ、思うよ。いろんな集団がやっぱり勉強に来られるけど、災害の概要を説明しなきゃいけないってゆうのはね、お前らそのために来たんじゃないだろってゆうのはある。概要説明しなくても、聞きたいことだけとか、普通は聞けないことだけとかをね、言えばそれで済むんじゃないかって気もするんだけど、だけどやっぱり、まあ間違っただけの情報を変に持って帰って、間違われるよりも、こっちでちゃんと情報を与えた方がいいよね、ってゆうところはあるね。（傍点は筆者）

² W・J・ONG著／桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳，“声の文化と文字の文化”，藤原書店，1991，p.78

³ ONG，1991，p.76

伝えたいことが伝えたいように伝わるようにするために、予備知識を含めて「型」をつくる。被爆者は自分の体験だけでなく、「なぜ広島に原子爆弾が落とされたのか」や「通常の爆弾と原子爆弾の違いは何か」などについても語るができるようになるために、自ら勉強して「語り」を構築する。根本(2015)は次のように述べる。

広島における証言活動は教育的な性格を持ち、多くの証言者は教育という枠組みの中で体験を語っている。そのため、証言活動は教育が持つ規範にしばしば従うことになる。その一つが「正しさ」や「正確性」であり、被爆者が体験を語る際には歴史的あるいは化学的な「正しさ」が重要だとされる。証言者に対して「正しさ」を求める姿勢が表れた顕著な例が、1987年秋に広島において証言活動に関わる14団体が集まり発足した「被爆体験証言者交流の集い」(以下、「交流の集い」と略記)であろう。「交流の集い」の目的の一つは、証言活動において「正確に伝える」ための学習の場とすることであった。(中略)

実際、「交流の集い」は、発足後、核兵器をめぐる国際政治や放射線の医学的影響などについての専門家を招き、また「証言活動の参考のため」に小冊子を作成するなど、証言者たちの学習の場と材料を提供していった。「交流の集い」の発足が象徴しているように、証言者たちは「正確に」語ることが求められた。しかし、同時にこうした語りの「正確さ」は証言者たちが自ら求めていったことでもある。このことは前章で挙げた被爆者AやBにも当てはまる。彼らは、聞き手に対して自分の経験をより理解してもらうために、また質問に答えるために関連する事象について積極的に学び、それを語りの中に入れてきたからである。⁴(傍点は筆者)

また、語りの「場」についても、同様に「型」の役割を果たすと考えられる。伏木(2009)によると、古来より人は、他者と記憶を共有するため、メディアを用いて記憶を「外在化」する手法を採用してきた⁵。ノラ(2002)は、「記憶の場」について次のように述べている。

記憶の場を生み出し、またその糧となっているものは、自然な記憶はもう存在しないという認識である。すなわち、放っておけばそのような作業がなされないからこそ、わざわざ記録を残し、記念日を維持し、祝祭を組織し、追悼演説をおこない公正証書を作る必要があるのだという意識である。それゆえに、用心深く護られた特別の住処にのがれている記憶をマイノリティたちが擁護することは、記憶の真実

⁴ 根本雅也, “証言者になること：広島における原爆被爆者の証言活動のメカニズム”, 日本オーラル・ヒストリー研究, No.11, pp.173-192, 2015, pp.187-188

⁵ 伏木啓, 集合的記憶とメディア, 名古屋学芸大学メディア造形学部研究紀要, No.2, pp.43-52, 2009, p.43

が一体何なのかを明らかにしてくれる。注意深く記念しないと、歴史がそれらを一扫してしまうのだ。記憶の場は、われわれがみずからを支える砦なのだ。⁶

「語り部」として活動する被爆者の場合、自身の被爆体験について語る場所は、平和公園や原爆ドーム、平和資料館など、公に認められている「象徴的」な場所であることが多く、自分が実際に被爆した場所で体験を語ることは比較的少ないと思われる。また、自分が被爆した場所について言及するときは、爆心地からの距離を欠かさず伝える。そこが中心地として記号化・神格化され、そこでの「語り」が「ドミナント・ストーリー」になっていくと考えられる。M氏においても、自宅で語っているにもかかわらず、自分が直接見ていないモンドラゴンの被災状況を語ったり、モンドラゴンから見た自宅の位置を説明したりする「語り」が確認できた。したがって、M氏にとっては、モンドラゴンが8.20広島土砂災害の被害の中心地となっていると考えられる。

モンドラゴンは、「8.20広島土砂災害」に関連するさまざまな資料が置かれており、自由に見ることができる。したがって、モンドラゴンは「博物館」的側面をもつ。ル・ゴフ(1999)は、歴史博物館を「集合的記憶の場」のひとつであると述べる⁷。矢守(2013)は、災害の博物館を次のように位置づけている。

災害を引き起こした自然現象のメカニズム、被害の状況、あるいは、被災からの復旧・復興のプロセスを理解しあつづけると共に、そのことを通して、犠牲者の慰霊、災害の記憶の保全、将来の防災・減災への貢献などを主目的として、(特定の)災害に関する諸資料や諸活動を、意図的かつ集中的に集積・組織化した施設⁸

また吉村(2011)は、博物館を「記憶装置」として捉え、次のように定義する。

博物館とは、モノ(資資料)の証言力を通して、来館者の想像力と洞察力といった感性に働きかけ、文字や映像として記録されたモノから普遍的な記憶を創造しようとする場に他ならない。ここで問題となる普遍性は、ある特定のコンテクストに置かれてきたモノ(所有の形態や来歴)を切断して、博物館の解釈に応じたコンテクストに置換し保存することをさす。⁹

⁶ P・ノラ著／長井伸仁訳，“序論 記憶と歴史のはざまに”，記憶の場：フランス国民意識の文化=社会史 第1巻 対立，岩波書店，2002，p.37

⁷ J・ル・ゴフ著／立川孝一訳，“歴史と記憶”，法政大学出版局，1999，p.155

⁸ 矢守克也，“巨大災害のリスク・コミュニケーション：災害情報の新しいかたち”，ミネルヴァ書房，2013，p.168

⁹ 吉村智博，“博物館における表象行為と社会的差別：差異の表象をめぐる”，人文学報”，No.100，pp.113-127，2011，p.119

博物館は単に記憶を保存・喚起するのではなく、それを構築する場所でもあり、「わたし」の記憶を「われわれ」の記憶へと変換させる場所である、という集合化のロジックが見出される。¹⁰

また、モンドラゴンの敷地内には災害があったという事実を伝えるための死者を悼むための「モニュメント」が設置されている。国土交通省国土地理院は、自然災害伝承碑を、「過去に発生した津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害に係る事柄（災害の様相や被害の状況など）が記載されている石碑やモニュメント」と定義している¹¹。また、国道地理院により 2019 年度から「自然災害伝承碑」が地図記号化され始め、その意義が認められるようになってきたものと考えられる。羽賀(1998)は、記念碑は何らかの契機によって結びついてきた集団（共同体）が共有しなければならない歴史的感情のシンボルであると定義している¹²。また、許山(2009)は、記録し伝達する手段として石碑が選ばれる理由について、「石碑は堅牢で重量があるから、顕彰・記録すべき人物・事業ゆかりの土地に長く置かれることになり、破壊されたり散逸したりすることも少ない」からであると述べる¹³。そこで、藤本ら(2016)は、洪水や土石流に関する石碑を「水害碑」と呼称し、広島県内の水害碑の碑文の内容を整理した¹⁴。小山ら(2017)は、「水害碑」の防災上の意義を次のように説明している。

水害碑は、災害報告書などの紙媒体と比べると情報量が少ない点で劣るものの、被災地内や近傍にあること、多くの人の目に触れやすいこと、災害の状況や被害を端的にまとめていること、100 年以上掲示できることなど、持続的な情報発信性に優れており、紙媒体とは異なる媒体として、地域住民に対してその地域で災害があった過去を伝え、将来における水害の危険性を訴える防災上の意義があると考えられる。¹⁵

この「博物館」と「モニュメント」は、矢守(2013)による図 7 の「災害史」の分類において¹⁶、「語り」と同様「意図的」な手法のひとつであり、他方「語り」とは異なって「非言語的」な手法として位置づけられているものである。「モニュメント」や「博物館」という「場」

¹⁰ 吉村, 2011, p.119

¹¹ 国土交通省国土地理院, 自然災害伝承碑について

<https://www.gsi.go.jp/common/000211781.pdf> (最終閲覧日: 2021 年 8 月 9 日)

¹² 羽賀祥二, “史跡論: 19 世紀日本の地域社会と歴史意識”, 名古屋大学出版会, 1998

¹³ 許山秀樹, “漢文で書かれた石碑と浜松の土地問題: 4 つの漢文碑から読みとりうること”, 静岡大学情報学研究, Vol.14, pp.1-18, 2009, p.1

¹⁴ 藤本理志・小山耕平・熊原康博, “広島県内における水害碑の碑文資料”, 広島大学総合博物館研究報告, No.8, pp.91-113, 2016

¹⁵ 小山耕平・熊原康博・藤本理志, “広島県内の洪水・土砂災害に関する石碑の特徴と防災上の意義”, 地理科学, Vol.72, No.1, pp.1-18, 2017, p.15

¹⁶ 矢守, 2013, p.155

は、そこで語ることによって、その「語り」がその記憶を共有しようとする集団のものであるというお墨付きを与える、「意図的」に用意された「非言語的」な「型」としての役割を果たすと考えられる。

6.3 個人的コンテクストの意義

重要なのは、受け手が自分の問題として捉えることであり、それが受容されるメッセージの中心であるべきである。米山(2005)は次のように述べる。

恐怖をどれだけ正確に再現したとしても、過去を語り直すことそれ自体が、本質的に過去が繰り返されないことの保証とはならない。目撃証人の証言が効果的であるためには、時間を超えて共鳴するものとして聞かれる必要がある。つまり、聴衆は、過去についてのストーリーを、未来においても起こりうるものとして想像できなければならない。¹⁷

そのために重要になるのが、送り手と受け手の「個人的コンテクスト」を一致させることである。「個人的コンテクスト」は、年齢、教育、職業、所得、人種、興味や関心、家族などの社会的責任、過去の経験などによって定義される。そうして送り手と受け手の「個人的コンテクスト」が一致したとき、相互作用としての「社会的コンテクスト」が生まれる。フォーク&ディアーキング(1996)によると、博物館の「来館者は、しばしば社会的なつながりを強める手段として、個々の展示を個人化する」¹⁸という。「個人化」するためには、社会的なつながりを結ぶ対象との「共通項」が必要である。それはたとえば、性別や職業が同じであるとか、被災した当時の年齢が現在の聞き手の年齢と同じ、などである。

被災者の「個人的コンテクスト」が考慮されないことの背景には、被災者を神聖な領域へと崇めてしまうという問題があると考えられる。八木(2007)は、原爆文学に関する既往研究から「特権性」を導き出す。すなわち、「被爆者にしか体験を理解することは到底できないという「特権意識」に対して、非被爆者は無条件に崇め奉り、彼／女らのいうことに服従する」というものである¹⁹。確かに被災者は貴重な経験をした「生き証人」である。しかし、被災者は被災者として生まれてくるわけではなく、もともとのアイデンティティがある。そのアイデンティティが考慮されなくなることのデメリットは、語り手と受け手の双方にある。送り手は、受け手に何を伝えたらよいのかわからない。受け手は、自分と同じ「個人的

¹⁷ 米山リサ, "広島 記憶のポリティクス", 岩波書店, 2005, p.191

¹⁸ J・H・フォーク&L・D・ディアーキング著／高橋順一訳, "博物館体験：学芸員のための視点", 雄山閣, 1996, p.166

¹⁹ 八木良広, "体験者と非体験者の間の境界線：原爆被害者研究を事例に", 哲学, Vol.117, pp.37-67, 2007, p.51

コンテキスト」を有していない送り手の話では実感がわかず、自分ごとにならない。ここに、語りの「型」がひとつに収斂していくことの危うさがある。

6.4 個人的コンテキスト排除の問題点

6.4.1 公の施設の問題点

一方、教訓を受け手のメッセージとするための方策として、「型」を作ることとは反対のベクトルも存在する。すなわち、「個人的コンテキスト」を完全に排除することで、受け手の主体性を引き出そうとする試みである。

高野ら(2007a)によると、阪神・淡路大震災の記憶を風化させず、経験と教訓を継承するという目的のもとに「人と防災未来センター」という研究・展示施設が建設された(図 19)。

人と防災未来センターが公的な施設である以上、いわゆる公的な規範に包まれた語りが支配的である。一方、震災を体験していない聞き手側にとっての「震災とはこういうものである」という規範は、そもそも公で語られている震災の体験談話に依拠する。²⁰ (傍点は筆者)



図 19 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター (2017 年 1 月 7 日、筆者撮影)

²⁰ 高野尚子・渥美公秀, ”語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察: 語り部と聞き手の協働想起に着目して”, ボランティア研究, Vol.8, pp.97-119, 2007a, p.113

笠原(2009)は、「人と防災未来センター」が掲げる「教訓」という概念に問題があることを指摘する。これはすなわち、「人と防災未来センター」では、被災者の記憶さえも「教訓」という「型」に押し込まれているということを意味する。

「教訓」とは、過去の出来事の記憶を有効に活用しようとするものである。しかし記憶は活用するためにあるのではない。活用という発想は、多様であるはずの記憶に一義的な意味や目的を与え、記憶の開かれた未来を予め規定し閉じてしまうことになる。

こうした発想によってもたらされた表現においては、記憶の受信者には、出来事についてのある種の現実性はもたらされる。しかし、それは特定の実体化された過去や未来の立場に立ったものでしかなく、記憶の複数性のあり方を否定するものとなる。つまりその現実性は、価値が一義的に決定された記憶を受け取る際に得られるようなものでしかない。このような現実性をリアリティと呼んでおく。²¹ (傍点は筆者)

それに対して、笠原(2009)は「リアリティからアクチュアリティへ」として次のように主張する。

それに対して、ここでは、別の質を持ったもう一つの現実性を考えてみたい。例えば、我々が過去の出来事が記録された資料を読むとき、過去の出来事そのものや当事者を重視してその出来事を追体験しようとするのではなく、現在の立場から資料を自由に読み、その中に記録者や筆者の意図せぬ事象や齟齬を見出すとすればどうだろう。その時我々は、資料との関わりを現在の出来事として、新たに現実にすることができる。(中略)

こうした現実性は、現在の立場から、主体的かつ自由に過去の出来事を捉える際に得られるものであり、また出来事に対して他者として関わる際に得られるものである。それは、過去ではなく、現在を生きる我々にとっての記憶の現実性に他ならない。このような現実性を、アクリュアリティと呼ぶことにしたい。²² (傍点は筆者)

この「現在の立場から」捉えるために必要なのが、個人的コンテクストである。笠原(2009)が指摘する「再現」や「教訓」、「活用」といった表現のあり方には「主語」、すなわち個人

²¹ 笠原一人, "記憶のアクチュアリティへ", 笠原一人・寺田匡宏, 記憶表現論, 昭和堂, 2009, pp.19-20

²² 笠原, 2009, pp.20-21

的コンテキストがなく、客観性を追求するあまり、逆に捉えどころがなくなってしまうと考えられる。

6.4.2 AR 体験の問題点

「主語」を排除するという方策については、AR 技術による拡張現実の創出が挙げられる。東京臨海広域防災公園内にある防災体験学習施設「そなエリア東京」では、AR 技術を用いた体験学習ツアー「東京直下 72hTOUR」²³（以下、「72hTOUR」）が行われている。

「72hTOUR」は、災害発生後から 72 時間、つまり災害発生から 3 日間は、人命救助に時間および人員が割かれるため、最初の 3 日間は自力で生き延びなければならない。そこで、「72hTOUR」に参加して、地震発生後 72 時間の生存力をつけよう、という趣旨である。

参加者には、受付でひとりに 1 台、タブレット端末が配られる。ただし、小学 3 年生以下の子どもは保護者とともに 1 台を使う。タブレットの操作方法と、仮想状況の説明を受け、エレベータを模した入り口に入り、スタートする。地震が起こったかのような音と揺れがあり、エレベータ内の電気が消える。開閉ボタンを押してもドアは開かない。しばらくするとドアが開き、避難誘導をたどって外に出た先には、東京直下型地震発生直後のジオラマがあり、ここから AR 体験が始まる。タブレットをかざすことで状況が変わり、クイズが出題される。クイズは全部で 5 問出題されるが、端末ごとに異なる問題が出題されるため、集団でエレベータに乗っても、最終的には一人ひとりが異なる体験をすることになる。

川崎ら(2020)は、体験の前後で参加者計 167 名にアンケート調査を実施した²⁴。質問項目は、楠見(2006)の平常時における「市民のリスク認知のプロセス」をもとに「非常時のリスク認知のプロセス」を設計し、「リスクの認知」「リスクの評価」「状況の把握」「最善策の検討」の 4 つの段階を効果測定 of 指標とした²⁵。定量調査の質問項目を表 17 に示す。

「72hTOUR」の体験前（「事前」）と体験後（「最終」）の設問の内容は同じであり、結果を比較することで AR 体験による効果を検討する。回答方法は 5 件法を採用し、「とてもそう思う」、「そう思う」、「どちらでもない」、「思わない」、「まったく思わない」の 5 つの選択肢の中から自分にもっともあてはまるものに○をつけてもらった。「リスクの認知」の項目および「リスクの評価」の 5 項目は、逆転項目として扱った。質問項目 11 項目について信頼性係数($\alpha > .65$)を確認したのち、得点化を行った。

²³ 東京臨海広域防災公園，”防災体験学習”

<http://www.tokyorinkai-koen.jp/sonaarea/1f.php> （最終閲覧日：2021 年 8 月 9 日）

²⁴ 川崎梨江・相羽将智・服部典利子・坂田桐子・匹田篤，”リスク認知における AR 体験の効果に関する調査”，総合科学研究，Vol.1，pp.37-46，2020

²⁵ 楠見孝，”市民のリスク認知”，日本リスク研究学会，増補改訂版 リスク学事典，阪急コミュニケーションズ，2006，pp.272-273

表 17 定量調査の質問項目

<p>【リスクの認知】($\alpha=.73$)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大地震は、自分とは関係のない場所で起こるものだ。 2. 大地震は発生する確率が極めて低く、滅多に起こらない。 3. 大地震が発生したとしても、自分とは離れた場所で起こる。 <p>【リスクの評価】($\alpha=.73$)</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 大地震は、自分が生きている間には起こらない。 5. 大地震が発生したとしても、自分が直接被害を受けることはない。 <p>【状況の把握】($\alpha=.67$)</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. もし大地震に巻き込まれても、正確な情報を取得できる。 7. もし大地震に巻き込まれても、自分の置かれた状況を把握できる。 8. もし大地震に巻き込まれても、周囲の人と助け合うことができる。 <p>【最善策の検討】($\alpha=.75$)</p> <ol style="list-style-type: none"> 9. ある状況下で、自分のとり得る行動を複数列挙できる。 10. ある状況下で、他の被害の可能性についても想像できる。 11. ある状況下で、自分の命を守る最善の行動を判断できる。

表 18 は変数ごとの平均点および標準偏差である。この変数は、「リスクの認知」には問 1・2・3、「リスクの評価」には問 4・5、「状況の把握」には問 6・7・8、そして「最善策の検討」には問 9・10・11 の点数を、それぞれ合計したものである。

平均点に着目すると、いずれの変数も「事前」に比べて「最終」の方が、平均点が高くなっていることが確認できる。また、アンケート調査の結果の有意性を検証するため、t 検定 (Bonferroni の調整を実施) の結果、すべての変数で事前の得点より事後の得点の方が有意に高くなっており (リスクの認知: $t(152) = -6.29, p < .001$, リスクの評価: $t(153) = -5.98, p < .001$, 状況の把握: $t(147) = -5.99, p < .001$, 最善策の検討: $t(153) = -7.88, p < .001$)、AR 体験を行った後には防災意識が高まっていることが明らかになった。

表 18 変数ごとの平均点 (標準偏差) (満点 : 5 点)

変数名	事前	最終
リスクの認知	4.24 (0.67)	4.51 (0.63)
リスクの評価	4.28 (0.69)	4.54 (0.58)
状況の把握	2.97 (0.65)	3.30 (0.72)
最善策の検討	3.21 (0.72)	3.62 (0.58)

次に、定性的な分析を行った。定性調査は、「72hTOUR」に参加した直後に、「今まで行ってきた（あるいは行っている）災害対策はどのようなものですか？」および「今後取り組みたいと考えた災害対策はありますか？」という 2 つの設問に自由記述方式で回答してもらった。分析の結果、AR 体験によって、自分や家族に何らかの被害が生じる可能性を実感し、災害を自分の問題として捉えるようになったこと、そしてより多くの災害対策の必要性を感じるようになったことが明らかになった。つまり、AR 体験の効果として、自分に被害が及ぶ危険があるという「リスク評価」「リスク認知」が高まったと考えられた。しかし、「状況の把握」と「最善策の検討」に関する具体的な表現は確認できなかった。

AR 体験においては特定の視点は提示されず、自分がプレイヤーとなって災害を疑似体験する。一見、自分の視点で疑似体験できることで「個人的コンテキスト」を補っているように思われる。しかし、「今後の防災対策」においては事前の備えに言及する語ばかりで、災害発生時の対応には言及されておらず、今後起こり得る災害を自分ごととして捉えるようにすることへの効果は確認できなかった。この調査では、ある行為や行動に対して「できる」か「できないか」を回答してもらう形式を採用している。定量調査から判断すれば、体験者は、災害時に自分は適切な対応が「できる」と認識している。言い換えれば、彼らには非常時に適切な行動を選択できるという自信（あるいは過信）がある。しかし、定性調査に鑑みれば、この自信には根拠はない。言い換えれば、危機回避のために自分がどのような行動を選択すればよいのかを、具体的に想像することができていない。

この AR 体験での調査結果は、田中(1999)が指摘する「災害文化の中折れ現象」にも通ずる(図 20)。

間接的被災体験が災害文化の形成にいかなる役割を果たしたのかといえ、関心や大災害のイメージは豊かになったが、そうした関心やイメージが具体的な個人的対応行動には若干つながっていたが、大災害への危機感や不安感が時間とともに低減することによって、全般的な災害への対応能力の向上には結びつかなかった、と結論づけられる。²⁶

²⁶ 田中重好, “後衛の災害研究：間接的被災体験と災害文化”, 人文社会論叢 社会科学篇, No.2, pp.99-114, 1999, p.110

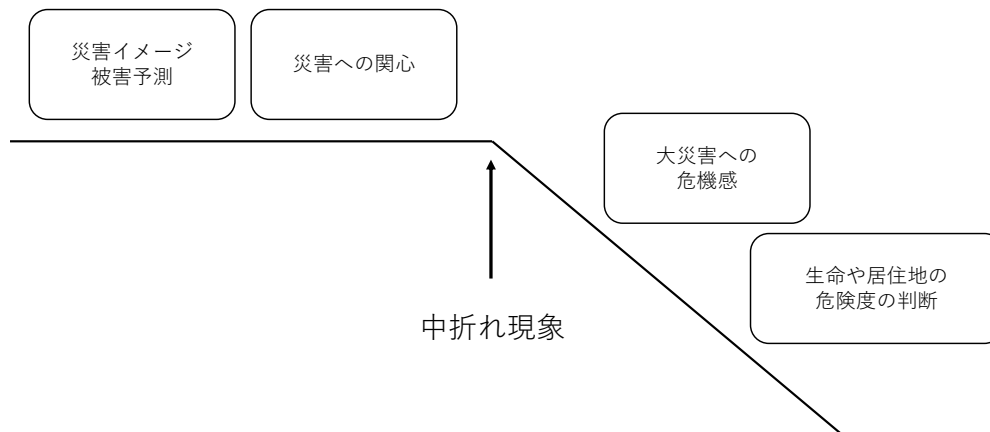


図 20 災害文化の中折れ現象（田中(1999)より引用）

そして田中(1999)は、この「中折れ現象」の原因を、災害に対して「十分には対処できない」という「無力感」にあるという。「豊かな都市型災害のイメージ」を個々人がもったとしても、そのことと個人で防災の備えとしてできることのギャップはあまりにも大きい。AR 体験は、この「無力感」を生じさせやすくする側面があると考ええる。なぜなら、「個人的コンテキスト」が存在しないため、自分ごととして想像することが難しいからである。ドゥボール(2003)の表現を借用すると、単なる「スペクタクル」になってしまうのである²⁷。

6.5 考察

今後重要になるのは、「型」や「場」に当てはまらない「オルタナティブ」な「個人的記憶」とどう向き合っていくのかということである。「個人的記憶」は、正確な情報や科学的知識とは相入れない場合がある。被災者が「夜通し激しい雨が続いていた」と当時の実感を語ったとしても、実際の記録を見れば豪雨が続いたのは数十分であったということもあり得る。しかし、だからといって、被災者の証言は「誤り」ではない。

正確な情報や科学的知識を伝達しさえすれば人びとは行動を起こすはずだという考え方は、矢守(2013)が「客観的な災害情報観」と呼ぶ現象にも通ずる²⁸。矢守(2013)は、「多義性・葛藤性の排除は是か？」と題して、「多様な認識や印象、相互に矛盾する多義的な事実が存在すること自体が、むしろ『情報』として集約され、伝達されるべきではないか」と指摘する。

²⁷ G・ドゥボール著、木下誠訳、「スペクタクルの社会」、ちくま学芸文庫、2003

²⁸ 矢守、2013、pp.22-26

重要なことは、災害情報に対する固定的な見方を排し（なぜなら、それはそのまま、防災実践観の固定化を生むのだから）、さらに別用のあり方を探り、既存のものとあわせて、われわれが防災に取り組むときの手駒を豊富にすることである。²⁹

また、送り手にとっての「教訓」が受け手にとってもそうであるとは限らない。「教訓」は英語で“lessons learned”と表現される場合がある。つまり、教訓とは学ばれるものであり、何が教訓であるのかを決めるのは受け手であることを意味している。「今後誰も自分と同じ目に遭ってほしくない」という思いから、自らの体験を語る被災者は多い。しかし、そこに解釈の余地がなければ、受け手にとっての自分ごとにならない。ここに、「型」や「場」に収まりきらない「個人的記憶」の意義が存在する。

6.6 小括

本章では、本研究で得られたモデルを、先行研究において展開されている語り継ぎに潜む課題に適用することを試みた。その課題とは、「型」がひとつに収斂されていくことで、「語り」の多様性が失われていくことである。しかし一方で、送り手にとっての語りの「型」と「場」は、普遍的かつ継続的に教訓を語り継いでいくためにのよりどころとなるものであることを明らかにした。防災・減災において重要なのは、災害を体験したことのない受け手が、今後起こりうる災害を自分の問題として捉えることであり、それが受容されるメッセージの中心であるべきである。送り手の被災情報の表現が受け手にとって有効に受容されるためには、送り手と受け手との間に「個人的コンテクスト」に基づく共通項が必要であり、ここに、「型」や「場」に収まりきらない「オルタナティブ」な「個人的記憶」の意義が存在することを明確にし、そのために「語り」の多様性が担保されている必要があることを示した。

²⁹ 矢守, 2013, p.26

第7章 まとめ

7.1 本研究の総括

本研究では、自然災害における被災情報の語り継ぎの実践として被災者の「語り」に着目し、災害発生後の数年間において、「語り」の内容の時間経過にともなう変容を明らかにすることを目的とした。そして、個人の体験が被災者のメッセージとして扱われる上での、送り手によって表現される内容と受け手に受容されるメッセージについて考察した。時間経過による「語り」の変容の様式は、個々人によって異なると考えられる。加えて、「語り」の変容について、送り手が常に自覚的であるとは限らないと思われる。しかし、そこに傾向性を見出すことができれば、体験者の「語り」を持続可能な防災・減災へ役立てることの一助となると考えられる。本研究においては、時間経過により「語り」が変容すること、そしてその変容には傾向性があることを仮説とした。本研究の研究対象地域は、2014年8月20日、広島市で局地的な集中豪雨により大規模な土砂災害が発生し（以下、8.20 広島土砂災害）、災害関連死3名を含む、77名の生命が失われた地域である。

第2章では、先行研究を整理して、本研究の研究課題を明確にした。本研究では、被災情報の表現方法の中でも、時間経過による影響を最も受けやすいと考えられる、意図的かつ言語的な手法である被災者の「語り」に着目した。次に、体験の語り継ぎを担ってきた「語り部」の語りにおける「定型化」を指摘し、それが外部からの圧力により生じる現象であるとの説に対し、「定型化」とは送り手のためのものであり、送り手が求めたものでもあるという側面があることを示した。続いて、「語り」には、語る内容としての「記憶」と、それを表現するための「語りの方式（ナラティブ）」の2つの要素で構成されているという観点から、「記憶研究」と「ナラティブ・アプローチ」という2つの領域にまたがって議論を展開した。記憶には、社会において共有されている「集合的記憶」と、個々人のそれぞれ有する独自の「個人的記憶」が存在する。この「集合的記憶」は「社会化」した「ドミナント・ストーリー」として表現され、「個人的記憶」は「個人化」した「オルタナティブ・ストーリー」として表現されることが考えられる。本研究においては、「個人的記憶」と「集合的記憶」が単純な二項対立ではなく、「個人的記憶」と「集合的記憶」をフェーズとしてとらえて、時間経過による変容を検討していくものとした。最後に、時間経過による変容を単なる「忘却」ではなく「社会的現実」の喪失過程であるという視点を指摘した。そして、「風化」という現象は受け手の問題として捉えられがちであるが、送り手の記憶にも「風化」は起こり得ることを示した。そして、受け手の「風化」に関する研究は多く取り組まれている一方で、被災者の「個人的記憶」が自身の中でどのように変容していくか、すなわち送り手側の「風化」について検証した研究は少ないことを指摘し、送り手の「語り」の時間経過による変容を明らかにすることを本研究の研究課題とすることを示した。

第3章では、時間経過による被災者の語りの変容を検討するにあたり、まずは被災者が災害発生直後の「発災期」に自身の体験をどのように語っているのか、その特徴を検討した。8.20 広島土砂災害発生直後から収集が開始された「8.20 災害体験談集」を分析対象とし、

収められた 92 名の体験談を計量テキスト分析し、その特徴を得た。その結果、「8.20 災害体験談集」に集められた証言は「事態」の報告にとどまっており、「発災期」においては、まだ自身の被災体験に対する解釈は存在せず、したがって被災者が語り継ぎたい「教訓」も見出されていないことが明らかになった。

第 4 章では、ある被災者(M 氏)の被災体験の「語り直し」を分析することで、被災者の「語り」は時間経過とともに変化する、という仮説を検証した。災害発生から 3 年後と 5 年後の 2 度にわたりインタビュー調査を実施し、その結果を比較検討することで「語り直し」の特徴を分析し、被災者の「語り」の時間経過による変容の枠組みを見出すことを試みた。その結果、3 年目インタビューにおいては、より多くのテーマについて語られており、一つひとつのテーマにおいてもより細部まで「語り」が展開されていたことがわかった。ただし、それらは M 氏自身の被災体験ではなく、災害の概略である。一方、5 年目インタビューでは、M 氏は、これまで語ったことのないような「個人的記憶」について、自分を主語にしての「語り直し」が確認できた。また、「語り」に見られる「型」と「場」の存在意義が示唆された。災害の事実を正確に表現するために表現の「型」は形作られていき、災害を象徴する「場」が立てられると考えられる。ただし、この結果はあくまでひとりの被災者の「語り」に見られた傾向である。また、M 氏の「語り直し」は、M 氏本人にも無自覚に行われていたものと解釈できる。

第 5 章では、第 4 章で確認された傾向が被災者に一般的に見られる傾向であるのかを検証することを目的とした。8.20 広島土砂災害において、最も被害が大きかった安佐南区の八木・緑井地区在住の 19 名の被災者に、発災から 3 年が経過する前の「復旧・復興期」と 5 年が経過する前の「平常期」の 2 度にわたり、非構造化インタビューを実施し、その結果を比較検討した。その結果、被災者の語りには「社会化」と「個人化」という 2 つの変容過程があり、一度「社会化」されたはずの被災者の語りが、同一者によって語られているにもかかわらず、時間経過によって「個人化」していたことが明らかになった。「発災期」には、自分の家族や身の回りのこと以外には手も頭も回らない。被災直後は自分の体験しか知り得なかった被災者たちが、時間を経て、「復旧・復興期」に移ると、近所の人びとと会話をし、またマス・メディアが発信する情報に接することによって、災害の概要が客観的に整理され、共有されやすい表層的な表現を用いて自らの被災体験を位置付ける。その結果、個々の被災体験の記憶が、「ドミナント・ストーリー」によって「社会化」していったと考えられる。しかし、周囲の被害状況を知ることによって、「平常期」には独自の深層的な表現で、自分の被災体験を「個人化」した「オルタナティブ・ストーリー」として再認識・再解釈するようになると考えられる。また、単なる変容だけでなく、自身の体験が「ドミナント・ストーリー」に回収されることに対する「抵抗」も確認された。時間経過によるこのような「語り」の変化によって、送り手の伝えたい「教訓」の表現が変化するだけでなく、受け手が教訓として受け取るメッセージも異なると考えられる。したがって、時間経過による被災者の「語

り」のこのような変容は、防災・減災の活用において、大いに考慮されるべき事項であると考えられる。

第 6 章では、本研究で得られた結果を、先行研究において展開されている語り継ぎの議論に適用することを試みた。先行研究において展開されている語り継ぎに潜む課題とは、「型」がひとつに収斂されていくことで、「語り」の多様性が失われていくことである。しかし一方で、送り手にとっての語りの「型」と「場」は、普遍的かつ継続的に教訓を語り継いでいくためにのよりどころとなるものである。防災・減災において重要なのは、災害を体験したことのない受け手が今後起こりうる災害を自分の問題として捉えることであり、それが受容されるメッセージの中心であるべきである。そのために重要になるのが、送り手と受け手の「個人的コンテクスト」を一致させることである。「今後誰も自分と同じ目に遭ってほしくない」という思いから、自らの被災体験を語る被災者は多い。しかし、そこに解釈の余地がなければ、受け手にとっての自分ごとにならない。ここに、語りの「型」がひとつに収斂していくことの危うさがあり、「型」や「場」に収まりきらない「オルタナティブ」な「個人的記憶」の意義が存在する。送り手の被災情報の表現が受け手にとって有効に受容されるためには、送り手と受け手との間に「個人的コンテクスト」に基づく共通項が必要であり、そのために「語り」の多様性が担保されている必要があることを示した。

7.2 本研究の成果

7.2.1 送り手によって表現される内容の変化

「風化」というとき、その変容は受け手の問題として用いられることが多い。すなわち、「体験の風化」や「記憶の風化」とは、受け手、特にその体験や記憶を有さない受け手が、その事実や教訓を忘れてしまうことを意味する場合が多い。一例として、ある体験や記憶を有する語り手の死が、その出来事の「風化」として報じられる。しかし、本研究においては、送り手の有する体験の記憶そのものやその語りもまた、「風化」することが明らかになった。

次に、「語り」の変容の様式には、「集合的記憶／ドミナント・ストーリー」に収斂される「社会化」と、「個人的記憶／オルタナティブ・ストーリー」として拡散していく「個人化」というメカニズムがあることが明らかになった。

そして、本研究の最も重要な点は、3 年目インタビューにおいては「社会化」していた被災者の「語り」が、時間経過により「個人化」したことである。そして、自身の体験が「ドミナント・ストーリー」に回収・集約されることに対する「抵抗」が確認されたことである。この「個人化」は、桜井(2002)がライフストーリー研究において指摘している、「ドミナント・ストーリー」へ「回収されまいとする語り手の〈個別化=主体化〉の実践」と通ずる¹。3 年目インタビュー時には、自身の被災体験の記憶やその「教訓」を正確に語り継ぐために、

¹ 松島恵介, “記憶の持続 自己の持続”, 金子書房, 2002, p.144

共有性が保証された、他者からの承認や納得を得られやすい「集合的記憶」という「型」や「場」に当てはめるかたちで「語り」が完成されたと思われたが、5年目インタビューでは語り手はあえてその「型」や「場」から離脱し、共有されにくい個別で私的な「個人的記憶」を語るようになっていたのである。

7.2.2 受け手に受容されるメッセージの変化

時間経過によるこのような「語り」の変化によって、送り手の伝えたい「教訓」の表現が変化するだけでなく、受け手が教訓として受け取るメッセージも異なると考えられる。

「語りの型」は所与のものではない。世間の通説が「ドミナント・ストーリー」となるのであり、その通説はマス・メディアを通して形成される。アスマン(2007)は次のように述べる。

われわれが今日かかわっているのは、記憶の自己止揚ではなく、逆にその先鋭化なのだ。なぜなら、時代の証人たちの経験記憶が将来失われてしまうことを防ぐためには、それは後世の文化的記憶へと移し変えなくてはならないからだ。そうして生きた記憶は、メディアによって支えられた記憶に道を譲る。この記憶は、記念碑や記念の場所、美術館やアーカイヴといった物質的媒体によって支えられている。個人における想起のプロセスが、大部分は無意識的に進行し、心的機構の一般的な規則に従うのに対して、集団的で制度的な次元では、このプロセスは、想起あるいは忘却の意図的な政治によって管理されている。文化的記憶が自然に生成することは決してありえないので、それはメディアと政治に依存している。²

なぜ3年目インタビューでは「ドミナント・ストーリー」が語られるのだろうか。ここに、矢守(1996)の「卑近な人々同士の会話」と「マスメディア発信の情報」のそれぞれの影響が見て取れる。すなわち、分析の結果、災害発生から1ヶ月の間の新聞記事題目で多用された名詞の多くが「ドミナント・ストーリー」の表現を構成していた。3年目インタビューでは被災者は、自分たちに被害をもたらした災害がどのようなものであったかという情報をマス・メディアから得て、その表現を受け入れて自分の被災体験を語るようになっていると考えられる。矢守(1996)は、「マスメディアの場合、会話と比較して、そうした言説が一方向的に与えられ、かつ、同じ言説に多くの人々が同時に触れるという点が特徴的である」と述べる。

例えば、集中豪雨が発生したとき、新聞の一面に「土石流、人家を呑む—森林の乱開発に遠因？」という見出しとともに崖崩れの様子が詳細に報道されたと仮定す

² アライダ・アスマン著／安川晴基訳，“想起の空間：文化的記憶の形態と変遷”，水声社，2007，p.28

る。この報道に触れた読者はどのような反応を示すだろうか。一方では、河川の氾濫をも惹起していたとしても、多くの人々が「今回の出来事は、『土石流』『地滑り』なのだ」と了解するに至るかもしれない。あるいは、不幸にして土石流のために家族を喪って悲しみに打ちひしがれるしかなかった人々に、それは「災害」という言葉で語られるべき事象であり、かつ、その種類は「土石流」と呼ばれるものであること、さらには、それは森林開発の問題との関連で語られるべき筋合いのものであることを、この報道は示唆する（時には、強調する）役割を果たすかもしれない。

3

語りの「型」の原型を形成したのはマス・メディアかもしれない。しかし、被災者はその型を積極的に採用し、自身の体験をそこにあてはめて語るようになっているとも考えられる。すなわち、自身の被災体験を受け入れてもらうために、あえてマス・メディアの報道を軸に据えろと考えられる。災害のメカニズムを学んだり、砂防堰堤の工事の進捗状況を把握したりする M 氏の行動がその典型である。被災者にとってまず重要なのは、自分たちが体験した災害がどのようなものであったのかを「正確に」知ってもらうことであり、すなわちそれが伝わってほしい「教訓」でもあると捉えることができる。つまり、語り手が伝えたい「教訓」を「正確に」表現すること、そしてそれが変わらず表現され続けるようにすることが、「型」と「場」の意義であった。

そうして、3 年目には「ドミナント・ストーリー」に当てはめるように客観的・相対的に位置づけていた自分の体験を、周囲との復旧・復興の速度の違いや被災者ではない人たちとの交流によって、5 年目には自身の体験を主観的・絶対的な観点から捉え直し、表現される内容が変化したと考察できる。時間経過によって、「被災者でない自分」という「オルタナティブ」な視点を取り戻すことによって、「ドミナント・ストーリー」に抵抗を覚えるようになると思われる。

被災者が自身の体験を主観的に語るのは、災害を語ることも、被災を語ることで、「教訓」を伝えようとする意識の現れといえる。本来、「教訓」とは一樣ではなく、主観的なものである。

7.3 今後の展望

本来、被災者の語りは多様なものであり、受け取られるメッセージもまた多様なものであるはずである。一方、被災者は教訓を普遍的なものとして継続的に語ることができるようにすることが、「型」と「場」の存在意義であった。しかし、前章で指摘したとおり、「型」においては「個人的コンテクスト」が考慮されなくなる傾向が見られた。今後は、時間経過に

³ 矢守克也，“災害の「風化」に関する基礎的研究：1982 年長崎大水害を事例として”，実験社会心理学研究，Vol.36, No.1, pp.20-31, 1996, p.22

よる変容、および「型」の存在を考慮し、語りの多様性を担保していくための方策を検討する必要がある。

7.3.1 記憶の持続性

首藤(2008)は、「経験の持続性」を次のような表 19 にまとめている⁴。

表 19 経験の持続性（首藤(2008)より筆者作成）

年数	事項
72ヶ月	この期間内にPTSDの治療必要
8年	大災害経験が重視されなくなる
10年	経験が楽観にとって変わられる
15年	経験は災害への備えに反映されない
20年	技術伝承できる、ぎりぎりの時間感覚
30年	吊り上げで代表される世代交代

本研究で得られた成果に鑑みると、被災者は、被災することで突然「語り手」として位置づけられるが、その立場にとまどい、当初はうまく体験を語ることができない様子が「8.20 災害体験談集」において確認された。しかし、3 年程度経過したところで、「こう言えば伝わる」という語りの「型」が形成され、その後 5 年程度経過したところで「個人化」していた。

しかし、本研究で取り上げた「3 年」あるいは「5 年」という時間経過は、まだ経験、あるいは記憶の変容途上であると考えられる。今後も、継続的な比較検討によって、より中長期の記憶の変容が明らかになるだろう。

7.3.2 「語り」の変容モデルの精緻化

本研究では、多様な属性を有する被災者からの「語り」を分析することで、被災者「一般」に確認される「語り」の変容モデルの構築を試みた。

しかし、被災者の個人的コンテクストによって、「語り」の変容過程は異なると考えられる。たとえば、住家が全壊したり、家族の誰かが亡くなったりする大きなインパクトを受けた者と、住家被害が床下浸水で朝目が覚めたらすでに被災していたという者とは、記憶の

⁴ 首藤伸夫，“記憶の持続性：災害文化の継承に関連して”，津波工学研究報告，No.25，pp.175-184，2008，p.183

「風化」に相違が生じる可能性があると予想される。あるいは、マス・メディアの取材を受けるなど自身の被災体験を頻繁に語ってきた者と、筆者に対して、3年目インタビューと5年目インタビューのときにのみ被災体験を想起する者とは、「語り」の傾向に相違が生じる可能性があると予想される。以上のような個人的コンテクストに基づいた分析をすることで「語り」の変容モデルを精緻化することで、語り手の立場に応じたモデルを構築できるだろう。

7.3.3 コンテクストの多様性の担保

完全な「中立」とは成立しない。葛西(2016)が述べるように、「公害問題については、行政と民間では(一般的に)加害と被害の立場に分かれるので、ある事柄について相反する解釈がなされることがある」⁵ため、水俣病に関する施設が「水俣市立水俣病資料館」と「水俣病歴史考証館」の2種類存在しているということは、ある意味では理にかなっている。平井(2012)によると、「水俣市立水俣病資料館」が「公的」な言説を再生産しているのに対し、「水俣病歴史考証館」は被害者の立場から対抗的な言説を生み出している⁶。また、高野ら(2007b)は、人と防災未来センターという公的機関における語り部には、聞き手が震災の語り部という役割に期待する「震災なるもの」に関する語りをするという期待が寄せられ、その受け手の期待と語り部の語りとのズレを「対話の綻び」と呼んだ⁷。本論文では、どちらを「対抗的」とであると位置づけるか、それが「綻び」かどうか、ということは重要ではない。重要なのは、「型」の多様性が担保されていることである。

語り継ぎの「型」と「場」がうまく機能しているひとつの例として、「仁川百合野町地すべり資料館」(以下、地すべり資料館)を挙げたい(図 21)。

⁵ 葛西伸夫, “四大公害企画展 展示パネル製作”, ごんすい, Vol.141, 一般財団法人水俣病センター相思社, pp.24-25, 2016, p.24

⁶ 平井京之介, “運動する博物館: 水俣病歴史考証館の対抗的实践”, 国立民族学博物館研究報告, No.36, No.4, pp.531-559, 2012, p.532

⁷ 高野尚子・渥美公秀, “阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察: 対話の綻びをめぐって”, 実験社会心理学研究, Vol.42, No.2, pp.185-197, 2007b, p.193



図 21 仁川百合野町地すべり資料館（2017 年 1 月 14 日、筆者撮影）

仁川百合野地区は、1995 年 1 月 17 日に発生した兵庫県南部地震による「阪神・淡路大震災」で発生した地すべりによって、最も多くの犠牲者が出た地域である。仁川百合野町地すべり資料館（以下、地すべり資料館）は、その地すべり地の復旧および対策と合わせて整備され、震災発生からわずか 2 年 10 ヶ月後の 1997 年 11 月に開館した（震災発生 20 年後の 2015 年 1 月 17 日にリニューアルオープン）。地すべり資料館は、斜面の動向を監視するため（向かってすぐ左に崩壊した斜面がある）、また当時の被害状況や土砂災害の仕組み、復旧対策の事業内容などが学べる「場」として開館した。また、その建設場所は、地すべりによって被害を受けた、まさにその場所である。すなわち、「博物館」的側面と「モニュメント」的側面の双方を備えた「場」である。ここに存在する「型」は、阪神・淡路大震災のなかでも仁川百合野地区で発生した地すべりのみに焦点を絞った限定的なものである。しかし、限定的であるがゆえに、「型」としての機能を発揮しやすいと考えられる。なぜなら、「場」においても、「個人的コンテクスト」との関係が重要だからである。「語り」の「型」や「ば」が固有性の喪失ではなく「教訓」として作用するための方策を、引き続き検討していく必要がある。

また、「型」の多様性を担保するためには、より多くの被災者の体験談を収集する必要がある。加えて、本研究で明らかにしたように、時間経過によって被災者の記憶も風化する。筆者は現在、本研究で得た被災体験の語りと、平成 30 年 7 月豪雨の被災者から得られた語りをもとに、エスノグラフィを作成している。エスノグラフィには、当時の被災状況だけでなく、被災者の属性（性別、年齢、職業、家族構成など）を明記し、方言などの言い回しは

そのまま使用するようになっている。また、発災から何年が経過した時点での語りであるかも明記している。

ただし、ただエスノグラフィを増やすだけでは、効果的な情報伝達の実践とはならない。被災者の「語り」が防災・減災に寄与しているかどうかを明らかにするためには、エスノグラフィの作成とともに、受け手がどのようなメッセージを受け取っているのかについても調査・分析する必要がある。何が教訓であるのかを決めるのは受け手でもある反面、その解釈を完全に受け手に委ねることには危険が伴う。たとえば、避難行動をとらずにまた被害を受けなかった被災者の「語り」から、「どのような場合においても避難は必要ない」と自分の都合の良いように解釈をしたり、自分の意見や価値観に合致するような内容の「語り」にしか耳を傾けなかったりする可能性がある。

送り手にとっての「型」が、自身の「教訓」を語り継ぐためのよりどころであることに鑑みると、「型」を排するのではなく、多様性が重要なのである。受け手の学びを保証するための「語り」の「型」の多様性をどのように担保していくかについても、議論の余地があるところである。

謝辞

本研究は、広島県広島市の安佐南区と安佐北区を対象にしたフィールド調査を中心に進めてきたものであり、M氏をはじめとする、インタビュー調査にご協力いただいた地域住民の方々のご理解とご協力により研究を進めることができた。被災という恐怖体験を語ることは、ときに苦痛や困難を伴う行為であると予想されるが、皆さん快く承諾してくださった。これからも引き続き調査を行い、研究成果を還元できるよう研究を続けていきたい。

参考文献・参考資料

- アライダ・アスマン著／安川晴基訳，”想起の空間：文化的記憶の形態と変遷”，水声社，2007
- 渥美公秀，”語りのグループ・ダイナミックス：語るに語り得ない体験から”，大阪大学大学院人間科学研究科紀要，Vol.30，pp.160-173，2004
- 有末賢，”集合的記憶と個人的記憶：記憶の共有性と忘却性をめぐって”，法学研究，Vol.89，No.2，pp.19-40，2016
- U・ベック著／東廉訳，”危険社会：新しい近代への道”，法政大学出版会
- G・ドゥボール著，木下誠訳，”スペクタクルの社会”，ちくま学芸文庫，2003
- 江口保，”いいたかこといっぱいあつと”，クリエイティブ 21，1998
- J・H・フォーク&L・D・ディアーキング著／高橋順一訳，”博物館体験：学芸員のための視点”，雄山閣，1996
- 藤本理志・小山耕平・熊原康博，”広島県内における水害碑の碑文資料”，広島大学総合博物館研究報告，No.8，pp.91-113，2016
- 伏木啓，”集合的記憶とメディア”，名古屋学芸大学メディア造形学部研究紀要，No.2，pp.43-52，2009
- J・ル・ゴフ著／立川孝一訳，”歴史と記憶”，法政大学出版局，1999
- E・ゴッフマン著／石黒毅訳，”アライサム：施設被収容者の日常世界”（ゴッフマンの社会学 3），誠信書房，1984
- 羽賀祥二，”史跡論：19 世紀日本の地域社会と歴史意識”，名古屋大学出版会，1998
- 浜日出夫，”記憶の社会学・序説”，哲学，pp.1-11，2007
- M・アルヴァックス著／小関藤一郎訳，”集合的記憶”，行路社，1989

M・アルヴァックス著／鈴木智之訳，”記憶の社会的枠組み”，青弓社，2018

樋口耕一，”社会調査のための計量テキスト分析【第2版】：内容分析の継承と発展を目指して”，ナカニシヤ出版，2020

匹田篤・渡邊晃・福田龍典，”体験価値向上のための、感動のモデル化の取り組み”，第21回日本感性工学会大会予稿集，pp.720-724，2019

平井京之介，”運動する博物館：水俣病歴史考証館の対抗的実践”，国立民族学博物館研究報告，No.36, No.4，pp.531-559，2012

平田仁胤，”戦後日本における被爆体験の継承可能性：若者世代にとっての被爆証言=平和教育のリアリティ”，日本オーラル・ヒストリー研究，No.8，pp.109-124，2012

広瀬弘忠，”人はなぜ逃げおくれるのか：災害の心理学”，集英社新書，2004

広島県，”「8.20 土砂災害 砂防・治水に関する施設整備計画」の進捗状況について”
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/100/0820sabotisan-shisetsuseibi-sinchokujoukyou.html> （最終閲覧日：2021年8月9日）

広島市，”被爆体験伝承者養成事業について”
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace/10164.html> （最終閲覧日：2021年8月9日）

池田謙一，”新版 社会のイメージの心理学：ぼくらのリアリティはどう形成されるか”，サイエンス社，2013

磯田道史，”天災から日本史を読みなおす：先人に学ぶ防災”，中公新書，2014

海堀正博・石川芳治・里深好文・松村和樹・中谷加奈・長谷川祐治・松本直樹・高原晃宙・福塚康三郎・吉野弘祐・長野英次・福田真・中野陽子・島田徹・堀大一郎・西川友章，”2014年8月20日に広島で発生した集中豪雨に伴う土砂災害”，砂防学会誌，Vol.67, No.4，pp.49-59，2014

海堀正博・柳迫長三編著，”平成26年8月20日広島豪雨災害体験談集”，砂防学会2014年8月広島大規模土砂災害緊急調査団，2015

金子勝・大澤真幸, ”見たくない思想的現実を見る”, 岩波書店, 2002

笠原一人, ”記憶のアクチュアリティへ”, 笠原一人・寺田匡宏, 記憶表現論, 昭和堂, 2009

葛西伸夫, ”四大公害企画展 展示パネル製作”, ごんすい, Vol.141, 一般財団法人水俣病センター相思社, pp.24-25, 2016

川端亮, ”宗教の計量的分析：真如園を事例として”, 大阪大学大学院人間科学研究科平成14年度博士論文, 2003

川村あかり, ”「語り部」生成の民俗誌にむけて：「語り部」の死と誕生、そして継承”, 超越文化科学紀要, No.23, pp.5-25, 2018

川崎梨江・相羽将智・服部典利子・坂田桐子・匹田篤, ”リスク認識におけるAR体験の効果に関する調査”, 総合科学研究, Vol.1, pp.37-46, 2020

喜多壮太郎, ”ジェスチャー：考えるからだ”, 金子書房, 2002

北原糸子, ”日本災害史”, 吉川弘文館, 2006

KH Coder 掲示板

http://koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs_khn/khcf.cgi?no=122&mode=allread

(最終閲覧日：2021年8月9日)

http://www.koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs_khn/khcf.cgi?no=1313&mode=allread#1316

(最終閲覧日：2021年8月9日)

国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所, ”平成26年8月20日豪雨 広島土砂災害”

http://www.cgr.mlit.go.jp/hiroshima_seibu_sabo/pamphlet/pdf/pamph_disaster_201408.pdf (最終閲覧日：2021年8月9日)

国土交通省国土地理院, ”自然災害伝承碑について”

<https://www.gsi.go.jp/common/000211781.pdf> (最終閲覧日：2021年8月9日)

小山耕平・熊原康博・藤本理志, ”広島県内の洪水・土砂災害に関する石碑の特徴と防災上の意義”, 地理科学, Vol.72, No.1, pp.1-18, 2017

楠見孝, ”市民のリスク認知”, 日本リスク研究学会, 増補改訂版 リスク学事典, 阪急コミュニケーションズ, 2006, pp.272-273

松島恵介, ”記憶の持続 自己の持続”, 金子書房, 2002

三上喜美男, ”記憶の継承とメディアの役割”, 沖村孝・田中秀基・岸本健司・白髭一磨・近藤浩明・矢野治・浦川豪・坪井蒨太郎・三上喜美男, 昭和 13 年阪神大水害の伝承事業: 個人の記憶を社会の記憶に, 自然災害科学, Vol.38, No.1, pp.5-28, 2019

C・W・ミルズ著／伊奈正人・中村好孝訳, ”社会学的想像力”, ちくま学芸文庫, 2017

溝井裕一, ”伝説と集合的記憶: 伝説において過去はいかに「想起」されるのか”, 関西大学東西学術研究所紀要, No.42, pp.61-99, 2009

許山秀樹, ”漢文で書かれた石碑と浜松の土地問題: 4つの漢文碑から読みとりうること”, 静岡大学情報学研究, Vol.14, pp.1-18, 2009

永田素彦・矢守克也, ”災害イメージの間主観的基盤: 昭和 57 年長崎大水害についての会話分析”, 実験社会心理学研究, Vol.36, No.2, pp.197-218, 1996

内閣府 (防災担当), ”平成 26 年 8 月 20 日に発生した広島市土砂災害の概要”
<http://www.bousai.go.jp/fusuigai/dosyaworking/pdf/dailkai/siryo2.pdf> (最終閲覧日: 2021 年 8 月 9 日)

直野章子, ”原爆体験と戦後日本: 記憶の形成と継承”, 岩波書店, 2015

根本雅也, ”証言者になること: 広島における原爆被爆者の証言活動のメカニズム”, 日本オーラル・ヒストリー研究, No.11, pp.173-192, 2015

野口裕二, ”物語としてのケア: ナラティブ・アプローチの世界へ”, 医学書院, 2002

野口裕二, ”当事者研究が生み出す自己”, 自己語りの社会学: ライフストーリー・問題経験・当事者研究, pp.249-267, 2018

P・ノラ著／長井伸仁訳，”序論 記憶と歴史のはざまに”，記憶の場：フランス国民意識の文化=社会史 第1巻 対立，岩波書店，2002

岡村光章，”東日本大震災における災害情報提供について：メディアの特徴的変化と今後の課題”，レファレンス，Vol.728，pp.51-65，2011

W・J・オング著／桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳，”声の文化と文字の文化”，藤原書店，1991

Röhrich, Lutz: Sage. Stuttgart: J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1971

桜井厚，”序 語り継ぐとは”，桜井厚・山田富秋・藤井康編，過去を忘れない：語り継ぐ経験の社会学，せりか書房，2008

佐藤一子，”文化創造的営為としての昔話の口承活動：遠野の語り部たちのライフストーリーの考察”，法政大学キャリアデザイン学部紀要，No.11，pp.245-278，2014

関沢まゆみ，”「戦争と死」の語り：その個人化と社会化”，国立歴史民俗博物館研究報告，Vol.147，pp.7-34，2008

首藤伸夫，”記憶の持続性：災害文化の継承に関連して”，津波工学研究報告，No.25，pp.175-184，2008

R・ソルニット著／高月園子訳，”災害ユートピア：なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか”，亜紀書房，2010

高橋昭博，”ヒロシマ いのちの伝言：被爆者 高橋昭博の50年”，平凡社，pp.138-145，1995

高野尚子・渥美公秀，”語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察：語り部と聞き手の協働想起に着目して”，ボランティア研究，Vol.8，pp.97-119，2007a

高野尚子・渥美公秀，”阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察：対話の綻びをめぐって”，実験社会心理学研究，Vol.46，No.2，pp.185-197，2007b

田中重好, ”後衛の災害研究：間接的被災体験と災害文化”, 人文社会論叢 社会科学篇, No.2, pp.99-114, 1999, p.110

寺田匡宏, ”災害と語り：悲劇としての三陸津波の記憶表象とその分析方法に関する試論”, 国立歴史民俗博物館研究報告, Vol.123, pp.451-473, 2005

寺岡聖豪, ”「原爆を語る」と平和教育”, 福岡教育大学紀要, No.66, pp.15-26, 2017

A・トフラー著／徳岡孝夫監訳, ”第三の波”, 中公文庫, 1982

東京臨海広域防災公園, ”防災体験学習”

<http://www.tokyorinkai-koen.jp/sonaarea/1f.php> (最終閲覧日：2021年8月9日)

豊永恵三郎, ”会の結成”, ヒロシマを語る会, 生かされて：ヒロシマを語る会十年の歩み, 1994

M・ホワイト & D・エプストン著／小森康永訳, ”物語としての家族”, 金剛出版, 2017

八木良広, ”体験者と非体験者の間の境界線：原爆被害者研究を事例に”, 哲学, Vol.117, pp.37-67, 2007

やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学, ”人は身近な「死者」から何を学ぶか：阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより”, 教育方法の探究, No.2, pp.61-78, 1999

やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美, ”阪神大震災における「友人の死の経験」の語りと語り直し”, 教育方法の探究, No.3, pp.63-81, 2000

やまだようこ, ”喪失の語り：生成のライフヒストリー”, 新曜社, 2007

山本晴彦・小林北斗, ”2014年8月20日に広島市で発生した豪雨と土石流の特徴”, 自然災害科学, Vol.33, No.3, pp.293-312, 2014

山本和男, ”プロジェクト教訓(Lessons Learned)の取りまとめと活用の提案”, プロジェクトマネジメント学会 2007年度春季研究発表大会予稿集, pp.395-400, 2007

矢守克也, ”災害の「風化」に関する基礎的研究：1982 年長崎大水害を事例として”, 実験社会心理学研究, Vol.36, No.1, pp.20-31, 1996

矢守克也, ”災害の「風化」に関する基礎的研究(II)：マスメディアの報道量とマクロ行動変数による測定と表現”, 実験社会心理学研究, Vol.42, No.1, pp.66-82, 2002

矢守克也, ”4 人の震災被災者が語る現在：語り部活動の現場から”, 質的心理学研究, Vol.2, No.1, pp.29-55, 2003

矢守克也, ”災害人間科学”, 東京大学出版会, 2009

矢守克也, ”巨大災害のリスク・コミュニケーション：災害情報の新しいかたち”, ミネルヴァ書房, 2013

矢守克也・船木伸江, ”語り部活動における語り手と聞き手との対話的關係：震災語り部グループにおけるアクションリサーチ”, 質的心理学研究, Vol.7, pp.60-77, 2008

米山リサ, ”広島 記憶のポリティクス”, 岩波書店, 2005

吉村智博, ”博物館における表象行為と社会的差別：差異の表象をめぐって”, 人文学報”, No.100, pp.113-127, 2011

図表リスト

図 1	土石流に巻き込まれた家屋 (2014 年 8 月 20 日、被災者撮影)	4
図 2	8.20 広島土砂災害発生地域 (Google マップより筆者作成)	5
図 3	広島市安佐南区の被災箇所 (内閣府)	5
図 4	広島市安佐北区の被災箇所 (内閣府)	6
図 5	蛇王池の碑 (2017 年 4 月 3 日、筆者撮影)	9
図 6	本論文の構成	12
図 7	「災害史」の分類 (矢守(2013)より筆者作成)	15
図 8	災害の時間区分 (岡村(2011)より筆者作成)	29
図 9	「8.20 災害体験談集」における出現回数 50 以上の語の共起ネットワーク	34
図 10	M 氏の 3 年目インタビューにおける Euclid 距離の係数 0.2 以上の共起ネットワーク	47
図 11	M 氏の 5 年目インタビューにおける Euclid 距離の係数 0.2 以上の共起ネットワーク	48
図 12	匹田(2019)をもとにした「語り」の変容モデルの仮説	52
図 13	3 年目および 5 年目インタビューの位置づけ	54
図 14	3 年目・5 年目インタビューから抽出した頻出語の使用頻度の変化 (単位：回)	57
図 15	3 年目・5 年目インタビューから抽出した頻出語の使用比率の変化 (単位：%)	58
図 16	3 年目インタビューにおける「避難」の関連語の共起ネットワーク	59
図 17	5 年目インタビューにおける「避難」の関連語の共起ネットワーク	60
図 18	本研究で得られた「語り」の変容モデル	69
図 19	阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター (2017 年 1 月 7 日、筆者撮影)	76
図 20	災害文化の中折れ現象 (田中(1999)より引用)	81
図 21	仁川百合野町地すべり資料館 (2017 年 1 月 14 日、筆者撮影)	90
表 1	8.20 広島土砂災害の人的被害 (単位：人) (国土交通省)	6
表 2	8.20 広島土砂災害の住家被害 (単位：棟) (国土交通省)	7
表 3	「記憶研究」と「ナラティブ・アプローチ」の位置づけ (筆者作成)	27
表 4	「8.20 災害体験談集」への寄稿者の居住地 (筆者作成、単位：人)	32
表 5	「8.20 災害体験談集」の形態素分析の結果 (単位：語)	32
表 6	「8.20 災害体験談集」の頻出語 (単位：回)	33
表 7	M 氏の「語り」の形態素分析の結果 (単位：語)	37
表 8	M 氏の 3 年目インタビューにおける出現回数上位 15 位の頻出語 (単位：回)	38

表 9	M 氏の 5 年目インタビューにおける出現回数上位 15 位の頻出語（単位：回）	38
表 10	3 年目・5 年目インタビュー対象者の属性一覧	53
表 11	「8.20 土砂災害 砂防・治山に関する施設整備計画」の進捗状況（広島県より筆者作成）	54
表 12	3 年目インタビューと 5 年目インタビューの形態素分析の結果（単位：語）	55
表 13	3 年目インタビューにおける出現回数上位 15 位の頻出語（単位：回）	56
表 14	5 年目インタビューにおける出現回数上位 15 位の頻出語（単位：回）	56
表 15	3 名の被災者の「語り」の抜粋	61
表 16	中国新聞の新聞記事の題目への出現頻度（単位：回）	63
表 17	定量調査の質問項目	79
表 18	変数ごとの平均点（標準偏差）（満点：5 点）	79
表 19	経験の持続性（首藤(2008)より筆者作成）	88

付録

中国新聞記事題目（2019 年 8 月 20 日～2019 年 9 月 19 日）

SN	日付	朝刊／夕刊	ページ数	見出し
1	8月20日	号外	1	広島市内で土砂崩れ 5 人死亡 行方不明十数人 安佐南・安佐北区で記録的豪雨
2			2	不意の濁流、住宅地のむ 広島土砂崩れ 【写真特集】
3		夕刊	1	広島で土砂崩れ 18 人死亡 家屋流失 11 人不明 未明に局地的豪雨 広島市は対策本部設置
4			1	首相「政府一体で対応」 広島土砂崩れ
5			1	6 府県警が広域緊急援助隊を派遣 広島土砂崩れ
6			2	濁流が住宅地襲う 広島土砂崩れ【写真特集】
7			3	未曾有の雨で裏山が… 広島土砂崩れ 家倒壊し生き埋め 市は 1800 人態勢で対応
8			3	住宅孤立しヘリで救助 広島土砂崩れ・上空ルポ
9		朝刊	31	広島で大雨、停電相次ぐ 平和大通りなど冠水
10	8月21日	朝刊	1	土砂災害で 39 人死亡 広島市安佐南・安佐北 未明の豪雨で土石流 7 人不明 1 時間 130 ミリ
11			2	広島土砂災害で避難勧告大幅遅れ 市長「非常に残念」 判断方法見直しへ
12			2	首相、状況把握や救助全力を指示 広島土砂災害 自身は朝ゴルフ、野党が批判
13			2	避難勧告は早めの発令を 松井・広経大教授（災害情報論）に聞く 広島土砂災害
14			2	海外メディアも大きく報じる 広島土砂災害
15			2	「土砂災害対応に問題なし」と官邸反論 首相の「朝ゴルフ」
16			2	防災相「警戒区域の指定進める」 広島土砂災害で上空から視察
17			2	陸自 600 人を現地派遣 広島土砂災害
18			3	山裾での宅地開発「危険隣り合わせ」 広島土砂災害
19			3	積乱雲が次々発生 広島土砂災害 バックビルディング現象か 3 時間雨量 217・5 ミリ
20			3	特別警報発表せず 気象庁 広島土砂災害
21			3	まさ土の地盤もろく 海堀正博広島大大学院教授（砂防学）に聞く 広島土砂災害
22			6	社説 広島土砂災害 なお警戒し安全確保を
23			9	浸水に停電…企業に打撃 広島土砂災害 開店遅れや操業停止
24			9	広島土砂災害の被災者へ低利融資 金融機関 本人確認弾力的に
25			17	土砂災害の備え万全に 専門家 2 人に聞く 広島県は全国一のリスク地域
26			18	自然の猛威が不意打ち 広島土砂崩れ【写真特集】
27			22	広島－水戸は延期 サッカー 土砂災害に配慮し 27 日に
28			24	被害把握や指示に奔走 広島土砂災害 市・県など対策本部
29			24	支援職員を相次ぎ派遣 広島土砂災害で中国地方自治体 消防車やヘリも
30			26	深い傷痕に曇る表情 広島土砂災害、安佐北区も被害甚大 裏山崩れ道路寸断
31			26	県東部からも D M A T など派遣 広島土砂災害
32			27	避難住民「怖くて帰れぬ」 広島土砂災害の安佐南区 学校・集会所で不安な一日
33			27	撤去や差し入れ 支援の輪広がる 広島土砂災害
34			27	停電復旧めど立たず 広島土砂災害 断水相次ぐ
35			30	生存信じ懸命捜索 警察や消防 2000 人超出動 広島土砂災害
36			30	8・20 ドキュメント 広島土砂災害
37			30	隣人の機転が一家 4 人救う 広島土砂災害の安佐南区 ひさしに足場板、2 階窓から脱出
38			30	市北部の交通網寸断 広島土砂災害で J R や国道 生活に影
39			30	安否情報求める声 避難所に名簿や伝言板 広島土砂災害
40			30	山肌えぐる太い筋 広島土砂災害の安佐南区・安佐北区 上空ルポ
41			30	両陛下、静養先での行事取りやめ 広島土砂災害
42			30	本社が号外 広島土砂災害

43			30	被災学生に奨学金 広島土砂災害
44			31	命も家ものまれた 広島土砂災害 「ゴオー」土砂や岩一気／２歳・１１歳の兄弟死亡「体まだ温かった」／幼児救助中の消防隊員犠牲
45		夕刊	1	不明者捜索・救助に全力 広島土砂災害 県警・陸自など３４００人 断水や停電続く
46			1	防災相、広島土砂災害の現場視察 「広範囲の被害実感」
47			1	露大統領、首相に弔意伝える 広島土砂災害
48			3	避難所は不安な一夜 広島土砂災害 被災者「いつ戻れるのか」 眠れず隠せぬ疲労
49			3	JＲ可部・芸備線の運休続く 広島土砂災害 国道も渋滞
50			3	食い違う不明者数 市は３１人・県警７人 広島土砂災害
51			3	断水１２３０世帯 停電は９７０戸 復旧めど立たず 広島土砂災害
52	8月22日	朝刊	1	広島土砂災害の行方不明５１人に 死者は３９人 被害拡大し県内最大級
53			1	天変 教訓は生かされたのか <上>（前編） 避難勧告に踏み切れず いったん小康状態で先送り 広島土砂災害
54			1	亡くなった方々 広島土砂災害
55			2	複合要因が大土石流招く 広島土砂災害 小杉・京都大准教授（砂防学）上空から分析 長い急勾配や砂防ダム不足
56			2	首相「早急な救命を」 広島土砂災害 被災者支援対応を指示
57			2	広島市長・知事が現地訪問 広島土砂災害 避難者の要望確認
58			2	二次災害警戒の徹底を強調 防災相と国交相、広島土砂災害で現地視察
59			3	大半が警戒区域外 広島土砂災害 行政の対応追いつかず／指定で地価下落の懸念も
60			3	Ｑ＆Ａ バックビルディング形成 積乱雲 風上で次々 広島土砂災害
61			3	警戒区域指定の支援強化／避難勧告発令見直しも 広島土砂災害で政府検討
62			3	警戒区域指定へ改善求める声 自民・公明が対策会議 広島土砂災害受け
63			3	研究者「気象変動も考慮を」 広島土砂災害起こした豪雨 温暖化で災害増加
64			3	積乱雲、高さ最大１５キロ 広島土砂災害 防災研が立体画像公開
65			5	韓・露が弔意 広島土砂災害
66			6	社説 避難勧告の遅れ 夜間の災害 どう備える
67			7	広場 避難勧告の遅れ 残念
68			7	広場 災害で風景一転 衝撃
69			9	中電・ガスなど被災者料金支払い延長 広島土砂災害 金融機関の低利融資広がる／食品メーカーは避難所へ水や食料
70			23	県、再建支援法を適用 広島土砂災害 公営住宅の活用も検討
71			23	被災者の長期支援を 山口 心のケア研修会始まる
72			25	広島土砂災害で支援物資を搬入 総社市とＡＭＤＡ 条例初の適用
73			26	土砂撤去作業が本格化 広島土砂災害 不明男性の捜索も続く 安佐北区
74			26	広島土砂災害の義援金受け付け 福山市が開始
75			27	寄り添う住民…支援の手 広島土砂災害 ３区に避難所２９カ所 食料や着替え「ありがたい」
76			27	ボランティア本部を設置 広島土砂災害で市社協協
77			27	１０６６世帯で断水続く 広島土砂災害 市が給水車
78			27	山口の商業施設が義援金募る 広島土砂災害 陸自山口の隊員は被災地入り
79			27	広島土砂災害で風呂を無料開放 安佐南区の高齢者施設
80			27	ボランティア拠点を２４日閉所 岩国豪雨被害で市社協
81			27	健康保険証の提示を免除 広島土砂災害被災者の受診 中国四国厚生局が通知
82			30	希望つなぎ捜索続く 広島土砂災害【写真特集】
83			32	天変 教訓は生かされたのか <上>（後編） 濁流後の勧告「なぜ」 住民への情報伝達も後手 広島土砂災害
84			32	朝夕の国道５４号渋滞 可部線（緑井－可部間）復旧めどたたず 広島土砂災害

85		32	被災地に空き巣２件 広島土砂災害 警察官名乗り訪問も
86		32	義援金受け付け相次ぐ サンフレや企業・自治体 広島土砂災害
87		32	昭和初期まで土砂災害が頻発 広島市安佐南区山本地区 住民「もう被害ないと…」
88		32	森下洋子さん「少しずつでも元気になって」 広島土砂災害
89		32	両陛下が静養取りやめ 広島土砂災害に配慮 知事にお見舞いも
90		32	激しい雨の恐れ 広島県内
91		32	オープンキャンパス延期 広経大、広島土砂災害に配慮
92		33	捜索難航「無事でいて」 広島土砂災害 巨岩切断に手間取る 見守る家族ら悲痛
93		33	１１月出産心待ちの新婚…広島土砂災害で不明 湯浅さん夫妻、７月転入したばかり
94		33	２歳・１１歳の兄弟通夜に長い列 広島土砂災害
95		33	同級生「明るい高校球児」 広島土砂災害不明の鳥越君 今夏も活躍
96		33	医療チーム本部長「条件次第で生存も」 望み託すＤＭＡＴ 広島土砂災害
97		夕刊	１ 不明者の捜索再開 広島土砂災害 前夜から断続的雨 二次災害警戒し活動
98		夕刊	１ 広島土砂災害を激甚指定へ 政府
99		夕刊	１ 民主幹事長、広島土砂災害視察へ来広
100		夕刊	２ ３日目…募る焦り 広島土砂災害【写真特集】
101		夕刊	３ 「雨の音がトラウマに」 広島土砂災害 警報発表…眠れぬ夜 長引く避難にいら立ちも
102		夕刊	３ ２５００人態勢で捜索継続 広島土砂災害 不安定な天候 互いに注意
103		夕刊	３ 安佐南区など３４６世帯の断水続く 広島土砂災害 安佐北は全復旧 停電７００戸の復旧難航
104		夕刊	３ あす午後に再び雷雨か 広島地方気象台
105		夕刊	３ ＪＲ呉線三原一広で運転見合わせ
106	8月23日	朝刊	１ 死者４１人・不明４７人 広島土砂災害 「７２時間」捜索正念場 断続的な雨で２２５７人避難
107		朝刊	１ 天変 教訓は生かされたのか <中>（前編） 猛烈な雨、硬い岩も土石流に 広島土砂災害
108		朝刊	１ 亡くなった方々 広島土砂災害
109		朝刊	２ 土石流の幅最大４０メートル 広島土砂災害の安佐南区八木地区 国交省調査 「仮の砂防ダム」設置決定
110		朝刊	２ 広島土砂災害を激甚災害指定へ 政府 非常災害対策本部を設置
111		朝刊	２ 馬総統の弔意を首相に伝達 広島土砂災害 台湾から帰国の自民・河井氏
112		朝刊	２ 首相あす現地視察 広島土砂災害
113		朝刊	２ 民主幹事長が視察 広島土砂災害
114		朝刊	３ 天変 教訓は生かされたのか <中>（後編） 山頂に豪雨で被害拡大 広島土砂災害 「多分野協力し対策を」
115		朝刊	３ 山裾の住宅に被害集中 広島土砂災害 ７０年代以降、宅地確保へ団地造成
116		朝刊	３ 「平成２６年８月豪雨」と命名 西日本各地の記録的大雨で気象庁
117		朝刊	４ 広島土砂災害の義援金受け付け始まる 広島県や府中・庄原・安芸高田市
118		朝刊	４ 日赤支部三原なども義援金受け付け開始 広島土砂災害
119		朝刊	６ 社説 危険箇所の認識 警戒区域指定急がれる
120		朝刊	７ 広場 災害へ備え 必要実感
121		朝刊	７ 広場 救助支える近隣情報
122		朝刊	９ 「必要な物は切らさない」 被災地近くのホームセンター・スーパー 広島土砂災害 長靴・スリッパ品薄も 店舗間融通や随時発注
123		朝刊	９ マツダ車イベントは中止 広島土砂災害 協力メーカー、配布品などを寄付
124		朝刊	１８ 募金活動や表章を着用 広島土砂災害でサンフレ
125		朝刊	１９ 被災者の入場券、６試合払い戻し 広島土砂災害でカープ
126		朝刊	２２ 避難促す基準見直し 広島土砂災害で松井市長 勧告遅れ踏まえ方針

127		22	避難勧告、早期発令の徹底を 島根県が全市町村指示 広島土砂災害受け
128		22	中国地方で全面的支援 知事会会長の平井・鳥取知事強調 広島土砂災害
129		24	再び大雨 復旧の壁に 広島土砂災害の安佐北区 ボランティア中止 「少しでも早くかに」
130		24	被災地支援へ往復バス運行 広島土砂災害 28日に福山市社協
131		25	県・市営住宅を貸し出し 広島土砂災害 自宅「全・半壊」対象に無料
132		25	避難所はいま 堅い床…お年寄り「腰が痛い」 広島土砂災害 市がマット配布
133		25	周南市など消防援助隊が捜索開始 広島土砂災害 陸自山口隊員も現地入り
134		25	老人施設、避難高齢者を無料受け入れ 広島土砂災害 市連盟が利用呼び掛け
135		26	島根県内からも支援の輪 広島土砂災害 応援出動や募金箱設置
136		26	東広島社協が職員派遣 広島土砂災害 呉市も支援策決定
137		26	大雨でＪＲ呉線運休
138		30	間一髪…必死の脱出 広島土砂災害・避難者の証言 父の教え「裏山は安全」／において土石流の予兆
139		30	安佐南・安佐北区にボランティア拠点 広島土砂災害で市社協開設【注記あり】
140		30	物資提供や通信料免除 企業の支援広がる 広島土砂災害
141		30	カーブ選手・ファンも支援の輪 広島土砂災害 義援金や黙とう
142		30	土砂に長靴ずぶずぶ 広島土砂災害・捜索活動同行ルポ 安佐南区八木
143		30	ＪＡＦへの車救援依頼１３８件 広島土砂災害の１９日夜から２０日夜
144		30	安佐南区中心に２６７世帯断水続く 広島土砂災害
145		30	月末ごろまで大雨続く恐れ 気象庁
146		30	夕から夜に雨や雷雨か 広島地方気象台
147		30	地元企業相次ぎ義援金寄付 広島土砂災害で広島市に
148		31	捜索、時間との闘いに 広島土砂災害 強い雨で再三中断 天仰ぎ「もどかしい」
149		31	映像制作で優れた才能 広島土砂災害・犠牲の戸川蛍さん 大学の非常勤助教
150		31	復旧作業に「地域差」 広島土砂災害 傾斜地住民から不満の声
151		夕刊	1 捜索全力「一刻も早く」 「７２時間」超え切迫感増す 広島土砂災害 死者４２人・不明４８人
152			3 ボランティア続々集う 広島土砂災害後で初の週末 復旧願ひシャベル手に被災地へ
153			3 「必ず助ける」現場に響く 広島土砂災害
154	8月24日	朝刊	1 なお４１人不明…懸命捜索 広島土砂災害 死者は４９人 特殊救助隊被災地入り ボランティア１３００人
155			1 天変 教訓は生かされたのか <下>（前編） 避難を強く勧めていたら 雷雨猛烈で出るべきか迷う
156			1 亡くなった方々 広島土砂災害
157			2 ゲリラ豪雨の予測システム構築へ 政府、積乱雲を早期検知
158			2 交付税を一部前倒し支給 広島土砂災害の市を支援 総務相が視察し表明
159			3 天変 教訓は生かされたのか <下>（後編） 夜間避難…難しい判断 広島土砂災害 悩む自治体・住民 指示待ち自戒も
160			3 「西谷」の気圧配置が要因 広島土砂災害 湿った空気が流れ込む
161			3 広島土砂災害で１４カ所にセンサー 県・国交省設置へ 土石流を検知
162			5 ぐらし掲示板・広島土砂災害 土砂・被災ごみを広島市回収
163			5 ぐらし掲示板・広島土砂災害 １７０世帯なお断水
164			7 広場 土石流 命懸けの避難
165			7 広場 各自が身守る行動を
166			11 体調維持を最優先に 「避難所での留意点」渡邊教授（日赤広島看護大）に聞く 広島土砂災害
167			21 Ｊ２岡山が広島土砂災害義援金募集へ
168			25 避難所はいま 子どもら「体動かしたい」 広島土砂災害 我慢や遠慮…曇る表情

169			25	身元不明女性の似顔絵を公開 広島土砂災害で県警
170			26	支える 力を合わせ 広島土砂災害【写真特集】
171			28	避難所の被災者、心の傷は日々深く 広島土砂災害 県はケアチーム派遣
172			28	サンフレ、広島土砂災害で義援金募金 「がんばろう広島」合言葉に支援活動
173			28	不明者名公表も検討 国・広島県・市 安否確認急ぐ 広島土砂災害
174	8月25日	朝刊	1	広島土砂災害の現場、砂防ダム計画していた 国、9基予定も完成ゼロ 危険性は認識
175			1	亡くなった方々 広島土砂災害
176			1	降雨・土砂が搜索阻む 広島土砂災害 死者50人・不明38人に
177			1	土砂災害防止法の改正方針固める 政府 警戒区域指定促す
178			2	豪雨頻発で対策急務 土砂災害防止法 「自治体の対応検証を」
179			2	砂防ダムの老朽化対策・監視強化も 土砂災害防止法
180			2	土石流センサーを設置 広島市安佐南区に中国地方整備局
181			2	生活道の土砂撤去へ「丸」 広島土砂災害 政府の非常対策本部
182			2	首相の現場視察、悪天候で延期 広島土砂災害 きょう広島入り
183			3	「住」の不安 解消へ一歩 広島土砂災害 市が仮設建設を準備 公営住宅も入居受け付け開始
184			5	くらし掲示板・広島土砂災害
185			6	広場 夜中の避難 迷う判断
186			6	広場 京都から被災地応援
187			7	「共生」の心大切に 善光寺大本願 鷹司上人に聞く 平和や復興…絆が力
188			17	被災高齢者は施設を頼って 広島土砂災害 「福祉避難所」などの特養でも受け入れ 持病悪化や認知症進行懸念 ストレスで不眠も 安心して疲れ癒やす場に 風呂や食事を提供
189			21	避難所はいま 豚汁・冷菓でひと息 広島土砂災害 炊き出し・差し入れ相次ぐ
190			21	「地域のため」力惜まず 広島土砂災害 犠牲者の宮本さん（可部東）
191			21	ボランティアに憩いの場 広島土砂災害 八木の陰山さん 自宅前に椅子置き談笑
192			21	呉出身の救助隊員「早い発見に力」 警視庁の2人 広島土砂災害
193			22	現場で 避難所で 広島土砂災害【写真特集】
194			24	学校再開…避難所どうなる 広島土砂災害 11小に1264人 登校日中止や授業開始延期も 被災者生活に配慮
195			24	梅林小で無料診察 広島土砂災害 地元開業医の桑原さん 「非常時は地域に寄り添う責任」
196			24	天候不順でボランティア活動中止 広島土砂災害の安佐南区
197			24	昼過ぎから雨や雷雨の恐れ 広島県全域
198			25	流されたアパート 新婚・母娘…どこへ 広島土砂災害 新築に4世帯8人
199			25	まちづくり「遺志継ぐ」 広島土砂災害 市都市交通部長・竹内さん葬儀 同僚ら悼む
200		夕刊	1	広島土砂災害の不明者名を公表 広島市、28人の情報募る 死者は52人に
201			1	首相、被災者支援を強調 広島土砂災害 知事・市長と面会
202			1	行方不明の方々のお名前 広島土砂災害
203			3	「今日こそ」願い背に搜索 広島土砂災害 ボランティア活動再開
204	8月26日	朝刊	1	不明28人の名前公表 広島土砂災害で市が情報募る 死者58人に
205			1	首相「広島土砂災害の支援に全力」 現場視察後、激甚指定を表明
206			1	行方不明の方々 広島土砂災害
207			2	異常気象への対応検討 広島土砂災害視察の首相 避難者への激励も
208			2	首相「初動含め全力尽くしている」 ゴルフ批判かわす 広島土砂災害
209			2	政府は統括現地本部の設置を 民主が緊急申し入れ書 広島土砂災害
210			2	政府の非常災害対策本部、広島市役所に移転決定 広島土砂災害

211		2	自民、広島土砂災害視察を自粛 県選出議員に限定
212		3	治山ダムの一部崩壊 広島土砂災害の安佐南区八木 コンクリートが流出 家屋直撃の情報も
213		3	土石流は秒速30～40メートルか 広島土砂災害の安佐南区八木 菅・広島工大教授が衛星画像分析 発生は住宅から590メートル
214		4	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
215		4	企業の支援続々 くらし掲示板・広島土砂災害
216		4	3カ月無償で住まい提供 くらし掲示板・広島土砂災害
217		4	自動車取得税を全額免除 くらし掲示板・広島土砂災害
218		4	島根のスキー場系ホテル、1泊2食無料招待 くらし掲示板・広島土砂災害
219		4	無料託児を開始 くらし掲示板・広島土砂災害
220		4	免許再交付で避難所を巡回 くらし掲示板・広島土砂災害
221		4	募金箱を設置 くらし掲示板・広島土砂災害
222		7	広場 避難準備情報 推進を
223		7	広場 現地で妹の無事確認
224		7	広場 被災地空き巣に憤り
225		9	停電復旧なお時間 広島土砂災害 悪天候で作業中断 路上の岩や砂で重機使えず
226		19	ヤンキース黒田が市に義援金 広島土砂災害
227		22	警戒区域指定を前倒しへ 山口県、広島土砂災害受け
228		22	広島土砂災害の被災者に空室提供 山口県が県営12戸
229		23	岡山県内でも広がる義援金の輪 広島土砂災害
230		24	県内外の支援頼もしく 広島土砂災害の安佐北区 3日間延べ1725人活動
231		25	避難所はいま 「ベット連れ」にも心配り 市動物管理センターなど餌調達や一時預かり 広島土砂災害
232		25	自衛隊風呂で潤い／無料自販機を設置 広島土砂災害
233		25	山口県職員30人を被災地派遣 広島土砂災害
234		25	空き巣・詐欺に注意…避難者に声掛け 県警パト隊結成 広島土砂災害
235		26	ボランティアバス派遣へ 東広島・江田島の社協 家財搬出や泥除去 登録受け付け 広島土砂災害 広がる支援の輪
236		26	広島土砂災害に配慮し花火大会中止 安芸高田で30日予定
237		26	広島市に災害見舞金100万円送る 東広島市 広島土砂災害
238		28	暮らし再建急ぐ 広島土砂災害【写真特集】
239		30	救援物資のニーズ探る 手軽な移動手段・勉強道具・離乳食… 希望の品が多様化 広島土砂災害
240		30	亡くなった方々 広島土砂災害
241		30	簡易間仕切りを避難所に寄付 「米プリツカー賞」の建築家・坂さん 広島土砂災害
242		30	有名2バンドがボランティア 広島土砂災害
243		30	ホノルルの有志が被災者支援募金 広島土砂災害
244		30	避難所4校の始業日延期 広島土砂災害
245		30	安佐南・安佐北区に特化し予報 広島地方気象台HP 広島土砂災害
246		31	不明者名簿に思い複雑 広島土砂災害 友見つけ「やはり」 胸なで下ろす人も
247		31	いつも笑顔…夢は栄養士 広島土砂災害・犠牲の木原未理さん 勉強に励む女子高生
248		31	不明者氏名公表、情報交錯し遅れ 広島土砂災害 個人情報保護も影響
249		31	梅林小避難所に「元気」壁新聞 児童・生徒2人が発行 広島土砂災害
250		31	広島土砂災害の義援金装う不審電話 安佐南区の高齢女性方に 広島県警「注意を」
251	夕刊	1	死者60人・不明26人に 広島土砂災害・発生7日目 捜索続く
252		3	可部線復旧は土砂との格闘 安佐南区 通勤通学向け代行バス増便 広島土砂災害

253			3	避難民家また空き巣 広島土砂災害 安佐北署が注意呼び掛け
254	8月27日	朝刊	1	広島土砂災害が発生1週間 死者66人・不明21人 捜索長期化へ
255			1	亡くなった方々 広島土砂災害
256			1	大量土砂どう処理 広島土砂災害で市苦慮 仮置き場は近く満杯／最終処分地探しも難航予想
257			2	土石流は最大時速144キロ 流出土砂50万立方メートル 広島土砂災害 都市部では国内最大級
258			2	土石流、50ヵ所で同時多発か 広島土砂災害
259			2	野党9党、防災対策で連携探る 広島土砂災害で協議
260			2	ゴルフ批判の首相の対応支持 石破幹事長、広島土砂災害で
261			2	交付税を前倒し配分 広島土砂災害で総務省 広島市に11月分の一部
262			2	広島市庁舎に政府現地対策本部を移設 広島土砂災害
263			3	広島土砂災害、課題浮き彫りの1週間 避難生活・避難勧告・警戒区域・安否確認
264			5	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
265			5	山口で支援の動き相次ぐ くらし掲示板・広島土砂災害
266			5	子どもの心のケアチーム派遣 くらし掲示板・広島土砂災害
267			5	広島市が空き室情報公表 くらし掲示板・広島土砂災害
268			5	弁護士会が無料電話相談 くらし掲示板・広島土砂災害
269			5	建築士が無料相談窓口 くらし掲示板・広島土砂災害
270			5	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
271			5	床上浸水の家屋向けに消毒液無料配布 くらし掲示板・広島土砂災害
272			5	湯来ロッジが入浴券提供 くらし掲示板・広島土砂災害
273			8	社説 土砂災害1週間 住民本位の生活再建を
274			9	広場 避難所の確保 迅速に
275			9	広場 亡き父へ恋しき募る
276			9	広場 支援の輪に絆を実感
277			11	車や家電…点検に全力 広島土砂災害1週間で企業・団体 支援を急ぐ 建物被害の相談窓口も
278			19	安全優先で再建サポート ボランティアの知識・心構え 広島土砂災害 まめな休憩と水分補給／単独行動避け声掛けを
279			20	ヤクルト選手会が100万円の義援金 広島土砂災害
280			20	ヤフオクドーム・コボスタ宮城で黙とう 広島土砂災害
281			22	J2愛媛も募る 広島土砂災害義援金
282			22	J1甲府が広島土砂災害義援金
283			25	井原地区消防が職員派遣 広島土砂災害
284			26	被害広範囲で復旧遅く 土石流集中の安佐北区1週間 「今でも夜が怖い」 広島土砂災害
285			26	避難勧告の発令基準見直しへ 福山市長「早い段階で対応」 広島土砂災害踏まえ
286			27	避難所はいま 段ボールベッド搬入始まる 広島土砂災害 計400台を予定 「床で寝る痛み…ずいぶん楽に」
287			27	空き巣・不審電話が相次ぐ 広島土砂災害
288			27	三入東・大林小で1日授業開始 広島土砂災害の避難所 八木・緑井・梅林は未定
289			30	深い傷…心を合わせ 広島土砂災害1週間【写真特集】
290			32	「あの日」から1週間 広島土砂災害 会いたい・笑顔を見たい(下)
291			32	ドキュメント災害1週間⑦ 広島土砂災害
292			32	被災地支援へたる募金開始 広島土砂災害 本社など
293			33	「あの日」から1週間 広島土砂災害 会いたい・笑顔を見たい(上)
294			33	ドキュメント災害1週間④ 広島土砂災害
295		夕刊	1	広島土砂災害の死者70人に 3人身元判明で不明18人 一部小学校が再開

296			3	朝会で級友の冥福祈る 広島土砂災害で安佐南区・山本小 校長「心のケアに努める」
297			3	オルガン弾くのが好きだった 緑井7丁目の開田スミ子さん 広島土砂災害の犠牲者
298	8月28日	朝刊	1	土石流と崖崩れ計112カ所 広島土砂災害 76%が警戒区域外 県の指定遅れる 八木・緑井に説明会予定
299			1	亡くなった方々 広島土砂災害
300			1	死者71人・不明11人に 広島土砂災害
301			2	広島市、サミット応募先送り 土砂災害対応で書類作成進まず
302			3	硬い地盤も豪雨で崩壊 広島土砂災害で土木・地盤工学会調査 「全国で起きる恐れ」
303			3	110・119番に通報計900件 広島土砂災害・20日の未明・早朝 受理できぬケースも
304			5	くらし揭示板・広島土砂災害 生活情報
305			5	中電、がれき仮置き場提供 くらし揭示板・広島土砂災害
306			5	歯科医師と衛生士を派遣 くらし揭示板・広島土砂災害
307			5	県東京事務所に全国から支援 くらし揭示板・広島土砂災害
308			5	くらし揭示板・広島土砂災害 企業の支援
309			5	私立保育園58園が乳幼児無料預かり くらし揭示板・広島土砂災害
310			5	3市1町が公営住宅無料貸し出し くらし揭示板・広島土砂災害
311			5	募金呼び掛け くらし揭示板・広島土砂災害
312			5	支援金申請相談など行政書士会が窓口 くらし揭示板・広島土砂災害
313			5	115世帯が公営住宅当選 くらし揭示板・広島土砂災害
314			8	発言交差点 土砂災害 救援活動に奮闘 心意気に涙
315			9	広場 砂防ダム計画進めて
316			9	ヤングスポット 行方不明者 無事願う
317			11	「野菜出荷は当分できぬ」 広島土砂災害 被害6.8ヘクタール 復旧進まず
318			18	広島土砂災害 水戸が義援金 F C東京も
319			19	カープ14選手が義援金募る 広島土砂災害
320			19	オリーロツテで黙とう 広島土砂災害
321			26	自主防災会が復旧に力 安佐北区の大林・三入小学校区 家屋損壊や道路の崩壊 作業支援へ詳細情報 広島土砂災害
322			27	避難所はいま 地域支援に動く被災地店舗 広島土砂災害 洗濯奉仕・無料カレー・店先に水やタオル 「こんな時こそ手助け」
323			27	初任科生も現場で奮闘 県警察学校が90人派遣 広島土砂災害
324			27	古里のため人一倍の汗 陸自隊員・稲荷さん 広島土砂災害
325			27	山口県の緊急消防援助隊10人増員 広島土砂災害
326			28	少ない駐車場…道具持参を 広島土砂災害 現地で支援活動 邑南の団体会長に聞く
327			28	浜田市が全世帯に防災マップ 広島土砂災害受け 益田・江津市は危険箇所確認促す 11市町で募金箱設置
328			28	ボランティアバス 31日から追加派遣 広島土砂災害で東広島市社協
329			28	広島市議会に見舞金26万円贈る 三次市議会 広島土砂災害
330			30	J R可部線、復旧のめど立たず 広島土砂災害 住民の通り道に 孤立世帯に配慮
331			30	土砂直撃でお堂泥まみれ 安佐南の毘沙門堂 天井絵など一変 広島土砂災害
332			30	緑井・八木小は1日から授業 広島土砂災害
333			31	山際のまち 八木ヶ丘団地 <上> 土砂が襲う 消えた営み 爪痕深く 死者・不明7世帯10人 広島土砂災害
334			31	4人の子宝 仲良し家族 両親・次女犠牲の古井家 広島土砂災害
335		夕刊	1	死者72人・不明10人に 広島土砂災害 市営住宅への入居始まる
336			1	土砂災害防止法の早期改正に意欲 衆院特別委で防災相
337			1	地方創生や防災など柱 国交省概算要求 16%増の6兆6869億円

338			3	持ち主待つ思い出の品 広島土砂災害 陸自発見のアルバムや表彰状 返却へ特定急ぐ
339	8月29日	朝刊	1	不安定な土砂が20カ所 広島土砂災害 崩落途中で谷に残留 新潟大教授分析 市街地に迫る
340			1	亡くなった方々 広島土砂災害
341			1	死者72人・不明4人 広島土砂災害 避難勧告は縮小検討
342			2	砂防ダムを緊急整備 国交省 広島土砂災害の安佐南・安佐北区中心
343			2	法改正や復旧支援を 衆参災害対策特別委 広島県関係議員が訴え 広島土砂災害
344			2	特別警報をメール送信 気象庁、来年開始目指す
345			3	流出土砂は出島地区2カ所へ 広島土砂災害 県が広島市の要請受け入れ
346			3	島市長「転居の支援策が必要」 広島土砂災害 居住継続を望まない被災者向け
347			5	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
348			5	ボランティアは服装などに注意を くらし掲示板・広島土砂災害
349			5	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
350			5	土砂運搬業者に高速道無料の証書 くらし掲示板・広島土砂災害
351			5	避難所への問い合わせ用に携帯配備 くらし掲示板・広島土砂災害
352			5	全国から広島市に見舞金 くらし掲示板・広島土砂災害
353			5	広島県公舎を無料貸し出し くらし掲示板・広島土砂災害
354			5	移動手段失った人をタクシー無償輸送 くらし掲示板・広島土砂災害
355			5	庄原・安芸高田議会も見舞金送る くらし掲示板・広島土砂災害
356			5	安芸郡4町も見舞金 くらし掲示板・広島土砂災害
357			5	被害車の整備・廃車など無料相談 くらし掲示板・広島土砂災害
358			9	経済イベント中止相次ぐ 広島土砂災害 被災地支援で繁忙／被害大きく自粛も
359			11	広場 身近な動植物も被害
360			11	広場 壁新聞 避難者に元氣
361			19	動いて防いで「生活不活発病」 広島土砂災害の被災高齢者は注意を
362			21	広島土砂災害で被災者支援を協議 プロ野球選手会とNPB
363			23	C大阪が義援金募集へ 広島土砂災害
364			23	J3鳥取も義援金募集へ 広島土砂災害
365			25	生活再建加速を要請 広島土砂災害で市議会全員協 市対応ただす声も
366			25	防災無線情報を無料電話で 防府市、来年1月めどに開始
367			25	15年度内に警戒区域の指定完了 岡山知事が表明 広島土砂災害受け
368			28	広島土砂災害の被災地にタオル贈る 福山の盈進中高中生 阪神大震災の遺族・加藤さん（広島）が仲介 「誰かのため」思い共鳴
369			28	手作りパンで避難所に笑顔 広島北特別支援学校生がプレゼント 広島土砂災害 「元氣を取り戻して」
370			28	福山市社協がボランティア向け無料バス 広島土砂災害
371			29	避難所はいま 女性目線で気配り支援 安佐南消防団「せせらぎ隊」 広島土砂災害 会社員・主婦ら18人 掃除や物資整理
372			29	夏休み明け…犠牲者悼む 市内の小中で授業再開 広島土砂災害
373			29	公営住宅151戸の入居決定 安佐南区役所で抽選会 広島土砂災害
374			29	下松・光の消防援助隊を派遣 広島土砂災害
375			31	銀座から「カーブ頑張り」 観戦イベント 災害義援金も募る
376			32	山際のまち 八木ヶ丘団地 <中> 開発の末に 路地と急坂が搜索妨げ 規制前で無計画に拡大 広島土砂災害
377			32	ボランティア名簿1600人分を県警に提出 安佐南区社協 広島土砂災害
378			32	本社、災害取材現地支局を開設 広島土砂災害

379		32	昼前から夕方に雨降る地域も きょうの広島県内
380		33	大学生ボランティアが復旧後押し 広島土砂災害 夏休み「力になる」
381		33	幼稚園でお別れ式 広島土砂災害・犠牲の畑中和希ちゃん いつも穏やか優しい子
382		33	受診被災者の3割「不眠」 県精神医療チームまとめ 広島土砂災害
383	夕刊	1	亡くなった方々 広島土砂災害
384		1	不明が残り2人に 広島土砂災害 死者72人は全員身元判明
385		3	仲間照らした笑顔 安佐南区八木で犠牲の富永さん 同級生ら葬儀で涙 誰とでも仲良く／運動神経抜群／同窓会取りまとめ 広島土砂災害
386		10	損害保険協会便り 被災世帯 契約照会が可能
387	8月30日	朝刊	1 亡くなった方々／行方不明の方々 広島土砂災害
388		1	死亡72人全員の身元判明 広島土砂災害 不明2人を集中搜索
389		1	J R可部線が1日運転再開 広島土砂災害
390		2	がれき分別施設を出島に建設 広島土砂災害で市方針 年内完成見通し
391		3	特別警戒区域の指定調査、4割の市町村「まだ」 中国地方 指定完了わずか12市町 (広島土砂災害)
392		3	警戒区域指定への国の関与強化 土砂災害防止法の改正素案
393		5	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
394		5	梅林小避難者に宿を提供 くらし掲示板・広島土砂災害
395		5	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
396		5	被災者の心理相談を受け付け くらし掲示板・広島土砂災害
397		5	被災車の相談会に16人 くらし掲示板・広島土砂災害
398		5	宮島ボートでたる募金始まる くらし掲示板・広島土砂災害
399		5	弔慰・見舞金を支給 くらし掲示板・広島土砂災害
400		5	浅口市も見舞金送る くらし掲示板・広島土砂災害
401		5	江田島市が見舞金送る くらし掲示板・広島土砂災害
402		9	労働局に雇用相談183件 広島土砂災害 「出勤困難」「解雇必要に」
403		10	発言交差点 土砂災害 被災地空き巣 あまりに非道
404		17	生活再建資金どう工面 広島土砂災害 利用可能制度や支援策は
405		21	楽天が広島市に義援金 広島土砂災害
406		21	D e N A選手会も募金活動 広島土砂災害
407		22	広島土砂災害で義援金寄付 ホッケー女子の日豪代表
408		28	避難指示解除されず復旧困った 安佐北区4地区 ボランティア入れず 広島土砂災害
409		29	避難所はいま 東北から恩返し支援 広島土砂災害 米・水など物資や職員派遣 住民「再建へ励みになる」
410		29	災害危険箇所 地図作ろう 尾道市向島の岩子島 意識向上へ住民
411		29	ボランティアへ「良路」表示 八木地区住民が活動気遣う 広島土砂災害
412		29	広島土砂災害の義援金求める詐欺注意 広島市内で不審訪問・電話
413		29	絵本読み聞かせ心むひととき 佐東公民館(安佐南区) 広島土砂災害
414		30	警戒区域を入念点検 小用地区で江田島市 広島土砂災害受け
415		30	広島土砂災害で生徒会が支援募金 呉の横路中
416		32	山際のまち 八木ヶ丘団地 <下> 明日の不安 半数避難で再建険しく 地域衰退に追い打ち 広島土砂災害
417		32	義援金が2億円突破 中国新聞社会事業団 広島土砂災害
418		33	命守った瞬時の判断 広島土砂災害 異常察知し避難所へ走る／高所や頑丈な場所選ぶ
419		33	一人一人判断を／いち早く遠くへ 避難判断で識者談話 広島土砂災害
420	夕刊	1	広島土砂災害の避難勧告・指示縮小へ きょうにも市 安佐北区中心

421			3	母娘、天国でも仲良くね 広島土砂災害で奪われた新生活 三好千賀子さん・麗奈さん葬儀 早すぎる死を悼む
422			3	警視庁の救助犬奮闘 広島土砂災害 6人見つける手掛かりに
423	8月31日	朝刊	1	治山・砂防ダムの8割、土砂流木で満杯 広島土砂災害の3地区 いつあふれるか…住民不安
424			1	避難勧告・指示 きょう一部解除 広島土砂災害
425			2	「二次災害の危険・警戒」計59% 広島土砂災害 国交省が被災地の溪流調査
426			5	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
427			5	公営住宅が第2期受け付けへ くらし掲示板・広島土砂災害
428			5	損害保険料の支払い猶予 くらし掲示板・広島土砂災害
429			7	広場 情報乏しい避難生活
430			25	被災者支援へ表ら募金活動 日本女子プロゴルフ協会 広島土砂災害
431			33	30年の地に別れ仮住まいで再開 3棟全壊の障害者施設「八木園」 広島土砂災害 8日から2カ所に 職員・家族ら荷物搬出
432			33	避難所はいま 北海道の味に笑顔広がる 建設会社社員17人が安佐南区3カ所訪問 広島土砂災害
433			34	みんなの力がつながる 広島土砂災害のボランティアたち【写真特集】
434			36	地域の患者に恩返し 安佐南区緑井でかつて開業・那覇の鍼灸師 募金活動に力 広島土砂災害
435			36	亡くなった方々／行方不明の方々 広島土砂災害
436			36	現病院を避難所に活用 あす移転の広島共立病院 数百人受け入れ可能 広島土砂災害
437			37	ボランティア拠点苦悩 広島土砂災害 予定上回る希望者 受け付け漏れ・長時間待ちも
438			37	雷雨の中、新聞届けに 広島土砂災害で行方不明・西田さん
439			37	登山・しの笛…熱心に活動 広島土砂災害で行方不明・大屋さん

SN	日付	朝刊／夕刊	ページ数	見出し
440	9月1日	朝刊	1	避難指示・勧告を解除 安佐北全16地区と安佐南2地区 広島土砂災害 発生12日目
441			1	二次災害恐れ慎重判断 広島土砂災害の避難指示・勧告解除
442			4	被災者宿泊所を神田山荘に一本化 くらし掲示板・広島土砂災害
443			4	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
444			5	社説 土砂災害 国挙げての対策強化を
445			6	広場 ベットと避難 理解を
446			6	広場 店舗の気遣いに感謝
447			10	広島土砂災害でDeNA寄付
448			17	防災の日 地域のリスクを地図で認識 細坂町内会（広島市安佐南区）に作り方学ぶ 多くの住民巻き込んで／情報の定期的更新が課題
449			19	岡山市移住希望向けに学校・住宅見学ツアー 県外の育児家族対象に来月18・19日 市が初企画
450			20	自主防災組織への支援を強化 東広島市 資器材貸し出し限度額を引き上げ 訓練・連携充実も
451			21	韓国の駐日大使 被災者に励まし 広島土砂災害の梅林小
452			21	埋め尽くす汚泥相手に全力作業 広島土砂災害・ボランティア体験ルポ
453			21	避難所はいま 授業再開へ清掃に汗 広島土砂災害で住民や教員ら 校舎・敷地内で土砂まみれの衣類・靴洗濯
454			24	夕方に強い雨 広島市安佐南・安佐北区の予報
455			24	JR可部線きょう再開 試運転で異常なし 広島土砂災害
456			24	学生先生が児童サポート 再開見通せぬ梅林小に「学びの場を」 広島土砂災害 きょうから塾とも連携
457			24	亡くなった方々／行方不明の方々 広島土砂災害
458			25	ソフト部の投手で活躍 広島土砂災害で犠牲・会社員の佐々木秀敏さん
459			25	熱闘10時間たたえ合う 高校軟式野球の崇徳－中京 広島土砂災害の被災地から応援も
460			25	「やっとわが家に」 被災者が安堵の帰宅 広島土砂災害で避難一部解除 安全不安で「残留」も
461		夕刊	1	JR可部線が運行再開 広島土砂災害 避難所の小学校も始業
462	9月2日	朝刊	3	学校がJRが…日常へ一歩 広島土砂災害 住民ほっとした表情
463			1	JR可部線12日ぶり復旧 広島土砂災害 避難所の5小学校も授業再開
464			1	「1時間70ミリ」予報見逃す 広島土砂災害 市がファクス放置 避難勧告の2時間以上前
465			2	7市町がサミット名乗り 広島は災害で誘致活動中断
466			3	安佐南・安佐北区限定の大雨情報も 政府現地本部が仕組み検討 広島土砂災害
467			3	復旧優先し「防災の日」訓練相次ぎ中止 広島市など 広島土砂災害
468			3	路上の土砂87%撤去 広島土砂災害の八木・緑井地区 用水は7割復旧
469			3	満杯砂防ダムの土砂除去へ 広島土砂災害 県が週内に作業着手
470			5	廿日市市が募金箱設置 くらし掲示板・広島土砂災害
471			5	賃貸住居を無償貸し出し くらし掲示板・広島土砂災害
472			5	困りごとへの福祉サービス電話相談 くらし掲示板・広島土砂災害
473			5	被災者にカーテンを無償提供 くらし掲示板・広島土砂災害
474			5	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
475			5	廃車手続きの無料相談会 くらし掲示板・広島土砂災害
476			5	盈進中・高から義援金107万円 くらし掲示板・広島土砂災害
477			5	行政支援策を電話で説明 くらし掲示板・広島土砂災害
478			5	ワイヤセンサーの土石流警報を聞く会 くらし掲示板・広島土砂災害
479			5	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
480			9	広場 災害機に生活見直す

481		11	ひとネット 段ボール製ベッドで貢献 広島
482		16	広島土砂災害などに義援金112万円 J1徳島
483		17	オリックス森脇監督が義援金 広島土砂災害
484		17	カープOB会 10万円を寄付 広島土砂災害
485		20	島根県の独自制度が利用ゼロ 特別警戒区域の住宅補強支援 利用しても自己負担8割 広島・山口県は未整備 (広島土砂災害)
486		22	力になりたい…生徒動く 広島土砂災害で岩国・高水高付中 校内で義援金集め
487		22	三入小の復旧本部、授業再開で移転 広島土砂災害の安佐北区 500メートル離れた公園に 4小学校で始業
488		23	県高校サッカー6試合会場を変更 広島土砂災害で二次災害を考慮
489		23	臨時給水栓で住民に潤い 広島土砂災害 断水続く八木・緑井地区
490		23	空き巣被害が7件 広島土砂災害の安佐南・安佐北区
491		23	周南市消防、救助活動を市長に報告 広島土砂災害で現地派遣
492		23	防犯バトや清掃 八木住民が団結 広島土砂災害
493		23	避難所はいま 筋力低下・口の病気防げ 広島土砂災害で理学療法士・歯科医ら指導 家事・運動機会減り歯磨き不十分に
494		24	被災地支援の方針協議 広島土砂災害で出雲ボラセン 13日に市内で街頭募金も
495		26	墓石800基…無残 広島土砂災害の緑井墓苑 埋没や倒壊流失 復旧の見通し立たず
496		26	広島共立病院の旧建物を避難所活用へ 広島土砂災害で市
497		26	亡くなった方々／行方不明の方々 広島土砂災害
498		27	「産条例」対象外で崩落対策さず 広島土砂災害・兄弟犠牲の民家
499		27	在校生犠牲に朝会で黙とう 城山北中で授業再開 広島土砂災害
500		27	安堵「日常戻った」 5小学校とJR可部線再開 広島土砂災害 土のう脇歩いて登校 車窓からは災害の爪痕
501		夕刊	1 避難指示全々と勧告の一部、安佐南区3地区で解除 広島土砂災害
502			3 思い出の品の泥拭う 広島土砂災害 持ち主捜し県警公開へ
503	9月3日	朝刊	1 避難指示を全て解除 広島土砂災害 勧告は一部継続
504			1 防災スピーカーが未設置 広島土砂災害の安佐南区八木 避難情報伝わらず
505			3 住民に災害危険箇所の情報を 国交省が都道府県などに要請 (広島土砂災害)
506			3 県内市町に保健師派遣の協力依頼 広島土砂災害で県 長期の被災者ケアで
507			3 「警戒区域」指定前公表へ 早期周知へ広島県検討 広島土砂災害
508			4 広島土砂災害・特集 亡くなった方々／行方不明の方々
509			4 広島土砂災害・特集 豪雨に襲われた街 住民が語る8月20日
510			4 広島土砂災害・特集 8・19～8・20ドキュメント【気象状況・県市の対応・119番通報】【主な被害状況】
511			5 福山市が見舞金 ぐらし掲示板・広島土砂災害
512			5 県社労士会が相談窓口開設 ぐらし掲示板・広島土砂災害
513			5 廿日市市も見舞金 ぐらし掲示板・広島土砂災害
514			5 ぐらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
515			5 東北高が義援金13万円 ぐらし掲示板・広島土砂災害
516			5 ぐらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
517			9 農地被害は19.2ヘクタール 広島土砂災害 ハウスも損壊
518			9 商工会124事業所が被災 広島土砂災害 関係者9人死亡 廃業検討も
519			10 言 災害とコミュニティー放送 FMハムスター学生副リーダー・岡野耕兵さん 「人ごとにならない」が原点
520			11 広場 コイV 被災者の希望
521			17 J2愛媛、広島土砂災害に義援金

522		20	子どもの心身不調どうケア…広島土砂災害 2 週間 寄り添う親も被災者。大きなストレスにさらされ… 全国で支援活動の N P O 代表・菅原さんに対策聞く
523		21	子どもの心身不調どうケア…広島土砂災害 2 週間 甘え・夜泣き・物音怖がり… 異変見逃さぬように 叱らず触れ合い P T S D にも注意必要
524		27	井原市社福協が街頭募金活動 広島土砂災害
525		28	被災・寺山公園の復旧作業始まる 広島土砂災害の安佐北区 犠牲の宮本さんの遺志継ぎ住民ら
526		29	三原-広島で往復ボランティアバス 市社協が 1 2 日に無料運行 広島土砂災害
527		29	土砂災害支援に慈善コンサート 広島・廿日市の 4 小
528		29	避難所はいま 朝食にジュース 野菜不足を解消 市、栄養士派遣も 広島土砂災害
529		29	大量土砂や廃棄物…仮置き場の公園に次々 広島土砂災害 「被災者のため」理解求める
530		30	広島土砂災害でボランティアバス 呉のセンターが毎週日曜運行
531		30	島根県美郷の陶芸家が支援の作陶展 広島土砂災害の被災カフェ教え 橋本さん夫妻 西区で 1 2 日から 「文化の拠点復活を」
532		32	雷伴う強い雨も きょうの広島県
533		32	中京高が募金活動 延長 5 0 回の友情 軟式野球部「崇徳に感謝」 広島土砂災害
534		32	ボランティア本部移転 広島土砂災害で市社協 現場近くで運営効率化
535		33	避難に区切りでほんと 広島土砂災害で全指示解除 「体力限界だった」「雨まだ怖い」
536		33	思い出の品清めいつか持ち主に 広島土砂災害 県警 H P で情報発信へ
537		夕刊	1 8 0 0 人なお避難生活 広島土砂災害の発生 2 週間 雨予報に警戒続く
538			3 梅林小、来週にも授業再開 広島土砂災害で市内最大の避難所 市が教室片付け依頼
539	9月4日	朝刊	1 広島土砂災害で緊急メール配信せず 広島市 初動態勢を検証へ
540			3 山谷新防災相、早期広島入りの意向 広島土砂災害
541			3 早期の復旧支援へアピール採択 徳島で中国四国サミット (広島土砂災害)
542			3 8 月の西日本「異常気象」 中国 5 県 3 6 地点の降水最多 気象庁検討会 (広島土砂災害)
543			3 周辺部も「危険度」判定 広島土砂災害で国交省まとめ 新たに 1 4 1 渓流を調査
544			7 島根県営住宅は 1 0 戸無料貸し出し ぐらし掲示板・広島土砂災害
545			7 尾道市営住宅を無償で半年提供 ぐらし掲示板・広島土砂災害
546			7 6 日に無料託児 ぐらし掲示板・広島土砂災害
547			7 武田中・高有志が義援金 ぐらし掲示板・広島土砂災害
548			7 相談 Q & A を H P に掲載 広島司法書士会 ぐらし掲示板・広島土砂災害
549			7 章栄不動産、被災者無償入居を追加募集 ぐらし掲示板・広島土砂災害
550			7 ぐらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
551			7 民間住宅の入居受け付け ぐらし掲示板・広島土砂災害
552			7 ぐらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
553			8 広島の 2 1 団体が合同防災訓練 商工センター
554			9 ガソリン価格が 7 週連続下落 中国地方、高値続く
555			11 広場 可部線復旧は第一歩
556			11 広場 防災・避難 家族で会議
557			21 ソフトバンク選手会が義援金 広島土砂災害
558			27 大型土のう積み仮ダム設置へ 広島土砂災害で国交省 1 8 か所で急ピッチ
559			27 特別警戒区域に指定せず 広島土砂災害の八木 3 丁目の大半 発生前に県方針 基礎調査で判断
560			30 A O 入試控え復旧急ぐ 広島土砂災害の広島文教女子大 近隣住民も協力
561			30 大半が帰宅…片付けに汗 広島土砂災害 避難指示・勧告解除の安佐北区 自宅損壊で帰れぬ人も
562			31 広島土砂災害へ世羅から支援 町社協が往復バス運行 1 2 ・ 2 3 日

563			31	槇野選手「頑張って」 元サッカー日本代表 梅林小を訪問 広島土砂災害
564			31	防災情報メール登録を呼び掛け 広島市
565			31	大学生ら有志が勉強手助け 広島土砂災害 梅林小児童110人に
566			31	避難所はいま 授業再開へ被災者の移動提案 梅林小で広島市説明会 賛同や戸惑い 広島土砂災害
567			33	女性生かして／防災に投資を 第2次安倍改造内閣に中国地方の声
568			34	八木用水に土砂流入続く 広島土砂災害の安佐南区 水あふれ復旧の妨げ
569			35	一部集会所は避難に適さず 広島土砂災害で2カ所全壊 住民周知にも課題
570			35	夜の雨に募る不安 広島土砂災害 避難所に戻る被災者も
571		夕刊	1	強い雨で捜索中断 広島土砂災害 JR緑井一可部間は一時運転見合わせ
572			3	強い雨「あの日思い出す」 広島土砂災害の被災者 復旧作業の遅れ懸念も
573			3	「息子の最期の場所かも」 広島土砂災害で犠牲・広藤さん母 車撤去に手合わせ
574	9月5日	朝刊	1	復旧計画きょう策定 広島土砂災害
575			1	雨水管被害で水あふれる 28カ所で損壊や泥詰まり 広島土砂災害
576			3	山谷防災相「被災者支援に尽力を」 広島土砂災害で対策本部会合
577			3	義援金1次分を近く配分 広島市方針 7億5000万円集まる 広島土砂災害
578			3	住宅修理費の補助制度の広報強化を 日弁連会長が要望 広島土砂災害
579			3	3時間雨量150ミリ範囲、被災地域と一致 広島土砂災害 京都大・松四准教授が分析
580			3	「緊急メールは今後も活用せず」 広島土砂災害で市長 「あくまで広域災害用」 他市では柔軟対応例
581			4	社労士事務所が無料電話相談 くらし掲示板・広島土砂災害
582			4	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
583			4	広島労働局が相談窓口 くらし掲示板・広島土砂災害
584			4	イオン各社が多彩な支援 くらし掲示板・広島土砂災害
585			4	宮城のカキ業者が義援金 くらし掲示板・広島土砂災害
586			4	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
587			11	広場 災害出動 次男案じる
588			17	南相馬の友から復興エール 広島土砂災害 原発事故後に広島の「応援隊」と交流
589			21	日本サッカー協が義援金200万円 広島土砂災害
590			26	可部火葬場の炉、土砂で埋まる 広島土砂災害で裏山崩落 復旧めど立たず
591			27	夏祭りおひねりを被災地に 世羅の大田振興協が寄付 広島土砂災害
592			27	避難所はいま 長引く疲れに足湯の癒やし 梅林小に神戸の団体設置 広島土砂災害
593			27	生活苦・心の問題に弁護士ら助言 9・10日に広島市南区
594			27	民間住宅の入居受け付け 広島市が説明会 被災者は真剣に条件確認 「やっと仮住まい」「職場がある区内を」 広島土砂災害
595			27	女性の地位向上に力 広島土砂災害で犠牲・八木の藤井弥生さん
596			30	避難所の梅林小、8日にも始業 広島土砂災害
597			30	県外ボランティアも受け付けスタート 広島土砂災害 団体限定で市社協本部
598			30	支援物資さばききれず 広島土砂災害 古着や食品山積み 広島市「送る前に連絡を」
599			31	続く雨で復旧停滞 広島土砂災害 「怖くて眠れない」 再発懸念で自主避難も
600		夕刊	1	梅林小が8日授業再開 広島土砂災害 避難者の一部は旧病棟に移動へ
601			1	まず豪雨農業被害を「激甚」指定 政府決定 (広島土砂災害)
602			3	犬の異変で危険察知 広島土砂災害で被災・佐藤さん一家 1匹は行方不明
603	9月6日	朝刊	1	来月上旬までに土砂撤去 広島土砂災害 市などが復旧工程発表 水道など修繕も
604			1	梅林小は8日から授業 広島土砂災害 一部避難者は旧病棟に移る

605		3	広島土砂災害の復旧工程表【専門家の見方】 広島大大学院・海堀正博教授／明治大危機管理研究センター・中林一樹特任教授
606		3	土石流・崖崩れが新たに５４カ所 広島土砂災害 過去２番目の計１６６カ所に
607		3	今夏の豪雨被害を一括「激甚」指定 広島土砂災害含め政府
608		3	復旧に６９億４５００万円 広島土砂災害 広島市が補正予算
609		3	初動対応の検証組織設置へ 広島土砂災害で広島市 市長「１、２カ月で中間報告」
610		5	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
611		5	東北派遣の職員、広島市に復帰へ くらし掲示板・広島土砂災害
612		5	乳幼児一時預かりを延長 くらし掲示板・広島土砂災害
613		5	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
614		5	広島大など医療班が検診 くらし掲示板・広島土砂災害
615		5	ボランティアの支援看護師募集 くらし掲示板・広島土砂災害
616		5	被災者引っ越し車に標準発行 くらし掲示板・広島土砂災害
617		5	避難者にマッサージ支援 くらし掲示板・広島土砂災害
618		9	土砂災害危険箇所の周知に力 広島県宅地建物取引業協会・津村義康会長に聞く 開発の規制強化必要 （広島土砂災害）
619		10	潮流 論説委員・高橋清子 災害情報の伝え方
620		11	広場 災害 危機管理に甘さ
621		21	広島土砂災害で義援金 セ・パ両リーグ
622		29	広島土砂災害復旧で防災防止を要請 建設業・行政に労働局
623		31	文化祭で広島土砂災害向けタオル募集 きょう山陽女子中・高 岡山
624		32	帰宅阻む土砂に消えぬ不安 「大竹で５０年に１度の豪雨」から１カ月 市営住宅で仮住まい続く藤野さん
625		32	ボランティアに力水 広島土砂災害 司部の旭鳳酒造 復旧を後押し
626		33	避難所はいま 旧病棟個室に「ほっと」 広島土砂災害・梅林小の授業再開控え移動 １１世帯２２人、今後の生活へ準備
627		33	亡くなった宮村さん宅跡 友人が献花 華やかな庭に思いはせ 広島土砂災害
628		33	〔団地〕 交流拠点の整備着々 かまど・水道備え災害も考慮 広島市安佐南区のＡ・ＣＩＴＹ
629		33	警備業者が夜間バト開始 広島土砂災害の被災地 「空き巣は許さない」
630		33	移動かまどで鍋料理 安佐北区の会社が炊き出し 広島土砂災害
631		33	生活保護相談あす電話窓口 司法書士が対応 広島土砂災害
632		36	遺族の悲しみに寄り添う警官 広島土砂災害 遺品返還…思い出に耳傾けて
633		36	奥田民生さん無料ライブ募金 広島土砂災害 ２２日に広島市中区
634		36	運転停止の雨量基準引き下げ ＪＲ可部線
635		37	復旧「とにかく急いで」 広島土砂災害 住民から計画に注文・不満
636		夕刊	1 エコノミー症候群で検診 広島土砂災害 避難所で広島大医師ら
637	9月7日	朝刊	1 道路ふさぐ被災車両…捜索に支障 広島土砂災害 財産権ネックに 市など「持ち主の承諾得て撤去」
638			1 山谷防災相が被災地視察 広島土砂災害 住民・ボランティアを激励
639			1 聴覚障害者への避難勧告に遅れ 広島土砂災害 通知ファクスは５時間後
640			3 きょうから復旧工程表説明会 広島土砂災害 安佐南区民向けに県・市
641			5 くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
642			5 民間住宅の申請７８世帯 くらし掲示板・広島土砂災害
643			7 ヤングスポット ８・２０ 悲しみ忘れない
644			9 フレオモウ 今井あい（１５） 牛田中３年＝広島市東区 広島土砂災害 人の温かさが心癒やす
645			21 中日・阪神選手会が募金活動 広島土砂災害

646			26	広島土砂災害は官民に教訓 松江市防災・危機管理アドバイザーの林さんに聞く 基準待たず情報提供をノルード確認し早期避難
647			26	広島土砂災害でボランティアバス 16～19日に松江・浜田発着
648			26	出雲西高生が支援の募金 広島土砂災害
649			27	避難所はいま 環境の変化で心身ケア 広島土砂災害 被災の知的・精神障害者を支援 社福法人やNPOが専門スタッフ派遣
650			27	出雲の味に笑顔 そばや五目飯800食炊き出し 広島土砂災害
651			28	復興へ一歩一歩 広島土砂災害【写真特集】
652			31	支援団体の役割分担進む 広島土砂災害 ボランティア割り振りや物資調達など 連携強め拠点開設へ
653			31	岩手からお礼の応援 広島土砂災害 古館・下玉利さん、畑復旧に汗
654	9月8日	朝刊	1	宅地の土砂撤去が見通せず 広島土砂災害 被災者の要請前提で市の作業遅れ
655			1	不明者の捜索続く 広島土砂災害
656			2	移転補助の利用進まず 土砂災害特別警戒区域の住民 広島ゼロ、全国でも57件だけ
657			4	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
658			5	社説 広島土砂災害の復旧工程 生活再建の道筋が肝心
659			20	ちゅーピー法律相談室・拡大版 広島土砂災害 生活再建に向けてのQ&A
660			24	スポットライト 広島土砂災害の現場で捜索活動をした県警機動隊警部補 宮川辰己さん（37）＝松江市上乃木4丁目 住民の情報提供に感謝
661			25	避難所はいま 行き場なくとどまる葛藤 梅林小きょう授業再開 公営住宅に落選／「借り上げ」申請中 広島土砂災害
662			25	復旧カフェが感謝の無料ライブ 広島土砂災害の八木地区 泥搬出手伝った客・住民招く
663			25	毘沙門堂の復旧に学生ら汗 広島土砂災害の緑井地区 高齢住民を手助け
664			28	広島土砂災害の被災者、新居で再出発 知らぬ土地に希望と不安
665			28	復旧計画に質問や注文 広島土砂災害で初の住民説明会 安佐南区
666			28	奉仕も不屈 崇徳ナイン 梅林小で清掃活動参加 広島土砂災害
667		夕刊	1	梅林小が授業再開 広島土砂災害 市は17日までに初動検証組織
668			1	12日から受け付け 市の義援金配分申請 広島土砂災害
669	9月9日	朝刊	1	行政支援の利用低迷 広島土砂災害 見舞金など申請181世帯止まり
670			1	梅林小で授業再開 広島土砂災害 市、17日までに初動検証組織
671			3	初動検証に市長は指導力を 広島土砂災害・吉井・中央防災会議専門委員に聞く 危機管理体制も再確認
672			3	現地対策本部を縮小 広島土砂災害で政府 「一定のめどついた」
673			5	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
674			5	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
675			5	島根県市長会が54戸提供 くらし掲示板・広島土砂災害
676			5	福山の長寿会が義援金 くらし掲示板・広島土砂災害
677			5	土地境界など無料相談 くらし掲示板・広島土砂災害
678			5	妊婦の健診や出産費用支援 くらし掲示板・広島土砂災害
679			5	可部の施設5室提供 くらし掲示板・広島土砂災害
680			25	雨量基準設定は6割どまり 土砂災害の避難勧告 広島県内23市町調査 柔軟運用も鍵 （広島土砂災害）
681			25	要対策箇所を再調査 広島土砂災害受け島根県 年度内に対象地点抽出
682			25	早期復旧訴え知事に要望書 広島土砂災害で県議会
683			28	周辺市町から心強い応援 広島土砂災害・ボランティア派遣続々 社協など円滑活動に一役
684			28	空き巣被害に注意を 広島土砂災害 可部地区で防犯連/パトロール
685			28	児童が善意のタオル送る 広島土砂災害で国府小（広島県府中市）

686			29	感謝の伝言板 被災地明るく 広島土砂災害 街角・避難所に児童ら手作り
687			29	避難所はいま 避難者実数が発表と差 広島市 退所報告に強制力なし 広島土砂災害
688			29	ボランティア用の往復バス運行 広島土砂災害 尾道市社協が１９日
689			32	被害に応じ支援・見舞金支給 広島土砂災害で国・県・市 最大で３００万円超
690			32	義援金配分申請は１２日から 広島市受け付け 最多で５０００世帯 広島土砂災害
691			33	カンボジアに届けた愛 広島土砂災害で犠牲の岡村さん １０学校の建設支援
692			33	児童の笑顔戻った 広島土砂災害の梅林小再開 避難者「早く出たい」
693		夕刊	1	政府が現地本部縮小 広島土砂災害 西村内閣府副大臣が本部長離任
694	9月10日	朝刊	1	１遺体発見で死者７３人に 広島土砂災害 政府現地対策本部は縮小
695			3	「不備」連鎖で初動に遅れ 広島土砂災害で広島市検証へ 【問題点まとめ】
696			3	避難者８人に血栓 広島土砂災害で８６人診察 狭い生活空間が影響
697			3	安佐北区で復旧説明会 広島土砂災害 県市がきょう・あす
698			5	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
699			5	島根県邑南町も義援金１００万円 くらし掲示板・広島土砂災害
700			5	ＪＯＣが２００万円寄付 くらし掲示板・広島土砂災害
701			5	呉の自治会連が義援金１００万円 くらし掲示板・広島土砂災害
702			5	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
703			9	ひとネット 土砂災害の復旧サポート 広島
704			19	いまグリーフケアを 広島土砂災害 上智大の研究所・高木さんに聞く 大切な人を生活なくした悲しみ…どう向き合う
705			25	安佐市民病院議案は先送り ９月定例会で広島市方針 広島土砂災害の復旧優先
706			25	駅前大橋線など計画通り実施方針 市議会特別委で広島市 広島土砂災害復旧と「時期重ならず」
707			28	迂回路コースで路線バス再開 広島土砂災害の松山地区 ２０日ぶり、住民ら一安心
708			28	坂町文化スポーツ施設が完工式 中心部の防災拠点兼ねる 広島
709			28	広島土砂災害で慈善コンサート ２３日福山
710			29	避難所はいま 避難者と掃除で心通わす 梅林小５年生 生活リズム共有 広島土砂災害
711			29	被災の子育て世帯向けにサロン開設 あす広経大興動館 学生グループ運営 広島土砂災害
712			29	見て読んで防災考える コーナーに１８０冊 市中央図書館 広島土砂災害
713			29	「力になりたい」東日本大震災の被災地から 福島の住民ら義援金 紙芝居上演の市民団体に 広島土砂災害
714			29	「力になりたい」東日本大震災の被災地から 宮城の住職が土砂撤去に汗 広島土砂災害
715			29	空き巣防げとカメラ２３台設置 あすから県警 広島土砂災害
716			32	義援金は１世帯５万円 広島市１次配分 一部破損などにも 広島土砂災害
717			32	全国の善意６億円託す 広島土砂災害で本社社会事業団 広島市と日赤に
718			32	不明者搜索協力でＪＲ可部線１４本運休 広島土砂災害 きょうは１８本 代行輸送
719			33	土石流が過去に数回 広島土砂災害の八木３丁目 池田名誉教授、調査で痕跡発見
720			33	広島土砂災害の建物解体費名目で詐欺未遂 府中市内
721		夕刊	1	あす初動対応の検証部会 広島土砂災害で市
722			1	遺体は西田さんと断定 広島土砂災害 残る不明１人搜索に全力
723	9月11日	朝刊	1	勧告時点で避難先すべて未開設 広島土砂災害・安佐南区の４施設 市発表と食い違い 最大３時間半遅れ
724			1	被害家屋４５４０軒に増える 広島土砂災害 発見遺体は西田さんと断定
725			3	広島土砂災害の初動検証、きょう初会合 市が部会設置
726			3	技術専門家が現地調査 広島土砂災害の安佐北区 復旧へ市が派遣要請
727			3	義援金一律１０万円に倍増 広島土砂災害で市１次配分
728			4	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報

729			4	ブラジル県人会が義援金　くらし掲示板・広島土砂災害
730			4	廃車手続きの無料相談　くらし掲示板・広島土砂災害
731			4	くらし掲示板・広島土砂災害　企業の支援
732			24	野球連盟中国地区連盟などが義援金　広島土砂災害
733			28	広島土砂災害対策に１４０億円　広島県が予算計上方針　復旧費など
734			29	山陽高生（浅口）８８人が泥や家具撤去　広島土砂災害　「復旧へ役に立ちたい」
735			30	可部東地区で土砂撤去続く　広島土砂災害３週間　大林・三入は復旧進む
736			31	広島土砂災害の「今」ラジオで発信　広経大キャンパスＦＭ局　避難生活の悩み・復旧現場の実情…学生４０人が取材
737			31	４兄弟が地域復旧に力　広島土砂災害・飲食店被災の西村さん　営業再開より近隣が先…緑井拠点に撤去作業
738			31	市民ら企画の応援イベント次々　広島土砂災害　中区でロコドルコンサート・お笑いライブ
739			31	避難所はいま　避難者実数は７０世帯１０８人　広島土砂災害・９日夜時点　広島市が発表基準を変更
740			31	被災者夫婦が愛犬と再会　広島土砂災害時に生き別れ
741			34	小規模崖崩れが誘発　広島土砂災害・八木３丁目の土石流　谷上部で発生　調査団の教授指摘
742			35	避難所の開設遅れ「運営の検証・改善を」　広島土砂災害　被災者、要望や疑問
743			35	「今でも信じられぬ」　西田さん死亡確認で知人　広島土砂災害
744		夕刊	1	広島市の初動「不十分明らか」　広島土砂災害　市の検証部会が初会合
745			1	自衛隊が一部除き撤収　広島土砂災害
746	9月12日	朝刊	1	初動不備で防災計画見直し　広島土砂災害　市検証部会が初会合
747			1	両陛下の広島訪問検討　広島土砂災害
748			3	防災計画の「古さ」批判　広島市の検証部会　広島土砂災害　避難の促し方焦点
749			3	市検証部会の初会合は非公開　広島土砂災害
750			6	くらし掲示板・広島土砂災害　生活情報
751			6	公営住宅第３期受け付け　くらし掲示板・広島土砂災害
752			6	全壊家屋を無料撤去　くらし掲示板・広島土砂災害
753			6	人形劇に招待　くらし掲示板・広島土砂災害
754			6	復興住宅融資も申し込み受け付け　くらし掲示板・広島土砂災害
755			6	東京都議会が義援金を送る　くらし掲示板・広島土砂災害
756			6	安芸高田市民ら貸自転車を寄贈　くらし掲示板・広島土砂災害
757			6	島根県議会が義援金送付へ　くらし掲示板・広島土砂災害
758			6	安芸高田１９校の児童・生徒会も義援金を送る　くらし掲示板・広島土砂災害
759			6	くらし掲示板・広島土砂災害　企業の支援
760			19	円滑なボランティア活動を　広島土砂災害　３連休前にポイント整理 被災者への配慮・意向把握を／効率アップへ平日参加も
761			21	ロッテが義援金１００万円　広島土砂災害
762			27	広島土砂災害ボランティアを募る　岡山県社福協
763			28	復旧現場巡りかき氷の奉仕　安佐北区で広島大生　作業に一息…残暑に涼　広島土砂災害
764			28	支援お返しへ住民募る　８８年前に土砂災害の安芸区畑賀地区　広島土砂災害
765			29	被災地に防犯カメラ設置　広島土砂災害でＮＰＯ　空き巣犯罪もう許さない　不安の声受け１２台無償貸与
766			29	地元音楽家の支援に力　慈善演奏会や募金呼び掛け　広島土砂災害
767			29	避難所はいま　おやじカフェでひと息ついて　佐東公民館で無料接待　広島土砂災害
768			32	安佐北区でも避難所一部開設遅れ　広島土砂災害　７カ所で５～５０分
769		夕刊	1	義援金の配分申請開始　広島土砂災害　被災者が窓口訪ねる
770	9月13日	朝刊	1	広島県「災害死ゼロ」県民運動へ　広島土砂災害受け年度内に条例

771			1	義援金申請 4 カ所で開始 広島土砂災害で広島市
772			3	両陛下に現状報告 広島土砂災害で湯崎知事
773			3	川底堆積の土砂流出 災害復旧技術専門家の調査終了 広島土砂災害 安佐北区三入地区の高谷川 「急カーブ」改良など助言
774			3	砂防ダムの土砂撤去終える 広島土砂災害の大町地区で国交省
775			4	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
776			4	呉の奉仕団が義援金 1 0 0 万円 くらし掲示板・広島土砂災害
777			4	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
778			9	地場建設業が復旧フル操業 広島土砂災害 人不足の中やりくり
779			10	中日が義援金 1 0 0 万円 広島土砂災害
780			24	悩み事は何でも話して 看護師ら安佐北区の被災者ケア 血圧や脈拍の測定も 広島土砂災害
781			24	被災者癒やす手作り巾着袋 廿日市の女性会が贈る 広島土砂災害
782			25	避難所はいま 長崎から励ましレター 障害者施設メンバー「えがおパワーおくります」 平和研修が縁 佐東公民館に掲示 広島土砂災害
783			28	警戒区域の調査結果公表へ 1 6 日から広島県 (広島土砂災害)
784			28	被災者「義援金ありがたい」 広島土砂災害で 1 次分申請 初日は 5 1 6 世帯
785		夕刊	1	義援金申請が相次ぐ 広島土砂災害 週末の窓口は会社員目立つ
786	9月14日	朝刊	1	斜面の大半、保安林に指定されず 広島土砂災害・土石流多発の阿武山 適切管理されず 県「理由は不明」
787			1	1 次義援金に申請相次ぐ 広島土砂災害 市窓口で 3 9 9 世帯
788			5	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
789			5	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
790			8	広島土砂災害…被災者の力になりたい 小中学生の取り組み特集 児童会中心に募金活動／土砂片付け 1 0 日間
791			25	被災地から 八木用水石碑の流失惜しむ 建造者・桑原卯之助の功績たたえる 早期発見に住民ら望み 広島土砂災害
792			25	高校生支援隊に洗浄機など贈る 広島土砂災害でソロブチミスト広島
793			26	仲間と進む 広島土砂災害 【写真特集】
794			28	届いた義援金 2 1 億 8 0 0 0 万円 広島土砂災害 広島市と県配分委分 全額被災者へ
795			28	ボランティア団体参加の申し出断る 広島土砂災害で市本部 土砂撤去が一段落
796			29	あの日に生まれた命 陣痛と恐怖耐え朝待つ 出産で里帰りの有田さん 広島土砂災害
797			29	半旗掲げ木原さん追悼 広島土砂災害 安古市高で体育祭
798	9月15日	朝刊	1	子どもの一部に心の不調 広島土砂災害 雨音が怖い／頭痛やめまい訴え／急に涙 専門家は P T S D 懸念
799			1	お好み焼きで復旧後押し 広島土砂災害 ボランティア高校生が提供
800			4	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
801			29	被災地から 元気取り戻す秋祭り決行へ 「ひととき楽しみを」 広島土砂災害で別所住宅
802			29	タオルのエール 広島土砂災害 広島城北中生が可部東で配る
803			33	個人事業主の営業再開に壁 広島土砂災害 店舗・資材被災で廃業や縮小 公的融資の返済不安視
804			33	生活再建へ意見交換 安佐北区団地住民と弁護士ら 広島土砂災害
805	9月16日	夕刊	1	義援金申請 1 5 5 1 世帯に 広島土砂災害 不明者の搜索続く
806			4	防災情報 テレビに配信 パナソニック
807	9月17日	朝刊	1	特別警戒区域の指定急ぐ 広島土砂災害 県が国に手続き要請
808			1	復旧状況の図 市が張り出し 広島土砂災害
809			3	減災県民運動を実施へ 広島土砂災害受け来年 4 月から 県、年度内に条例
810			3	きょう内閣府政務官を現地派遣 広島土砂災害 知事や市長と会談へ
811			4	遅れた初動の実態 【図説】広島土砂災害

812		5	くらし揭示板・広島土砂災害 生活情報
813		5	くらし揭示板・広島土砂災害 企業の支援
814		5	浜田市議会も義援金 くらし揭示板・広島土砂災害
815		5	滋賀県が見舞金 くらし揭示板・広島土砂災害
816		5	呉市児童協が義援金62万5000円 くらし揭示板・広島土砂災害
817		19	巨人が義援金100万円 広島土砂災害
818		22	Jリーグが義援金200万円 広島土砂災害
819		29	危険箇所を独自点検 広島土砂災害受け県未調査の3町 海田・熊野・坂町
820		29	市、復旧に102億円 新たに補正予算案決定 広島土砂災害
821		32	被災者に眼鏡を…無料で新調 可部の販売店「少しでも力に」 広島土砂災害
822		33	被災地から 「禹王サミット」無念の中止 来月予定の治水イベント 安佐南区のNPO「復興に力注ぐとき」 全国組織から見舞いの菓子 広島土砂災害
823		33	梅林小に励ましの横断幕送る 阪神大震災被災地・神戸などの小中学生 広島土砂災害
824		36	写真洗浄 あせぬ思い出 広島土砂災害 広島の伊藤さん 被災者へ奉仕始める
825		36	被災者の健康管理を充実 広島市方針 保健師が仮住まい訪問 広島土砂災害
826		37	被災「空き家」は義援金対象外 広島土砂災害の広島市対応 転勤で不在でも 線引きに不満
827		夕刊	1 「日常生活の再建に全力」 広島土砂災害 議会で市長説明 全員で黙とう
828	9月18日	朝刊	1 広島土砂災害に257億6200万円 広島市関連予算 定例会に議案提出
829		3	広島土砂災害の復旧「速やかに」 防災租、地震対策も具体化へ
830		3	土砂災害危険箇所、99%の自治体が住民周知 避難経路は24% 国交省まとめ (広島土砂災害)
831		4	くらし揭示板・広島土砂災害 生活情報
832		4	1億257万円をイオンが寄付 くらし揭示板・広島土砂災害
833		4	企業借入れ保証枠を拡大 くらし揭示板・広島土砂災害
834		4	くらし揭示板・広島土砂災害 企業の支援
835		4	税務手続き無料相談会 くらし揭示板・広島土砂災害
836		22	山口県、特別警戒区域指定を1年前倒しへ 16年度までに全19市町 (広島土砂災害)
837		22	土砂災害対策154億円に増額 広島県の一般会計補正案 広島土砂災害
838		23	井原市社協がボランティア募る 広島土砂災害
839		24	新ごみステーションを贈る 広島土砂災害の安佐北区可部東 業者手作りの3基
840		25	広島土砂災害復旧など21議案上程 広島市議会
841		25	「防災メール」登録1割増 広島市消防局が配信 広島土砂災害受け6万件超す
842		25	被災地から 避難所訪問しマジック披露 東区の戸井さん 広島土砂災害
843		25	広島土砂災害でボランティア募集 三原市社協
844		29	2人に着せたかった 亡き兄弟にサッカー代表ユニホーム 広島土砂災害 悲報知った協会が贈呈
845		29	無料ランチ提供し憩いの場に 安佐北のNPOが週2回 余剰食品を有効活用 広島土砂災害
846		夕刊	1 湯崎知事「災害に強い県づくりへ」 議会で表明 広島土砂災害
847		1	八木地区で遺体発見、最後の不明女性か 広島土砂災害 身元確認急ぐ
848	9月19日	朝刊	1 遺体発見、最後の不明者か 広島土砂災害の死者74人に あす発生1カ月
849		1	道路の土砂99%撤去 広島土砂災害の安佐南・安佐北区 宅地は半分以上か
850		3	警戒区域指定に国は関与強化を 自民PTが提言案 広島土砂災害受け
851		3	砂防・治山ダムを40基整備へ 広島土砂災害の安佐南・安佐北区 年内にも着手
852		3	衆参災害対策委が現地視察 広島土砂災害 早期の復旧支援確認
853		3	損保支払いは35億円見込む 広島土砂災害で協会推計

854		4	くらし掲示板・広島土砂災害 生活情報
855		4	呉への転居者向け生活相談窓口 くらし掲示板・広島土砂災害
856		4	広島県大阪センターに見舞金など届く くらし掲示板・広島土砂災害
857		4	来月4・5日に無料税金相談 くらし掲示板・広島土砂災害
858		4	くらし掲示板・広島土砂災害 企業の支援
859		30	基準地価、広島土砂災害で二極化方向か 安佐南の住宅地など専門家予測 被災有無が影響
860		30	知事、災害死ゼロへ決意 広島県議会の定例会開会 広島土砂災害
861		32	土砂被災者の心身ほぐす 広島や福山のセラピストら30人「癒し隊」 ボランティアの作業後ケアも 広島土砂災害
862		33	被災地から 休日返上…消防隊員100人集結 広島土砂災害 がれき撤去で中四国から 府中町本部の東さん呼び掛け
863		33	山陰の海の幸に笑顔 浜田の料理人が炊き出し 広島土砂災害
864		36	被災地区宛て配達不能300通 広島土砂災害 住民の足取りつかめず
865		37	濁流をレンズは捉えた 広島土砂災害の八木地区で賀屋さん 避難の屋根で撮影
866	夕刊	1	最後の遺体は大屋さん 広島土砂災害 政府は現地調整室を閉鎖
867		3	やっと夫婦一緒に 広島土砂災害 最後に判明の大屋さん